

第一節 ポルトガル商船来航と大村氏

十五世紀に始まった大航海時代は、一四一五年(応永二十二)、ポルトガル国王ジョアン一世がモロコ人(イスラム教徒)に対する十字軍遠征という名目で、モロッコ王国のセウタを攻撃・占領することで始まったとされる。ヴァスコ・ダ・ガマが一四九八年(明応七)五月にインドのカレターに到達して以来、ポルトガルは一五一〇年(永正七)にゴアを征服して、ここを東洋進出の拠点とし、翌年にはマラッカを攻略した。当地で中国についての情報を入手したポルトガル人は、中国との通商貿易を願望したが、海禁政策を採る明政府はこれを許さなかった。



写真4-1 カラベラ船(模型) (大村市立史料館所蔵)



写真4-2 火縄銃 (大村市立史料館所蔵)



写真4-3 ランタカ砲 (大村市立史料館所蔵)

東シナ海を跳梁する倭寇との密貿易を始めたポルトガル人が琉球に漂着したのは、イエズス会の教会史家ゲオルク・シュールハマーによると、一五四二年(天文十一)である。翌年、シヤムを出帆した中国船に乗っていたポルトガル商人三人が種子島に着いたが、これは中国人倭寇王直(五峰)が導いたとされる。彼は松浦氏の保護を得て平戸に印山屋敷を構えていた。一五四三年以降、ポルトガル船は西南九州に毎年来航した。ポルトガル国

王ジョアン三世がカピタン・モール（司令官）制を日本渡航船に導入したのは一五四六・四七年のことであり、一五五六年以降ポルトガル政府任命のカピタン・モールのもとで日本貿易が行われた^①。

ポルトガル船が初めて平戸に到着したのは一五五〇年（天文十九）夏である。ポルトガル船は一五五三年に再来航し、一五五四年と一五六〇年を除いて毎年のように平戸に來航した。一五六一年（永祿四）には五隻のポルトガル船が來着し、平戸の繁榮は頂点に達した。

◆ 横瀬浦開港

フランシスコ・ザビエルが日本を去ったあと、日本イエズス会の上長を務めていたコスメ・デ・トルレス神父は、一五五六年にインドのイエズス会副管区長として日本を視察したことのあるベルシオール・ヌーネス・バレットに宛てて、一五六〇年十月二十日付の書翰を豊後府内から書き送って、ポルトガル人が平戸の港に取引のために行かないようにとの訓令をインド副王が出してくれるよう要望した。すなわち、

日本の当地方に来るポルトガル人たちが平戸の港に取引をするために行かないよう副王閣下の訓令が出されるなら、私たちにはたいへん慶ばしいことです。それは、その土地ではそこに住んでいるキリスト教徒たちにこれまで多くの恥辱を与え、また今も恥辱しているためです。そして、彼らにデウスの教えを棄てさせようとしており、

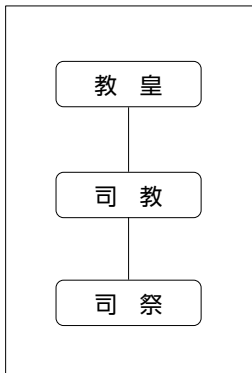


図4-1 カトリック教会の階制

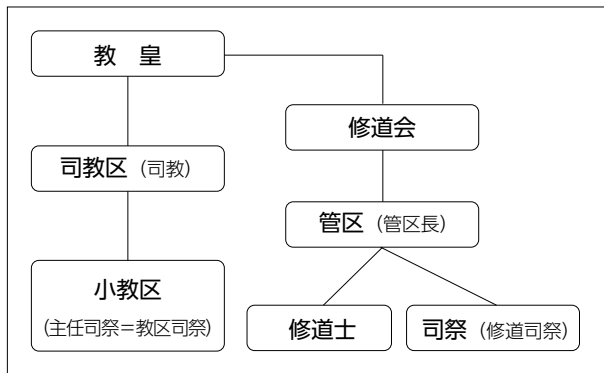


図4-2 カトリック教会の組織

棄教しなければ彼らをその地から追放するでしょう。

今年、デウスの教えを棄てなかつたために、既婚の者九、一〇人がこの豊後に来しました。彼らは妻と子、父と母、そして財産を捨てて、悪魔の家で豊かであるよりも、主(デウス)の家で貧しく生きることを望みました²⁾。

トルレス神父は、一五四九年八月十五日にザビエルと共に鹿児島に到着し、一五五〇年九月初めから一年間平戸において宣教活動に従事していた。ポルトガル船の平戸初来航は前述したように一五五〇年であり、この時、ポルトガル人たちは鹿児島から彼らを訪ねて来たザビエルを敬愛の念をもって熱烈に迎え処遇した。平戸の領主松浦隆信はこのことに注目し、上洛のため再度平戸を訪れたザビエル一行を厚遇し、同地に一人留まったトルレス神父を厚く処遇した。トルレスが山口に去つたのち、ポルトガル船は一五五三から一五六一年まで毎年のように平戸に来着した。

ポルトガル船が平戸に入港すると、宣教師が豊後府内から同地を訪れ、平戸島の西岸地方の春日、飯良、獅子、生月島及び度島を巡回宣教した。弘治元年(一五五五)にバルタザール・ガーゴ神父が平戸を訪れ、同地方のキリシタンはおよそ五〇〇人に増加していた。ポルトガル船二隻が来航した一五五七年には、トルレスはガスパール・ヴィレラ神父を遣わしてガーゴ神父を補佐させた。ヴィレラ神父は平戸滞在一年で一三〇〇人をキリスト教に導いたとされる。

キリシタンたちは改宗者が増加したことに力を得て、仏教寺院と衝突することをいとわず、寺社から仏像等を集めて焼き、経典を焼却するまでに高揚した。神父たちがこうした行為を容認していたため、キリスト教は仏僧や仏教徒たちの批判的となり、その怒りが神父やキリシタンたちに向けられたことは当然のことであった。領主松浦氏はこうした事態を鎮めるためにヴィレラ神父に対して領外退去を促した。ヴィレラが領外に追放されたのは一五五八年である。

翌一五五九年、ポルトガル船が平戸を出航して間もなく、松浦隆信はキリシタンの主要人物に棄教を命じ、棄教を拒んだキリシタンの財産を没収した上で、彼らを領外に追放した。トルレス神父が前記の一五六〇年十月二十日付の

書翰を書き認め^たしたのは、一五五九年のキリシタン追放事件に強い衝撃を受けたためであろう。しかも、一五五八年に平戸で二人が殉教死していた。

■一・横瀬浦開港交渉

ルイス・フロイス神父が一五八五年（天正十三）から書き始めた「日本史」の第一部四〇章の冒頭に、次のような記事が見られる。

豊後にいるパードレ、コスメリーデ・トルレスは、自らの余生に打ち込むことができるような新規改宗「事業」が少しもなく、時が経ってゆくを見て、甚だ遺憾に思った。それで、彼はこの聖なる熱意に突き動かされて、私たちの会員たちが平戸から追放されているためすでにそこに入ることができなかつたので、イルマン、ルイス・デ・アルメイダが日本人二人と共に、平戸からニレグア（ニレグアは約五・五キロメートル）あるドン・アントニオ（籠手田安経）に属していた度島の島 *Illa de Tacuxima* に秘かに赴くように、そして、相応しい港があるならば、定航船 *a nao de carreira* が下 *Ximo* の領主たちの港に行くとの期待を彼らに与えて、彼らの誰かがキリスト教徒になるための方法があるかどうか調べるように命じた。なぜなら、イルマン、ルイス・デ・アルメイダは、こうした問題に対して驚くべき才覚と資質を持っているからである（③）。

フロイスは、上長トルレスが下すなわち九州の領主、平戸の松浦氏以外の者をキリスト教に改宗させるためにはポルトガル船の来航が重要なカギになるとの認識のもとに、打開策を講じるためイルマン・アルメイダを松浦氏の重臣であるキリシタンの籠手田アントニオの許に遣わしたことを明らかにしている。フロイスは、このことを一五六二年の章で述べ、その文章に続けて、一五六一

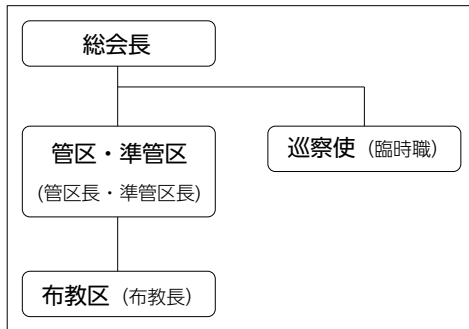


図4-3 イエズス会の組織

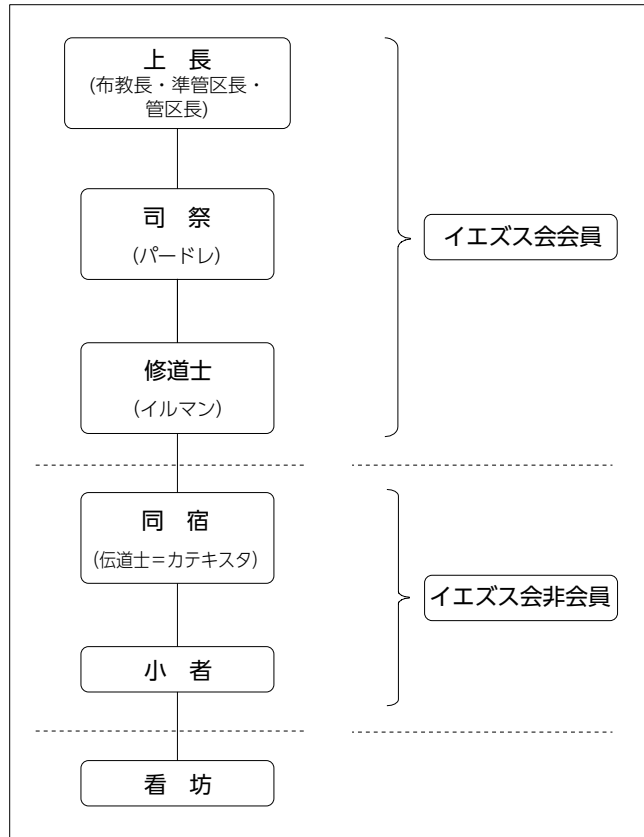


図4-4 日本のイエズス会

を訪れてから平戸に入って、同地に二〇日間滞在し、八月二十二日に平戸を発って博多に至り、八月末に病体をかかえて府内に戻った。彼は平戸滞在中には来航したフェルナン・デ・ソウザの船に泊まり、当地の教会が破壊されていたため船上に仮の祭壇を設けて聖画像を飾り、平戸やその他の地のキリシタンたちがこれを拜むための便宜を図った。このため、各地からキリシタンが小舟を操ってポルトガル船にやって来た^⑤。

カピタン・モール(司令官)ソウザを含むポルトガル人一四人が商取引のもつれから殺害された、いわゆる宮ノ前

年にフェルナン・デ・ソウザの定航船が平戸に来た時に、アルメイダが秘かに平戸に赴き、ポルトガル船の新しい来航先の調査のために画策したことを報じている。

アルメイダはこの年、トルレスの使命を帯びて平戸に向かった。六月七日に豊後府内を発ち、博多を経由して六月下旬に度島に至り、同島に一五日間滞在してキリシタンたちへの対応に当たった。更に生月島を訪問したのち、平戸島西岸の獅子飯良、春日に行き、再度生月島

事件が発生したのは、アルメイダが平戸を出発した八月二十二日以降のことであったが、アルメイダが平戸滞在中に司令官ソウザと話し合い、平戸以外の地に港を探すことについて、既に意見を交わし、実際に平戸に代わる新たな港探しが行われた。アルメイダは府内に戻ったのち、薩摩の坊津に入港したジャンク船の船長マノエル・デ・メンドーサが十一月に府内を訪れ、十二月に坊津に戻る時に、彼に同行して薩摩に行き、翌一五六年六月になって府内に戻って来たため、この間、新たに開かれる横瀬浦港（巻頭写真）についての交渉には関与する機会はなかった。

健康を回復したアルメイダは、その間に進捗した横瀬浦開港問題の最終決着のために、一五六年七月五日、博多に赴くイルマン・フェルナンデスと共に府内を発ち、十二日頃に日本人伝道士のダミアンと共に博多から平戸に向かい、同地にダミアンを留め、いつも一緒であったキリシタンのベルシオールを伴って、七月十五日に待望の横瀬浦に到着した。そこで彼が目撃したのは一隻のポルトガル船であった。スンダを出帆してマカオを経由して来航したカピタン・モール、ベドロ・バレット・ロリンのナウ船であった。ポルトガル船が平戸ではなく横瀬浦港に直航して来たのは、新しい貿易港開港についての情報が既に前年秋にマカオに帰航したナウ船などによってもたらされていたからであり、また平戸における司令官ソウザ等の殺害事件が深刻に受け止められていたためであった、と思われる。

アルメイダは、横瀬浦に着いた翌日、ポルトガル人数名を伴って大村に行って領主純忠に会い、同地に二日間滞りして既に交渉が進められていた横瀬浦開港と内地譲渡について協議した⑥。アルメイダが七月十六日に大村を訪れて横瀬浦開港問題について最終的な協議に入るまでに、イエズス会は大村氏とどのように接触し、同氏との交渉を進めたのであろうか。

一．交渉の第一段階

フロイスは「日本史」(第一部四〇章)において、一五六一年にフェルナン・デ・ソウザのナウ船が平戸に来航した時に、アルメイダが秘かに平戸に行つて新たな港探しについて、ナウ船のバイロット(水先案内人)であるドミンゴス・リベイロと、都みやこの市のキリシタンであるゴノエ・バルトロメウ *Gonçalo Bartholomeo* と話し合ったことを伝え

ている。すなわち、「平戸のヒシヨ（肥州）*Fixo de Firrado* に覚られることなく極秘に大村殿のヨコシウラ *Vocoxiura*（横瀬浦）というある港を調査・測深すること」がまずなされること、そして、「ナウ船がそこに十分に入港することができることが判った時には、日本人で都の出身であるバルトロメウが大村殿に対して、彼がキリスト教徒になることを望み、彼の領内でデウスの教えを説く許可を与えようとするならば、靈的にも現世的にも大きな利得が彼に生じるであろう、と説得するということであつた（2）」。

水先案内人のポルトガル人リベイロとゴノエ・バルトロメウは、すぐに屋根付の漁船 *Junca Tuna de pescadores cuberta*、すなわち家船えぶねで大村領の沿岸を調査し、横瀬浦の港を探索した。横瀬浦港がポルトガル船の入港に適し、十分な深さであると確認した彼らは、直ちに大村に赴いて、大村家の執政官（首席家老） *principal regedor* である伊勢守殿 *Xenocaminhão*（朝長伊勢守純利）と交渉し、はなはだ好ましい返答に接した。

伊勢守殿との会見が上首尾にいったとの彼らの印象は、返答された次の内容から得られたものである。一つには、「コスメ^{II}デ^{II}トルレス神父が豊後からその地に来たいと望むなら、デウスの教えを説くための許可を、そして、「それを」理解してキリスト教徒になりたいと望む者たちには彼らが洗礼を受けるための許可を与えるだろうとのこと」、そして一つには、「大村の殿自身がキリスト教徒になる件に関しては、パードレ（トルレス）が来たのちに、この件について直接に彼（殿）と共にゆっくり話し合われるだろう」（3）との発言に拠つたものである。

二、交渉の第二段階

ドミンゴス・リベイロとゴノエ・バルトロメウの二人が持ち帰つた返答は、平戸滞在中のアルメイダによって府内のトルレス神父の許にもたらされた。アルメイダが府内に帰着したのは前述した一五六一年八月末である。トルレスはこの返答、すなわち合意 *concerto* をより確実なものにするために、内田トメなるキリシタンを大村に派遣した。内田トメは山口出身で、ザビエルが泊まった家の最初の宿主であり、ザビエルから洗礼を受け、山口が内乱のため混乱した時にトルレスに従つて豊後府内に避難した。一五五七年に府内教会の敷地内に病院が設立されると、キヨ

Carta do irmão Luis Dalmeida pera os irmãos da India, escrita no porto de **Vocoxiura**, a 17. de Nouembro, de 1563.



Anto que a nao foi partida, que foi aos vintoito de Outubro, o padre Cosme de Torres se comecou a fazer pres tes pera ir a Firándo, por lho pedir assi dom Antonio, pera confessar a sua mulher, & parentas, & porque assi o desejava o senhor de Firándo, por lhe parecer que com

写真4-4 ルイス・アルメイダの1563年11月17日付、オ(ヨ)コシウラ(横瀬浦)港発信書翰の表題
(1598年 エヴォアラで出版のCartas do Japãoに所載)

ウゼン・パウロと共に内科医として従事した人物で、トルレスの信頼が厚かったことが推測される。内田トメは大村殿、すなわち大村純忠に直面して、キリスト教への改宗の約束とその意志を確認する使命を帯びていたようであるが、この件についての言及は、フロイスの「日本史」にはない。フロイスが報じるころによると、純忠は内田トメに次のように意向を表明した。

殿は彼に繰り返し返し、自らの署名したものによってそのことを彼に保証するだけでなく、デウスの教えを自分の所領内で宣布するためにイルマン(修道士)一人を遣わしてくれよう強く求めた。そして、教会を建てて、彼らに知行 *seso* を与えたい。またヨコシウラ(横瀬浦)の港そのものを教会に与え、そこにキリスト教徒たちの大きな集落が造られるようにしたい。彼らの家々にはポルトガル商人が彼らの商品をもって安全に泊まることができるようにしたい。また、ポルトガル人たちが同港に来たいと望むならば、彼は彼らに一〇年間関税を免除し、他にも多くのものを提供したい、と言った⁹⁾。

内田トメはこの返答をもって豊後府内に戻った。彼がいつ府内を発ち、いつ帰着したのかは不明であるが、彼はアルメイダが府内に戻った一五六一年八月末から早い時期、恐らく九月中旬頃から十月までに府内を出発し、十一月までには府内に帰着したようである。

三、交渉の第三段階

フロイスの「日本史」によると、トルレス神父は内田トメが持ち帰った案件について完全な協定を結ぶために再びアルメイダを直ちに送ることを決断した。交渉は最終段階を迎えていたようである。しかし、交渉の鍵を握るイルマン・アルメイダは前述したように十二月から翌年六月まで薩摩に旅行に出ているため、大村氏とイエズス会との協定締結に関する細部の交渉は、書面によってなされた。そのことは、アルメイダの一五六二年十月二十五日付書翰から知られる。

私は「横瀬浦に」到着した翌日に、早速、数名のポルトガル人を伴ってその地の領主を訪れるために赴いた。

それは、彼が去冬パードレ、コスメリデ^二トルレスに書き送ったことについて明白にするためであった¹⁰。
内田トメが交渉の第二段階で協定案の大筋について協議し、書状のやり取りを通じて練り上げられた案は、恐らく次のような内容であった。

彼（大村純忠）は自領内においてデウスの教えを弘布するためにイルマン一人を派遣してくれるよう、また教会をいくつか建ててくれるよう望み、そのために知行「地」¹¹ *enga* を与えたいとのことであった。その知行「地」は横瀬浦の港であって、周囲ほぼ二〇¹²レグア¹³の農民全員も一緒であった。そして、当港にはパードレたちの望まない異教徒は誰も定住することができず、また、彼はポルトガル人たちの船 *nao* が同港に入港しようとするならば、同船で取引をするために来る商人すべてに対して一〇年間関税を免除し、他にも多くの申し出をした¹⁴。

アルメイダはトルレス神父の名代として七月十六日に大村に領主純忠を訪れ、純忠から過分の厚遇を受け、二度饗応 *comer* された。純忠のもとを辞去したアルメイダは、純忠の名代である一人の執政官（朝長純利）との間で、書状に書かれていたことを承認するか否かの最後の詰めに入った。すなわち、アルメイダによると、

同じ要人 *senhor* との間に話し協議した後、彼が私に与えた回答は、すべてにたいして承認するというものであった。ただし、全員がキリスト教徒であるにもかかわらず、その支配下にある土地の一半は領主 *senhor* が所有し、他の一半は教会が所有するのがよいというものであった。私は彼に、その協定 *pedido* はかのパードレが満足するか否かを見極めないうちは受け容れることはできないと言った。これは、私と一緒に行った数名のキリスト教徒たちの助言によって私は実行したが、彼らは自分たちの慣習に非常に精通していた。このようにして、私は彼らがパードレの返答を待ち望むということで彼らと別れた¹⁵。

横瀬浦港とその周囲およそ二レグアの土地を農民と共にイエズス会に譲渡するとの案が、第一段階の交渉時に大村氏から提示されたか否かについては明らかでない。その提案は内田トメが大村に赴いて第二回目の交渉において

示されたように思われる。領主純忠には寺領という認識であったかもしれない。しかし、純忠は容易に決断できないキリスト教への改宗問題を表面化させることを回避するため土地の寄進を持ち出したのではないかと推測される。知行の付与・土地譲渡問題は交渉の最終段階で変更され、純忠とイエズス会が横瀬浦の周囲ほぼ二レグアの土地を折半することで決着をみた。

領主純忠は、なぜ最終段階の交渉で領地の折半案を持ち出したかということである。その背景には、一五六二年にポルトガル船が思いがけなく横瀬浦に入港したことによってもたらされる利益、そして諸国から蝸集して来る商人たちの存在について期待するところがあつたからであろうか。ポルトガル船がこの年に来航するに至つた理由は、既述のごとく一五六一年に平戸に代わる新港の探查がなされて、大村氏との間に開港交渉が順調に進展していったことがその年のうちに既にマカオに伝えられていたことであり、また平戸におけるカピタン・ソウザらの殺害事件が同時に報知されたためであつた。ポルトガル船の来航を知つた大村純忠には、ポルトガル船来航は大きな僥倖であつた。彼は横瀬浦港の維持・経営に積極的に乗り出すことを考え、自ら貿易の権益の一半を確保する方向に舵を切つたかのである。協定案作成の最終段階で一部手直しがなされ、横瀬浦が大村氏とイエズス会とに折半されたのは、領主純忠の意向が直截に反映されたものといえよう。イルマンのジョアン・フェルナンデスの一五六三年四月十四日付横瀬浦発信書翰には、次のような一節が見られる。

大村の王 Rey にして領主 Senhor である大村殿は、聖週の月曜日(四月五日)に教会の近くに一軒の家を造る目的をもつて再び当地にやって来た。なぜなら、彼はポルトガル人たちと交流するため、また当港の利益のため、多くの時間当港にいるからである。パードレ(トルレス)は彼に一通の証書を与えた「ので、」家は造られるであろう⑭。

フェルナンデスの右書翰の一節は、既に協定が結ばれたのちに書かれたものであるが、純忠が横瀬浦に自邸を建造しようとしていたことは、彼が横瀬浦港に強い期待とこだわりを持っていたことを示している。

アルメイダは交渉成立後、二日間大村に滞在し、朝長伊勢守の兄弟シンスケ(新助、朝長純安)殿の屋敷に泊まると、彼とその家族のためにキリスト教の教理を説明した。大村における宣教活動がこの時に始まった。アルメイダは大村氏との間に合意した協定を持参した者を早速豊後府内にいた上長トルレスに遣わして、同神父の裁可を仰いだ。彼は七月十八日には大村から横瀬浦に戻り、純忠の指図によって造築された家に一種の祭壇を設えて、トルレスからの連絡を待った。

ところで、水先案内人リベイロと行動を共にして横瀬浦港の調査・測深に当たり、最初に大村氏との間に交渉に当たったゴノエ・バルトロメウとはどのような人物であったのであろうか。彼は一五六〇年ないし一五六一年初めに京都でガスパール・ヴィレラ神父から洗礼を受けた最初のキリシタンの一人であったようである。彼がどのような筋の人間で、またなぜ平戸に下って来たかということである。彼がイルマン・アルメイダの信頼を得てポルトガル人水先案内人と行動を共にしたことから推測すれば、ポルトガル人と接触する立場にあって、ポルトガル語を少しは理解できたように思われる。彼は恐らく商取引のために平戸に下って来ていたのであろう。当時、平戸には堺の商人たちが多数の船隊を編成して来ていたし、実際、堺の納屋衆の一人日比屋了珪なども取引のために下地方に下って来ていた。ポルトガル人との商取引に関わっていたと思われるゴノエは、ヴィレラが京都で宣教活動を始めると、京都と下地方を往還していたこともあってあまり違和感を感じることなく四条姥柳町の教会に足を運んでいたのであろう。この「ゴノエ」について、姉崎正治は、「京都でキリシタンになって九州に落ちて来たいた近衛家の一員(15)」としている。

日本イエズス会が一五八八年(天正十六)に作成した「有馬のセミナリオ神学生名簿」には、都の神学生をも含む七〇名の神学生の名が記載され、その二〇番目に「Gony Paulus」なる者を認めることができる。生国は平戸(Franto)、年齢二〇歳、一五八五年にセミナリオに入り、ラテン語文法二級(中級)、音楽と日本文学は中程度の評価である(16)。平戸出身の「ゴノイ・パウロ」は一五六八年の生まれであり、横瀬浦開港に関わった「ゴノエ・バルトロメウ」

との関係が推測される。「ゴノエ Ganoye」は恐らく「ゴノイ」を誤聞・誤記した可能性が高く、「ゴノエ・バルトロメウ」と「ゴノイ・パウロ」は親子であったと思われる。「ゴノエ・バルトロメウ」は、貿易に関与して平戸に住みついたようである。ゴノイ・パウロは、一五八九年一月二十六日の名簿によると、「彼杵の修道士パウロ [F. Paulus de Sonogai]」とあり、一五八九年一月一日作成の名簿には、「大村領 [as terras de Omura] の「彼杵パウロ [Sonogai Paulo]」と記載される 16。パウロの父ゴノイ・バルトロメウは、ポルトガル船の来航地が平戸から大村領に移ったことに伴って彼杵地方に移り住んだと推測される。

■二・ポルトガル船の来航と横瀬浦の繁栄

アルメイダは一五六二年十月二十五日付の書翰で、横瀬浦の港の景観について次のように描写している。

この港は平戸からおよそ六レグアの距離であり、一つの入口（港口）があり、外海から入るときには、これにかなり近接してからでないとい入口は判らない。そして、港（佐世保湾）内は幅二レグアあるかなしかで、所によつては非常に狭い。両側に多くの集落と、船舶にとつてたいへん良好な港がある。私たちがいる所は、港口からおよそ半レグアで右手に入り込んでいる。その港の出入り口には高い円形の小島が一つ *hum ilheo alto e redondo* あり、その頂に一基の美しい十字架があつて、遙か彼方から見られる 19。

アルメイダが七月十五日に横瀬浦の港に着いた時、既に着津していたポルトガル船（ナウ船）のカピタン・モール、ペドロ・バレット・ロリンは、港の出入り口にある小島、すなわち八ノ子島に十字架を立てていた。それは、この小島の上空に三日間続けて午後には十字架が現れたためである、とアルメイダは証言する。この小島に聖ペドロの島 *Ilha de São Pedro* と命名したのは多分カピタン・モールのペドロ・バレットであつたであろう。

横瀬浦の入江は、漁船の船泊まりのようでもあつた。アルメイダが、「この入江には、妻子と共に海上で暮らしている漁師が多くおり、夜間には眠るためにこの小さな入江にやって来る。このため、この土地では魚が十分に供給さ



写真4-5 佐世保湾から見た横瀬浦入口と八ノ子島

なるためにアルメイダの許を訪れ始めたが、彼らは横瀬浦在住の者ではなく、平戸から来たキリシタンに伴って来た者たちであった。

上長のトルレス神父が豊後から高瀬・諫早経由で横瀬浦に向かっているとの情報もたらされたのは、アルメイダが豊後にいるトルレスらのためにポルトガル船から入手した越冬用の物資を送るため準備していた最中であった。トルレスの横瀬浦来訪の知らせは、アルメイダらには驚愕以外の何物でもなかった。彼はその感慨を率直に述べている。彼（トルレス）が考慮すべき点について私たちに多く与えたことは、あの年齢でたいへんな「重責」を担って、通ったことのある者にしか信じる事ができないほどの非常に難儀な道中を来たパードレに会ったことである。かように、私たちすべての者には彼の来訪は、なんらかの重大な事態が起こらなければあり得ないことであった。なぜなら、パードレが豊後のカーザ（修院）を離れることは、その地に留まるべきパードレが他に誰もいないことであり、それほど長い旅をするには甚だ老齢にして脆弱な身体であって、また八月の初めであるため甚だ暑い

れている²⁰。」と報じているところからすると、当地の漁民たちが海上生活をしてきたとの印象を受ける。事実、西海市大瀬戸歴史民俗資料館には、「家船」の模型が展示されており、当時の海上生活の有りようについて知ることができ

る。アルメイダは、七月十八日に大村から横瀬浦に戻るとすぐに、彼のために建てられた一軒家で宣教活動を開始した。祭壇が設けられると、そこにポルトガル人たちがその土地のキリシタンたちがデウスに祈るために来たアルメイダは報じているが、横瀬浦にこの当時まだキリシタンはいなかったから、商取引のために各地から集まって来ていた商人たちの間に少数のキリシタンがいたのであろう。まもなく、若干の者がデウスの事柄（教理）を聴聞してキリシタン

時期であり、私たちは何が彼をせき立てて来させたのか分からなかったからである⑳。

トルレスが横瀬浦に到来したのは八月の初め(一日)であった。彼が長期にわたる難儀な旅を決意したのは、平戸を去ってから既に一年が経過していたため平戸のキリシタンを慰問・教化することが懸案事項の一つであったこと、またイエズス会の宣教事業の将来を左右すると思われる横瀬浦開港・讓渡をめぐる交渉が最終段階を迎えていたことを傍観していられたからである。アルメイダは、「主」なる神は彼の来訪が告解とデウスを見たいと切望する平戸のキリスト教界を救うため、またこの港に基礎を据えて、ここに私たちの聖なる信仰を広めることを望まれた㉑。」と受け止めていた。

トルレスのための家一軒が手配され、たちまちにして準備された。彼の到着によって横瀬浦讓渡問題は急速に展開した。翌日、アルメイダは七月十六日以降の大村氏との交渉経過をトルレスに報告説明し、彼の了承を得て、交渉の結着のために大村氏の許に赴いた。彼は大村に五日間滞在して協定書をまとめた後、横瀬浦に戻った。一方、トルレスは到着した翌日に教会の建造に着手した。すなわち、「パードレはすべての者が告解を聴き、神」の聖体」*Sanctus*を頂き、ミサを聴聞する必要があるため、直ちに一軒の家を造ることを指図した。家は翌日すぐに労せず造られた㉒。」大村氏はこれを支援するために木材のある森一つと多数の人手を与えた。教会が建てられた位置とその周囲の景観は、アルメイダの書翰から知られる。

(言われているように)この小島の内はたいへん良港であるので、諸船舶が停泊しており、また同じ港を形成している一つの小さな入江には右手に入り込んでキリスト教徒たちの集落があり、「これに」向かい合って高い所に私たちのカーザ(修院)がある。対岸の者たち(キリスト教徒たち)が渡るために、たいへん幅の広い一つの石橋が両側に架かっており、潮が流れ込む「橋の」中央には、その両側の石の上に据えてある桁(欄干カ)があり、この橋の末端に双方に壁をもったおおよそ七段の石段がある。石段は橋と同じ幅の広さから始まって、次第に三倍ほどの広さの幅にまで広がっている。そして、石段の上にはたいへん美しい樹木の入口(応接所) *recepimento* がある。

この入口から大きな門に達するまで四段あり、門内には奥行きおよび幅が八ブラサ（一ブラサは二・二ドミ）あまりある方形の庭があり、その前面に教会がある。教会は奥行き七ブラサ以上、幅五・五ブラサであり、その土地の人々の助力を得て造られた。……教会がある地所は全体がはなだ高い樹木で囲まれており、この地所の中には教会に必要な家々が他にもある。そして、大弓一射程ほどの教会の近くには菜園もある。私たちは教会の近くに良質の木材を出す森をニカ所所有しており、そこから当修院のための最良質の木材が伐採された²⁴。

これは一五六二年十月二十五日付の書翰の一節であるが、教会建設が始まった八月初旬以降三月も経たないうちに、横瀬浦の景観が一変したことががわれる。港に入って右手の一角にキリシタンたちの集落があったことは、既にかなりの数の者が、平戸及びその他の地から来た者に加えて横瀬浦居住の者も含めてキリシタンに改宗した事実を示している。それから六ヵ月ほどが経過した一五六三年四月十七日にイルマンのジョアン・フェルナンデスが同じ横瀬浦から豊後府内在住の同僚に送った書翰によると、以下のような展開をみせていた。

今までに当地でキリスト教徒になった者は全体で三〇〇人になるであろう。彼らは全員この教会の近くに在る者たちである。彼らや、豊後、平戸および博多から当地にきたキリスト教徒たちで、毎日曜日には教会はまさしく一杯になる。教会は豊後のそれとほぼ同じほどの大きさである。正午には、六〇人以上の子供がドチリナ（教理）のためにやって来る。彼らはすでにパーテル・ノステル（主の祈り）、アヴェ・マリア、クレド（使徒信経）、サルヴェ・ライーニヤ（サルヴェ・レジナ）、及びその他の祈りを知っている。子供のほぼ全員、少なくとも四分の三はそうである²⁵。

横瀬浦には一五六三年四月の時点で三〇〇人のキリシタンが教会の近くに住み、更に商取引のために平戸、博多、豊後から同地に来た商人たちの中にも多数のキリシタンがいたのであり、教会のみならず、新興の港町横瀬浦の活況のほどが推測される。アルメイダは一五六三年十一月十七日付の書翰で、発展途上にあつた横瀬浦について言及して、「トルレス神父を思慕していたため多数のキリスト教徒が、豊後、博多、平戸及び都からこの港に住むためにやっ

て来たので、その土地は家並みますます整備されていった(26)。」と述べている。前述した都のキリシタン、ゴノエ(ゴノイ)・バルトロメウはそのような一人であったであろう。なお、アルメイダはこの書翰の中で、横瀬浦の港を porto de Nossa senhora de ajuda「御扶けの聖母の港」と記し、文末でも neste porto de Nossa Senhora de Ajuda と書いている。

トルレス神父がイルマンのアルメイダと伝道士の日本人パウロを横瀬浦に留めて豊後に向けて出発したのは、フェルナンデスの一五六三年四月十七日付書翰によると、一五六二年十二月二十日であった(27)。トルレスはその日の夜平戸に着き、降誕祭後に平戸各地を巡歴してから博多経由で豊後に戻る予定であったが、博多地方における戦乱の知らせを受けて、予定を変え別路で豊後に帰還するため一五六三年二月二十日に横瀬浦に戻って来た。

同地で復活祭を迎えることになったトルレスは、教会の向かいにある山の頂きに十字架を立てることを決意し、四旬節の第三日曜日(三月十四日)に自らが製作した十字架を立てた。フェルナンデスは「この十字架はこれまでに日本で立てられた最も美しいものの一つであり、しかもポルトガル人たちはキリスト教国でもこのような美麗で敬虔なものをいまだに見たことがないと断言している(28)。」と伝える。アルメイダも同様のことを述べているが、彼によるとこの十字架は長さ三ブラサ(六・六メートル)、腕一・五ブラサ(三・三メートル)、太さ一・五バルモ(一・五メートル)の大きさであり、キリシタンたちがこれを厳かに運んで立てた後に説教があった。彼らは足を挫いて歩けなかったトルレス神父を肩に担いで教会と向かいの山を往復した(29)。なお、フロイスの「日本史」によると、十字架の足もとには礼拝堂 *hermia* があった(30)。十字架は六・六メートルの高さであったから、そこで祈るために小礼拝堂(祠)が設けられたのであろう。

二 大村純忠のキリスト教への改宗と内乱

■ 一・純忠の受洗

大村純忠が初めて横瀬浦にトルレス神父を訪れたのは一五六三年の四旬節の第四週(三月二十一日～二十八日)の

que nãa era pera lhes por culpa, porq̃
não conheciãõ a verdade, & que a sua
alma estaua cada vez mais firme com
Iesu Christo nosso Sñor. Prazerá a elle
por sua infinita misericordia, que lhe
dara sua graça, pera q̃ torne a por em
pè esta igreja de Iapão. Polo que lhes
peço caríssimos padres & irmãos, que
todos particularmente encomendẽ a
Deos este Principe, pera que seja hũa
coluna de sua santa fé em esta terra.
Feita neste porto de nossa Senhora da
ajuda, a 17. de Nouembro, de 1563.

Minimo da Companhia.
Luis Dalmeida.

写真4-6 横瀬浦のポルトガル語呼称「御扶けの聖母の港」

(エヴォラ版Cartas do Japão)

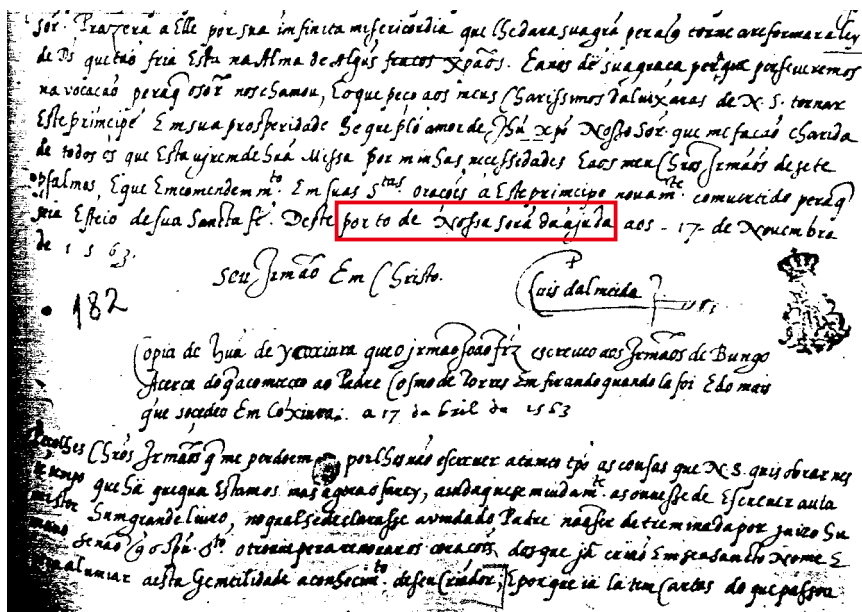


写真4-7 ルイス・アルメイダの1563年11月17日付横瀬浦発信書翰の写本
 (リスボン、アジエタ図書館所蔵稿本)

第二日(三月二十二日)であった(31)。トルレス神父が前年八月初めに横瀬浦港に来てから既に八ヶ月が経っていた。このことは、純忠がキリスト教を受け入れるか否かを決めかねていた事情を示しているようである。純忠の改宗問題は、横瀬浦開港交渉の第一段階で大村氏側とゴノイ・バルトロメウとの間に協議されたことであり、トルレスが横瀬浦港を訪れたのちに当改宗問題は進展を見るはずであった。そして、その交渉を引き継いだ内田トメに対して、純忠が「デウスの教えを自分の所領内で宣布するためにイルマン一人を遣わしてくるよう強く求めた(32)。」ことよって、彼はキリスト教保護の姿勢をイエズス会に対して表明していた。しかし、純忠はキリスト教に改宗したのちの彼の領主としての立場と地位がいかにように推移するか見極めができなかったのかもしれない。キリスト教の浸透に強く反対していた仏教寺院勢力と、実子後藤貴明を差し置いて養子として大村氏を継いだ純忠に対する家臣団の動きに敏感にならざるをえなかったことが、トルレス神父との対面を延引させたのであろう。

純忠は横瀬浦港にトルレスを訪れようと決意した時、

既に改宗の意志を固めていた。彼は主要な家臣たちを伴って横瀬浦を訪れ、トルレスに対して日本の習慣に従って型通りの贈物をした。フロイスによると、トルレスらはこれを「従順 Obedencia の印」として受け止め、彼も同地に越冬していたポルトガル人五名を伴って純忠を表敬訪問し、翌日の午餐に純忠を修院に招いた(33)。その時修院にいたフェルナンデスはほぼ一ヵ月後に書いた書翰では、純忠の修院への招待を横瀬浦到着の当日のように記しているが、恐らくフロイスの記載が妥当であろう。しかし、修院における接遇については、「修院では当地にいるポルトガル人たちと日本人キリスト教徒たちが彼とその家臣の武士七、八人にポルトガル風と日本風に食卓で給仕した(34)」と報じるフェルナンデスの記載がより正確な描写のようである。

純忠は食後に初めて本格的にキリスト教の教理について聴聞した。彼はフェルナンデスから世界の唯一の創造主が存在すること、人間の靈魂が不滅であること、全存在の源である第一質料について聴いた後に、トルレスから十字架とイエズス *Iesus* の字が書かれ、その下方に三本の釘が描かれた金の扇子を贈られた。この扇子は京都にいたヴィレラ神父からトルレスに送られたもので、*Iesus* はギリシア文字(35)であった。フェルナンデスは純忠の質問に答えて、その文字と釘が何を意味するかについて説明した(36)。フェルナンデスによると、その後、純忠は「キリスト教徒になる希望を抱いており、やがてそうなるに相違ないこと、そのために十字架の玄義 *señalados de Cruz* を知りたい旨」をトルレスらに伝言して伝えた(37)。

翌日、トルレスはポルトガル人たちを伴って日本の習慣に従って純忠に答礼した。その日の夜、純忠は再び教会を訪れ、家臣たちを庭に残して(38)、独りで修院においてフェルナンデス修道士から鶏鳴 *cantar o gallo* の時まで説教を聴き、パーテル・ノステル(主の祈り)やアヴェ・マリアの祈りなどを書き留めて帰った(39)。その翌日、純忠は家臣の朝長純安を通じてトルレスに対して、デウスの教えをほぼ理解できたこと、デウスが自分に子どもを授けてくれた時にはキリシタンとなる決意であること、今は受洗しないが心中ではキリシタンであるので許されるならば十字架を身に付けイエズス・キリストに祈りを捧げたい、と伝えた。トルレスはそれを良しとし、家臣への教理教育と改宗を説

き、望みどおりの子を授けたまうデウスを信頼するよう伝えた(40)。

純忠は来月再訪する意向をトルレスに伝えて横瀬浦を発った。彼は大村に戻ると、黄金の十字架を作らせ、これを家臣たちの面前で公然と頸に懸け、その姿で彼の兄に当たる「有馬の王 *the King*」である有馬義貞を訪問した。義貞は十字架を懸けた純忠を見て、彼に「キリスト教徒であるのかと尋ねたところ、彼はそのとおりであると答えた(41)。」という。純忠はあえてそのように示威することによって、キリスト教に改宗する意志であることを宗家の有馬義貞に伝え、了解を得ようとしたようである。彼はその上で聖週の月曜日(四月五日)に再び横瀬浦を訪れ、復活祭の前日(土曜日、四月十日)まで同地に滞在した。それは、教会の近くに自邸を建てることについてトルレスの了解を得るとの口実であった。純忠の滞在期間中、トルレスは聖週間であるための黙想などを理由に彼に親しく会うことはなく、フェルナンデスが代わって対応した。

純忠が大村に戻ると、有力家臣二人の間の不和が表面化して甚だ不穏な状況に陥っていた。そのことが横瀬浦に知らされたのは復活祭の八日目の四月八日(日)であり、トルレスは同二十五日(日)にアルメイダを見舞いのために純忠の許に遣わした(42)。アルメイダは不和の当事者の一人である朝長伊勢守の兄弟朝長純安の屋敷に五、六日間滞留し、夜間には殿純忠の要請で説教を行った。アルメイダはこのち有馬義貞訪問のため大村を出発したが、大村における不穏な状況が解消され、また宣教活動が純忠の保護を得て行われたことについてトルレスに対して伝言を送ったものと思われる。

トルレス神父がポルトガル人三人を伴って、ポルトガルの距離で五、六レグアある大村に純忠を初めて訪ねたのは、ご昇天の祝日(五月二十日)以後のことであり、その目的はキリシタン教界のためのいくつかの懸案、特に大村における教会建設について純忠と協議することにあつた。純忠は日本の仕来りに従ってトルレスのために宴を張り、それは夜中まで続いた。トルレスが教会建造を勧めたことに対して、純忠は教会建造の希望を抱きながらもそれが時期尚早であることを弁じた。

自分の希望もそれと同じである。しかし、キリスト教徒にならない者は誰も彼の領国に残るべきでないことは確かなことなので、今教会を建てようとする、坊主たちの諸寺院を必然的に壊すことになる。彼らはほぼ全員が高貴な家の出であり、親密な縁戚関係にあるため、彼に反感を抱くか、あるいは領内で何らかの騒動が生じるとを恐れている。自分が望んでいることが実行される機会が与えられる時まで、導師は待っていたきたい(43)。このことは、トルレスがおよそ一ヵ月半後に来日したフロイスに語ったことである。トルレスのこの大村訪問から一〇日もしないうちに、純忠は堅く決意して二、三〇人の武士 *hidalgos* を伴って横瀬浦を訪れ、トルレスに伝言して理解力の優れた日本人の派遣を乞い、洗礼を受けるに先立って懸念していた問題の解決に当たった。それは、仏像の焼却と寺院の破毀に關してであり、直ちにそれを実行できないことについて了解を得ることであつた。トルレスは時が至れば彼の権力下に寺院等の破壊を実行するとの意志を確認し約束させた上で、デウスの事柄を十分に理解すれば彼をキリシタンにするであろうと答えた。この返答を得て、純忠はその夜、家臣一同を引き連れて修院にトルレスを訪ね、夜明けまで説教を聴聞した。フロイスが純忠の洗礼について述べていることは、次のようなものである。

パードレは彼(純忠)がこれまでに聴聞していた説教によってドチリナ(教理)を理解し、デウスの教えについてたいへん精通していて、彼に聖なる洗礼を授けることが十分であると判断した。彼が全員が高貴な領主である家臣の間に身を置いて諸手を上げ、彼らの誰よりも謙虚さを示しているのを見て取って、パードレは彼の洗礼をいっそう祝福するためにポルトガル人たちを呼び寄せようとしたが、彼はその必要はまったくなくとして、自分の代父になるために修院にいた一ポルトガル人で十分であると言った。このようにして、彼は洗礼を授かった。パードレは、そこに居合わせた他の領主たちの受洗について、彼らが信仰の問題について教育されていないと思つていたため少しも「(文字不明)」していなかつたので、ドン・バルトロメウは彼らに対して彼が学んだことを彼らに教えていて、全員がドチリナを知つていたため、彼らが先ず声高にドチリナを唱えるように彼らに言つた(44)。彼の受洗は六月初旬のことであり、彼の洗礼名は、ドン・ベルトラメウ *Bertholomeu* (Caritas の表記)、バルトロメウ



写真4-8 大村の王 ドン・ベルトラメウの肖像
(カルティム著『日本殉教精華』1650年刊所載 大村市立史料館所蔵)

二五名であった(45)。アルメイダが大村を初めて訪れた際に泊まった屋敷で教理を説いた朝長新助(純安)もこの時に受洗し、ドン・ルイスと称した。

純忠がキリスト教を知ってから洗礼を受けるまでの期間は九カ月少々であった。ポルトガル商船来港と諸国からやって来る商人たちの取引によって巨大な利益がもたらされるといふ現実があったことは否定できないが、一旦改宗を決意すると集中してキリスト教の理解に努め、家臣たちに対する働きかけも執拗であったかのようである。

その一方で、彼が急速にキリスト教に傾いて積極的に信仰を受け容れるに至った背景には、当時武将や有識者層に浸透していた天道思想が彼のキリスト教受容に影響し、改宗を容易にしたように思われる。天道思想は、神・儒・仏あるいは儒・仏・道の三教一致論を思想的基盤として発生し、流行したものとされる(46)。特に、儒教における「天」「天道」の考え方が早くから日本に受け入れられてきた。中国における天道、天の道の法則は、万物の運行を司る「天道」があり、この天道に基づく統治・処世を認識することが天子の道とされてきた。イエズス会が一五九五年に天草で印刷した

〔日本史〕の表記)と称した。洗礼名バルトロメウは、純忠が突如トルレスに願ひ出たことであるため、トルレスから与えられたものではなく、純忠自身が心中深く秘めていた霊名であったように思われる。彼が最初に会ったクリシタン、ゴノイ・バルトロメウの存在が洗礼名決定に何らかのきっかけを与えたのかもしれない。アルメイダは純忠の受洗について、六月二十五日に島原でトルレスからの書翰で知らされた。彼と共に洗礼を受けた彼の重臣である領主 *señores dos seis mais principaes* は

『羅葡日対訳辞書』には、「Deus デウス」に対し、「Tentō, tenxu, tenzon, tentei (天道、天主、天尊、天帝)」の日本語が与えられている(47)。また、一六〇三・一六〇四年に刊行された『日葡辞書』には、「Tentō (天道)、テントウ、すなわち、天の秩序と摂理と、すでに我々はデウスをこの名で呼ぶのが普通であるけれど、…(48)」とある。天文二十一年(一五五二)八月二十八日に山口の大内晴英(義長)がトルレス神父に与えた「大道寺裁許状」という文書がある(49)。「大道寺」に宛てられたポルトガル語は *grande caminho de ceo*、日本語文にすると「天に通じる大いなる道」の寺となり、「天の道・天道」ということになる。

一五六八～六九九年にアレシヤンドレ・ヴァアラレジョによって編纂された「貴理師往来」には、「おのおの天道を存[じ]たてまつり日夜朝暮御寺へ参、後生をねがひ申へき事」の用例がある(50)。大村純忠が天正四年(一五七六)六月十六日付で龍造寺隆信・鎮賢(政家)に提出した起請文には、「天道之伽羅佐(ガラサ^{ガラサ})を離れ、弓箭の運命竭終し、…(51)」の文言が見られる。このことから、純忠は「デウス」を「天道」として理解し、龍造寺もまた同じ認識であったように思われる。純忠はデウスを天道として認識し、キリスト教を受け入れたのであると推測される。

純忠が洗礼を受けてほぼ一ヵ月後の七月六日にペドロ・ダ・ゲッラのナウ船が横瀬浦に入港し、ルイス・フロイスとジョアン・バッチスタ・モンテの両神父が来日した。彼らは横瀬浦港に上陸した最初で最後のパードレであった。ゲッラのナウ船と相前後して同港にはフランシスコ・カスタンのガレオン船とシヤ

編集上の都合により掲載できません

ムを出帆したゴンサーロ・ヴァス・カルヴァリオのジャンク船が到着し、諸国から貿易商人たちなどが参集して来て横瀬浦は未曾有の活況と賑わいを呈した。

■二、横瀬浦のキリスト教界

新来のバッチスタ・モンテ神父は、一五六四年十月十一日付の豊後発信の書翰で、「私たちは昨年日本に着き、「全員が」キリスト教徒である島へ上陸した⁵²。」と報じている。一五六三年七月の時点で、横瀬浦にどれほどのキリシタンが居住していたのかは明らかでない。フェルナンデスの一五六三年四月十七日の書翰では、教会の近くに三〇〇人が住んでいた。また、同書翰によると、横瀬浦の発展振りからみてキリシタンが一〇〇〇人以上になると見込まれていた⁵³。フロイスは「日本史」(一部四七章)で、純忠の受洗後のことに言及して、彼が陣中から武士samuraiや兵卒soldadosを信仰に導くために横瀬浦のフェルナンデスの許に送って教理を聴聞させ洗礼を受けるように努めたとし、その結果、毎日、四人、六人、一〇人前後の者がやって来たため一カ月間で五〇〇人以上の者が横瀬浦で洗礼を受けるに至ったと述べている⁵⁴。五〇〇人全員が純忠の家臣であったとはいえず、横瀬浦居住の住民も当然いたであろう。モンテとフロイスの両神父が到着した当時の横瀬浦のキリシタンは恐らく五〇〇人前後に増大していたのではないかと推測される。

横瀬浦における教会の祝事は、教会の存続中に三つあった。いずれも同地では初めてで最後のものではあった。

一つは、一五六二年十二月の降誕祭(クリスマス)であった。横瀬浦での降誕祭はパードレが不在であったため、ミサのない寂しいものであった。トルレスは豊後に戻るために十二月二十日に横瀬浦を出発して平戸に向かい、イルマンのフェルナンデスは平戸のキリシタンを世話するために十月には同地を去っていたからである。アルメイダを補佐したのは通訳の日本人パウロであった。アルメイダらはできる限り盛大な降誕祭にしようとしてその準備にとりかかった。キリシタン一同が降誕祭の夜を祝うために聖書劇を上演した。それはキリシタンたちが既に諳んじていた聖書のなかの多くの話や劇 *muitas farsas e autos* であった⁵⁵。

もう一つの祝事は、一五六三年の復活祭(四月十一日)であった。これは教会の最大の祝日であり、これを迎えるために四旬節(灰の水曜日からキリスト復活の日曜日前までが四旬節)の説教は、フェルナンデスによると、日曜日福音について、水曜日には十戒 *mandamientos* について、金曜日には受難と悔悛についてなされた。三月十四日には既述のように、教会の向かいの山にトルレスが作った十字架が立てられたが、それ以降毎日曜日の午後には子どもも加わって十字架まで連禱しながら行列して行った。枝の主日(日曜日)から受難の木曜日までは朝に説教があり、告解と聖体の秘跡について説明された。フェルナンデスは更に詳細に報じている。

暗黒の日の聖務を先唱して行い、三つの読誦の聖務日課書のために「(文字不明)」と歌い手を欠いていたが、いつも長い苦行をもって終わった。たいへん清楚な聖体を納める墓碑 *monumento* が造られ、これには蠟燭の代わりに一ダース半の十字架付きの行灯 *antorchas* が設けられたので、墓碑はさらに美しく敬虔なものとなった。……聖木曜日の夜半には日本人伝道士(説教師)ダミアンによる受難についての説教があり、墓碑に聖体が納められた後にも苦行者が多くあつて熱意溢れるものであつたので、こうしたことは日本では決して見られなかつたことであつた。すなわち、ここには多数のキリシタン、博多や平戸や豊後の者たちがいたし、ポルトガル人のペロリダ II ソウトは模範的であつたし、老パウロは声高に石の心を打ち砕くほどの話をしたため、若者たちを恥じ入らせてしまつた(59)。

土曜日には、島原から戻つていたアルメイダ修道士がポルトガル人たちと共に教会を整理整頓して立派に飾り付けて、復活祭が祝われ、最高の歓喜と祝意をもって執行された。復活祭の当日(四月十一日)には、夜が明けるかなり前からキリシタンたちは皆暗れ着を着て頭に花環をのせて教会に駆けつけ、イルマンたちは教会から出てきて彼らを迎えた。それから全員がカンテラ(蠟燭) *ceras* を手にして行列を作つて、十字架のある山まで行つた。そこに通じる道の両側は多くの木で飾られて一杯であり、カンテラが点され、芳香を放つたいくつもの祭壇があつた(57)。彼らは教会に戻つてミサに与つたが、イルマンのフェルナンデスとアルメイダらがアレレヤ、デイク・ノビス・マリア・

キイド・ヴィデイスティ・イン・ヴィア *Dic nobis Maria quid videris in via* (マリア、教え給え、道にて何を見給しや)、ラウダーテ *Laudate* (ほめ讃えよ) を歌うなか、花環を持ったキリシタンたちが行列して至ると、トルレスがミサを執行し、キリシタン三五人が聖体を拝領した⁵⁸⁾。

第三の大きな行事は、聖母被昇天の祝日の八月十五日にトルレス神父の最終(盛式)誓願、四つ目の誓願を立てた誓願式があったことである。フロイス神父が来日したことにより、インドの管区長から許されていた誓願式が執り行われることになった。このため、豊後府内から呼ばれたイルマンのアイレス・サンシエスが彼の指導していた日本人とシナ人の少年五、六名からなる聖歌隊を率いて三、四日前に横瀬浦に到着したが、彼らはヴィオラ・ダルコ *Violoncello* を携えていた。聖歌隊は十四日の晩禱に出席して歌い、病気が回復していなかったトルレス神父が祈りを唱えた。誓願式には前日から頭痛と高熱に苦しんでいたフロイス神父が司式し、少年たちがヴィオラ・ダルコを伴奏にして歌うなかで、トルレス神父の誓願がなされた⁵⁹⁾。ヨーロッパの教会音楽が歌われ楽器が奏でられるなかで、トルレス神父の誓願式が行われたことは、横瀬浦教会が最も光り輝いた一日でもあった。

■三、謀反の発生

七月初旬に、ポルトガル船が入港し、フロイス神父が来日したことによって、横瀬浦では上長トルレスの誓願式が設定されてその準備が始まり祝賀ムードが高まっていたのに対して、大村の地では領主純忠とトルレスに対する殺害計画が進行していた。

純忠のキリスト教への急激な傾斜が反キリスト教と仏教勢力及び養子純忠を排除して、武雄の領主後藤貴明を擁立しようとする者たちを結集させた。彼らは密議を重ねてその機会を狙っていた。その兆しが見られたのは、四旬節第⁴週(三月二十一日〜二十八日)に純忠が横瀬浦にトルレスを初めて訪れてキリスト教の教理に耳を傾けて大村に戻った頃であり、復活祭(四月十一日)後に、有力家臣二人の反目という形で表面化した。その当事者の一人が、アルメイダから大村で最初に教理を聴いた朝長新助純安であったことは既に言及した。大村における不穏な状況は一時表面

的には解決されたかのように思われたが、純忠の受洗を契機に反純忠・反キリスト教グループの結束が強化されていた。

純忠が洗礼を受けたのち、戦場に向かう途中で戦いの神 *deos dei barabas* として尊崇されていた摩利支天像 *marasman* を取り出して焼くことを命じ、寺全体に火をかけさせ、また養父純前の像を焼いたことが(60)、後藤貴明と結んでいた家臣たちに謀反を決断させたようである。フロイスが伝えるところによると、彼らは奸策を弄して純忠を懲慥(こたはら)して、「彼(純忠)が戦いに出立する前に、王妃(奥方)がキリスト教徒になり、また領民全員が慰めを得るためにパードレたちが来て教会を建ててくれるよう彼らを速やかに呼んでくれるように言った(61)。」

フロイスはそれから二〇年後に書き始めた「日本史」(一部四八章)において、次のようにも説明している。

(キリスト教の)教えは大いに理に叶い真実と思われ、殿がキリスト教徒になったことはたいへん結構なことで、自分たちもキリスト教徒になりたいと思っている。自分たちや妻子、家臣、従僕たちが説教を聴いて洗礼を受けることについて、殿からパードレ、コスメ・デ・トルレスに、彼がこちらに教理を説くイルマンや同宿たちを伴って来てくれるよう頼んでいただきたい。(62)。

純忠は早速朝長新助ルイスを横瀬浦に遣わしてトルレスに大村来訪を乞い、トルレスは誓願式の終わったのちに大村に行くことを朝長ルイスに約束した。一旦大村に戻った朝長ルイスは八月十三日に再び横瀬浦に至り、十五日の式後すぐにトルレスを伴って大村に戻るはずであった。しかし、トルレスの体調は回復せず、フロイスは高熱と悪寒のため動けず、朝長ルイスは二人の神父が病床にあることを知って、日没時に従者たちと共に横瀬浦を発つて大村に戻った。「潮が激流となって入ってくる岬(海峡) *estreito* に城を持っていた」針尾氏と反逆者たちは三日間待ち伏せて、ルイス一行がそこを通過するのを待ち、ルイス一行を殺害したのちに狼煙を上げた。これに呼応して大村では純忠の大村館を襲った。純忠は難を逃れて多良岳の寺院に避難し、トルレスらも死を免れた。朝長ルイスの凶報は翌朝の十六日の七時頃に横瀬浦のトルレスらにもたらされた(63)。以上はフロイスの「日本史」によったものである。

フロイスが事件の三ヵ月後に書いた一五六三年十一月十四日付の書翰がある。本来なら同書翰によって述べるべきであるが、事態の把握に混乱がみられ、事態の推移と曜日の記事には若干の齟齬があり、「日本史」の記事がことの真相をより正確に語っているように思われるからである。しかし、フロイスの前記書翰をまったく無視することができないのも事実であり、ことの判断のために必要と思われる内容について紹介する。

トルレスの大村行きに関しては、「私(フロイス)はバードレ(トルレス)を通じて彼(朝長ルイス)が戻ったならば、私たちは皆、王(大村純忠)が私たちに命じたことのために「大村に」行くであろう、とドン・ルイスに約束していた」ので、彼はまもなく日曜日に「横瀬浦に」戻った⁶⁴。この「日曜日」は八月十五日であり、彼は聖母被昇天の祝いのミサとトルレスの誓願式後に、祝宴の席に列した。彼はフロイスが熱病に苦しみ、トルレスが十分に回復せず衰弱している様子を確認して、大村行きを二、三日延期するように、そして、トルレスのドン・バルトロメウ(純忠)宛伝言をもって大村に戻りたいと述べて、日曜日の午後に出発した。フロイスは「日本史」では、朝長ルイスの出発を日没後とする。翌月曜日の夕食後に、純忠の家臣ダミアンが横瀬浦を訪れて有馬氏の改宗の意向について伝え、火曜日には朝長ルイスが再度トルレスの許に来て純忠が彼の大村訪問を待望している旨を伝えた。トルレスは水曜日(十八日)の夜明けには行くと返答し、ドン・ルイスはその返答をもって火曜日の午後到大村に戻った。トルレスは、その夜出発の準備を整え、翌朝ミサを立ててポルトガル人たちに数日の留守のことを伝え、修院にいた日本人アレシヤンドロに伝言を持たせて純忠に遣わし、その返事を待つて大村に赴く決意をしていた。しかし、ドン・ルイス朝長が大村への帰路横瀬浦港から一レグアほどの所にいた純忠の家臣で三、四カ所の領主である異教徒 *マゴ* (針尾伊賀守) によって殺害されたとの噂と、修院に仕えていたアレシヤンドロの訃報とがトルレスに伝えられた。「火曜日の重大な知らせ」すなわちドン・ルイスの殺害ののち、「八月八日水曜日、七時ないし八時に、私たちはこの港一帯に騒動が起き、日本人の商人たちが乗船して平戸やその他の土地に立ち去るのを見た⁶⁵」。

「八月八日」は水曜日ではなく日曜日である。フロイスは同書翰において、八月十四日の夜の体調について触れて、

「熱はますます上がったが、私は夜の一〇時まで告解を聴くことを免れることができなかった。確かに、私にはその熱よりも、翌日にパードレが誓願を行うためにミサを立てることができないことや、大村行きを妨げるほど病気が進行すると思うことが心苦しかった(66)。」と述べている一節からは、横瀬浦港の騒動が八月八日(日)ではなく、十八日の水曜日であったことが知られる。また、八月十五日に横瀬浦港に来た朝長ルイスが両パードレの病状に配慮して彼らの大村行きを二三日延ばして、十七日の火曜日に再度同地を訪れてトルレスに大村行きの確約を得て帰路について、途中で針尾氏に襲われて殺害されたということも十分に考えられることである。

論点の一つは、フロイス「日本史」では針尾氏による朝長ルイス殺害の翌十六日朝に凶報がトルレスに伝えられたのに対して、書翰では火曜日(十七日)に起こった殺害事件の噂が翌朝に流れ、朝七時か八時には商人たちが船で横瀬浦を立ち去ったという点である。「大村家譜(巻之五)」には、次のような記載が見られる。

同(永祿)六年癸亥七月二十八日(一五六三年八月十六日)後藤伯耆守貴明入寇郡村野岳、松原兵部純照純伊五男、大村右衛門父子三人、針尾伊賀、神浦弥平兵衛入道玉烏子丹波属純忠等応え(67)、

右の記載は、領主純忠が後藤貴明ら大村氏一族の謀反に遭遇したことを示すものであり、針尾が介在していたことから、その前夜の針尾氏による朝長ルイス襲撃事件が大村における謀反事件へと連動していったことをうかがわせる。純忠の領主権力を回復したのは、フロイスの一五六三年十一月十四日付書翰によると、四〇日後のことであった。彼の復帰のために動いたのは本家の有馬氏であったことがアルメイダの同年十一月十七日付書翰から知られる。

この時、私たちの友人の有馬の王^{Don Juan}である従兄弟に対して謀反を起こしていた領主^{señor}が、以下の方法で有馬と和を結んだとの知らせを受けた。すなわち、彼の息子を王^{Don Juan}として立てること、その者は私たちの敵対者である王の孫であって、ドン・ベルトラメウの甥に当たる若者である。そして、この者を彼(謀反人)の一女と結婚させ、すべての者が協力してドン・ベルトラメウにその領分を領有させて彼の敵対者を倒すというものであった。かようにして、ドン・ベルトラメウが以前の状態に戻るように主なるデウスの恵みによる働きが実行さ

れた。この知らせにより、謀反を起こした側として横瀬浦にいた領主は逃亡し、私たちは少しく安堵し、私たちの主なるデウスにおいて、ドン・ベルトラメウが自領内に復帰するという多くの期待を抱いた。あまり日が経たないうちに、ドン・ベルトラメウが自分の所領を掌握し、敵が追撃されたとの知らせが届いた(68)。

アルメイダのこの書翰の内容からは明確な事情を知ることができず、また不明瞭であるが、事態の終熄しゅうせきは有馬氏本家によってなされたことは確実である。有馬の王とは義貞に家督を譲っていた晴純(仙巖)であり、仙巖は大村における謀反を知って、キリスト教に好意的であった義貞を退けて自ら政治権力を握り、敵対者との和睦交渉に入った。敵対者とは西郷氏であったようである。アルメイダが指摘する「私たちの敵対者」とは晴純(仙巖)であり、その孫とは義貞の長男康純を指すようである。アルメイダはほぼ一年後に書き認めた一五六四年十月十四日付豊後発信の書翰でも、この問題について言及している。

有馬の王の父(仙巖)は老齢のためすでに政治はとっていないが、彼の息子に対する大謀反を見るやすぐに、謀反人たちにすべて彼らが望むようにしようと伝えさせ、王の息子を追放することを命じ、彼の孫が主要な敵対者の娘と結婚することを企てた。また領内にあった十字架を倒し、キリスト教徒が元の教えに戻るよう命じた。敵たちはこれを見て鎮まった(69)。

三 横瀬浦焼亡

アルメイダが大村の騒動について豊後府内で知ったのは八月二十五日頃であり、彼は急ぎ横瀬浦に戻ったが、途中、口之津で一時上陸を拒否され、難儀を重ねてようやく九月二十日に横瀬浦に着いた(70)。横瀬浦を占拠していた謀反人の中心人物が針尾氏であったか否かは不明であるが、アルメイダが到着した時には既に謀反人は退去しており、町では生系の取引をめぐる、諸国から来ていた商人たちとポルトガル人商人との間に軋轢・抗争が生じ、ポルトガル人二、三人が殺害されるなど事態は悪化していたようである。アルメイダが横瀬浦港に到着する以前に、フロイスの「日

本史」(二部四八章)によると、病気のためポルトガル船に避難できなかったトルレスとフロイスの両神父は豊後商人に捕われて一時倉^{クラ}に抑留された。商人たちがナウ船に銀六万クルザード(一クルザードは米一俵、一両相当とされるが、時期により換算は異なる)を渡してまだ生糸を受け取っていなかったことが原因していたようであり、双方間の協議が成立して生糸は豊後商人に引き渡されたという²¹。こうした事態は、恐らく大村の騒動事件が横瀬浦港に伝えられた直後に起こったのであろう。

しかし、生糸取引をめぐる軋轢、ポルトガル人殺害、パードレの抑留などについては、フロイスは一五六三年十一月十四日付書翰ではまったく言及せず、日本人商人等が横瀬浦港を退去した水曜日(八月十八日)の夕方に、異教徒たちの来襲を恐れたキリシタンたちの助言によって、老パードレ(トルレス)がゴンサロ・ヴァスのジャンク船に行き、高熱のフロイスとイルマン・フェルナンデスがドン・ペドロのナウ船に赴き、修院の財貨もポルトガル船に避難させたと述べるにすぎない²²。

横瀬浦港に着いたアルメイダは、ジャンク船に避難していたトルレス神父に再会した。そのほぼ二ヵ月後に、横瀬浦の町は放火されて教会と修院、民家が焼失した。この港町の壊滅はポルトガル船ナウが同港を出帆してすぐのことであった。デイエゴ・パチエコ(結城了悟)は十一月十七日に近い日と推定する²³。フロイスはナウ船出帆の前日の夜に、ドン・アントニオ籠手田が派遣した船で平戸に去り、トルレスが彼を救出するため島原から来た船に乗り込んでナウ船が出帆するとまもなく、まず教会が焼かれ、次いですぐにキリシタンの農民たちの家が焼かれた。トルレスとアルメイダは焼亡する港町を眼前にし絶望して同港を去った²⁴。アルメイダは同書翰で、「横瀬浦の港はたちまち近くにいた敵の一人によって秘かに焼かれてしまった²⁵。」と述べている。フロイスは、高慢かつ横柄な豊後商人には繁栄途上にあつた横瀬浦の港に対し強い敵意と激しい嫉妬心があつたため、ポルトガル人との生糸取引交渉が停滞したことが原因して町に放火した²⁶、と見ている。しかし、放火は取引交渉が成立して生糸の引渡しながざれてからほぼ二ヵ月後のことであつた。アルメイダの指摘が正しいとすれば、敵の一人とは謀反人の一味であり、謀反鎮圧

後も横瀬浦に潜んでいた者であったか、あるいはキリスト教に敵意を抱いていた余所者であった可能性がある。

一五六四年八月十四日に、ドン・ペドロ・デ・アルメイダのナウ船サンタ・クルース号が横瀬浦の港口にあるサン・ペドロ島(八ノ子島)に到着した。しかし、荒廃した港を見て、司令官はナウ船を平戸に廻船した。平戸の河内浦には既に二七日前に二隻のポルトガル船が到着しており、平戸入港について度島にいたフロイス神父に指示を仰いでいた⁽⁷⁷⁾。ポルトガル人たちが平戸に教会建設を要望し、領主松浦氏がその許可を延引していたためポルトガル船は平戸に進航・入港していなかった。ナウ船から平戸に遣わされたポルトガル人の招きで度島から来たフロイスは、平戸から小舟で横瀬浦港に向かったが、途中でナウ船に出会い、河内浦に至った。彼はトルレス神父が定住していた有馬領口之津港への廻航を決断していたが、カピタン・モールのドン・ペドロは平戸での取引に固執する商人たちを説得できず、平戸入港の条件として教会建設を要求するため使者を松浦氏に派遣して交渉させた。松浦氏が教会建設と切り倒された十字架の再建を認めたため、ナウ船は平戸に入港し、三年振りに平戸での取引が再開した。教会はナウ船が帰航する時期には完成していた⁽⁷⁸⁾。

(五野井隆史)

註

- (1) 岡本良知『十六世紀日欧交通史の研究 増訂版』(六甲書房 一九四四) 二七七～二八一頁
- (2) ポルトガル国所在リスボン アジタダ図書館所蔵の写本、49-1v-50, f.522v.
- (3) Luis Frois, HISTORIA DE JAPAM, anotada por José Wicki. Vol. I, Lisboa, 1976, p. 270.
- (4) ショアン・フェルナンデスの一五六一年十月八日付豊後発信書翰(Cartas que os Padres e Irmãos da Companhia da Iesus, que andão nos Reynos de Iapão escreverão aos da mesma Companhia da Índia, e Europa, desde anno de 1549 até 1580. Primeiro Tomo, Evora 1598, f. 81v.)^{*} ㊦Cartas, I. ㊦表記^{*}
- (5) アルメイダの一五六一年十月一日付豊後(府内)発信書翰(Juan Ruiz-de-Medina, DOCUMENTOS DEL JAPÓN 1558-

1562. Roma, 1995. pp. 381~402.)
- (6) マルティンの一五六一五年十月二十五日付横瀬浦発信書翰(ローマ・イエスス会文書館所蔵) 日本・中国文書Jap. Sin. 4. f. 275~277v. <6>にJap. Sin. に表記) Cartas. I. f. 109~111v.
- (7) Frois, HISTORIA. I. pp. 270~271.
- (8) *ibid.* p. 271.
- (9) 龍藏註(oo)
- (10) Jap. Sin. 4. f. 275. Cartas. I. f. 109.
- (11) Cartas. I. に於て「世に」云々と記載される。横瀬浦とその周辺の地勢からすると「ニ〇ノグア」ではなく「ニレグア」が妥当であると見られる。 周囲図に「ニレグア」
- (12) Jap. Sin. 4. f. 275. Cartas. I. f. 109.
- (13) *ibid.* f. 275v.
- (14) Jap. Sin. 5. f. 3v. Cartas. I. f. 117v.
- (15) 姉崎正次『西文正字道の興廢』(回文館 一九三〇) 六〇頁
- (16) Josef F. Schütte, MONUMENTA HISTORICA JAPONIAE I. Textus Catalogorum Japoniae 1549-1654. Romae, 1975. p. 265.
- (17) *ibid.* p. 273.
- (18) *ibid.* p. 324.
- (19) Jap. Sin. 4. f. 277~277v. Cartas. I. f. 111.
- (20) *ibid.* f. 277v.
- (21) *ibid.* f. 275v.
- (22) 龍藏註(oo)
- (23) *ibid.* f. 276.
- (24) *ibid.* f. 277v. Evora版Cartas)に於て、教会の奥行きは「九フナサ」(f. 111.)とある。
- (25) Jap. Sin. 5. f. 2v. Cartas. I. f. 116v.
- (26) *ibid.* f. 80v. Cartas. I. f. 119.

- ②7 *ibid.* f. 1. アルメイダは一五六三年十一月十七日付書翰で、トルレスの横瀬浦港出発を十二月三日と記している (Jap. Sin. 5. f. 80. Cartas. I. f. 118.)
- ②8 Jap. Sin. 5. f. 2v. Cartas. I. f. 117.
- ②9 *ibid.* f. 81. Cartas. I. f. 119.
- ③0 Frois. HISTORIA. I. p. 294.
- ③1 フェルナンデスは、一五六三年四月十七日付書翰で、純忠の横瀬浦訪問を、アルメイダが四旬節第三週に島原に向けて同地を發した八日後(三月二十二日)と述べる (Jap. Sin. 5. f. 3.)。フロイスは一五六三年十一月十四日付書翰で、「四旬節の第二週目」 (Jap. Sin. 5. f. 25v.) に「日本状」(一部四一章)でも四旬節第二週と述べる。
- ③2 Frois. HISTORIA. I. p. 271.
- ③3 フロイス、一五六三年十一月十四日付書翰 (Jap. Sin. 5. f. 25v.)
- ③4 Jap. Sin. 5. f. 3.
- ③5 Jap. Sin. 5. f. 87v.
- ③6 *ibid.* f. 26. Cartas. I. ff. 133~133v.
- ③7 *ibid.* f. 3. Cartas. I. 117v.
- ③8 フロイスの前記書翰にも「純忠は執政官 regedor の兄弟ドン・ルイス(フロイスは受洗後の洗礼名で記載。朝長純安。)一人を伴って教理を聴いた (Jap. Sin. 5. f. 26.)」。
- ③9 Jap. Sin. 5. f. 3.
- ④0 *ibid.* f. 26v. Cartas. I. ff. 133v.~134.
- ④1 *ibid.* f. 26v. Cartas. I. f. 134.
- ④2 パチエロ・ディエゴ著・佐久間正訳『長崎を開いた人—コスメ・デ・トルレスの生涯—』(中央出版社 一九六九) 一〇六頁
- ④3 Jap. Sin. 5. f. 3v. Cartas. I. f. 118.
- ④4 フロイス、一五六三年十一月十四日付横瀬浦発信書翰 (Jap. Sin. 5. f. 26v. Cartas. I. f. 134.)
- ④5 Jap. Sin. 5. f. 27. Cartas. I. f. 134v.
- ④6 アルメイダ、一五六三年十一月十七日付書翰 (Jap. Sin. 5. f. 86v. Cartas. I. f. 126.)
- 石毛 忠『心学五倫書』の形成事情とその思想的特質』(金谷 治・石田一良他校注『藤原惺窩 林羅山』日本思想大系28 岩波

- 書店 一九七五) 五〇三頁
- 47) 福島邦道・三橋 健解題「羅葡日対訳辞書」(勉誠社 一九七九)
- 48) 土井忠生他編『邦訳日葡辞書』(岩波書店 一九八〇) 六四七頁
- 49) 東京大学史料編纂所編『日本関係海外史料 イエズス会日本書翰集』原文編之二(東京大学出版会 一九九六) 三二九〜三三〇頁
- 50) 土井忠生「貴理師端往来」(キリシタン文化研究会編『キリシタン研究』第五輯 吉川弘文館 一九五九) 八二頁
- 51) 長崎県史編集委員会編『長崎県史』古代・中世編(吉川弘文館 一九八〇) 六五七頁
- 52) Jap. Sin. 5. f. 114.
- 53) *ibid.* f. 3v. Cartas. I. f. 118.
- 54) Frois. HISTORIA. I. p. 329.
- 55) Jap. Sin. 5. ff. 80~80v. Cartas. I. f. 118v.
- 56) *ibid.* ff. 3v. 同写本に對し、印刷されたエヴォラ版Cartas. I (f. 117)では、二カ所の省略がある。
- 57) Frois. HISTORIA. I (1部田三章), p. 294.
- 58) Jap. Sin. 5. f. 3. Cartas. I. f. 117.
- 59) *ibid.* f. 27v. Cartas. I. f. 135v.
- 60) *ibid.* ff. 27~27v. Cartas. I. ff. 134v~135.
- 61) *ibid.* f. 27v. Cartas. I. f. 135v.
- 62) Frois. HISTORIA. I. p. 334.
- 63) *ibid.* pp. 337~338.
- 64) Jap. Sin. 5. f. 27v. Cartas. I. f. 135v.では、トルレスが直接朝長ルイスに約束した、とされる。
- 65) *ibid.* ff. 28~28v. Cartas. I. ff. 136~136v.
- 66) *ibid.* f. 28. Cartas. I. f. 135v.
- 67) 東京大学史料編纂所所蔵の写本。なお、「大村家覚書」巻三によると、後藤氏の郡村野岳侵攻と大村家一門及び針尾氏らの内応は永禄九年のころとされる。
- 68) Jap. Sin. 5. f. 90v. Cartas. I. f. 130v.

- (69) Cartas. I. f. 155.
 (70) Jap. Sin. 5. ff. 89~90v. Cartas. I. ff. 129~130v.
 (71) Frois. HISTORIA. I. pp. 338~339.
 (72) Jap. Sin. 5. f. 28v. Cartas. I. f. 136v.
 (73) バチエロ・ティエゴ著・佐久間正訳『長崎を開いた人―コスメ・デ・トルレスの生涯―』中央出版社 一九六九 一六二頁
 (74) アルメイダ、一五六四年十月十四日付豊後発信書翰 (Cartas. I. f. 151v.)
 (75) *ibid.*
 (76) Frois. HISTORIA. I. p. 338.
 (77) 身分不明のポルトガル人のシナ在フランシスコ・ペレス神父宛、一五六四年の書翰 (Cartas. I. f. 151v.). Frois. HISTORIA. I. p. 273.
 (78) Cartas. I. f. 151v.

第二節 福田開港とその展開

一五六五年に來航したポルトガル船、ドン・ジョアン・ペレイラのナウ船が最終的に入港した港が福田であった。イルマン・フェルナンデスの一五六五年九月二十三日付の書翰によると、ナウ船はマカオから横瀬浦港に直航し、七月上旬ころ同港に到着したが、荒廢した同港を見てやむなく平戸に向かった。しかし、ナウ船は同地にいたバードレ・バルザール・ダ・コスタの指示に従って平戸から一〇レグアの距離がある福田に入った⁽¹⁾。このことは、横瀬浦港の焼亡後に、イエズス会が主導してポルトガル船の新たな入港先を捜し選定していたことを示しているように思われる。一五六四年に來航したポルトガル船はいずれも平戸に入港したが、大村氏に大きな衝撃を与えたことは否定できない。一五六四年にポルトガル船が平戸に入港したことに対して、大村純忠がイエズス会宣教師に不満を呈したことが、一五六六年一月二十日付コーチン発信のインド副管区長メルシオール・ヌーネス・バレトのポルトガル管



写真4-10 福田港(長崎市福田本町)

区長ヤコブ・ミロン宛書翰から示唆される。

私は日本に関して、王ドン・ベルトラメウのために、また日本の改宗のために大きな不面目があることを尊師に伝えることを忘れていた。日本の航海について「ポルトガル」国王によって任命されたカピタンたちが彼の主要な敵である平戸の王の港にナウ船で渡航していることである。そのことは、ポルトガル人たちが得る利益と、彼らが彼に与える資金や武器によって彼の戦いのために援助していることである。このことは、日本で改宗した最初の領主 *Prince* であるドン・ベルトラメウを怒らせただけでなく、日本の他の領主たちには、ポルトガル人たちからほとんど保護が得られないと見て、改宗しないように白けさせている(2)。

一五六五年には、他の一船、ディオゴ・デ・メネーゼスのガレオン船も福田に入港した。同港には、七月二十日頃京都から豊後を経由して口之津に戻っていたイルマン・アルメイダが、伝道士になったばかりの養方パウロと共に派遣された。更に、口之津に居住していたトルレス神父はポルトガル人たちの告解とミサのために豊後府内に赴任していたベルシオール・デ・フィゲイレド神父を派遣した。彼は八月上旬、アルメイダらの到着後一五日して福田に到着した。彼は着くとすぐにドン・バルトロメウ(純忠)の訪問を受けている。また、日本人イルマンのロウレンソも同地に至り、アルメイダに同行して大村に純忠を表敬訪問した。

この年、平戸松浦氏の船隊五〇余隻(あるいは七〇隻)と堺商人の大型船八〜一〇隻が福田の港に停泊中のポルトガル船二隻を襲った。当時に在任していたバルタザール・ダ・コスタ神父が松浦氏の船隊発進を知って福田港に碇泊するポルトガル人たちに通報したにもかかわらず信用されず無視された。フロイスの「日本史」によると、コスタ神父は福田に滞留していたフィゲイレド神父にも伝言を送った。福田沖での海戦は九月二十三日〜十月中旬までの期間

になされたと思われ、急襲されたナウ船は形勢不利な戦いであったが、大砲を装備したガレオン船とシナ人たちのソマ船sumoの救援を得て、二時間にわたる海戦に堪えた。松浦方は大型船三隻を撃破され、死者八〇人（あるいは六〇人）、負傷者一二〇人（あるいは二〇〇人）以上を出した③。松浦氏と堺商人の目的は、ポルトガル船からの商品の略奪とナウ船の焼却、そして福田港の破壊にあったようであるが、これに失敗した。

フィゲイレド神父は福田港に来てすぐに普通の家屋を教会として利用したようであり、彼が滞在した八月上旬から十月二十二日までに、ドン・バルトロメウ大村純忠が何度もそこを訪れ、また海沿いの諸城にいる多数のキリシタン領主や、来訪可能な他の土地のキリシタンたちが宣教師たちの滞在について満足の意を表明するために来た。同神父の滞在中に執り行われたミサには土地のキリシタンや、領外から来たキリシタンたちが毎日参集した。子どもたちはドチリナ（教理）を学び、日曜日や祝日にはその説教があった④。しかし、当地福田の領主、福田兼次についての言及はまだ見られない。

十一月、ポルトガル船が福田港を出帆すると、フィゲイレド神父は福田港から手熊の地に行き、同地に降誕祭前まで滞在した。上長トルレスは手熊の人々には救霊の問題を聴く心構えがあると思われたためフィゲイレドを派遣したのであるが、降誕祭を口之津で一緒に迎えるために彼を呼び戻した。手熊では期待されたほどの成果がまだみられなかったようである。司祭不在の島原からキリシタンたちが新年の祝詞を述べるため口之津に来て、司祭の来訪を懇請したのに対し、トルレスは、フィゲイレドが手熊に戻るよりは島原においてより一層の成果が期待されていたために同地に行くのがよいと判断した、とアルメイダは報じる⑤。

一五六六年一月十五日、五島の宣教に赴くアルメイダは日本人イルマンのロウレンソと共に口之津を発ち、福田に至り天気待ちのため当地に一泊した。キリシタン数名がニレグアの地から進物を持って訪れ、一〇人の子どもに洗礼を授けてくれるようお願い、明朝彼らを連れて来ると伝えた。しかし、早暁、好天であったため船頭は船を出して五島に向かった⑥。なお、福田港からニレグア（約一キロメートル）の地とは手熊を指すのかもしれない。

一五六六年七月にシモン・デ・メンドンサのナウ船が福田に到着した。ジョアン・カブラルが一五六六年十一月十五日付福田発信書翰において述べるところでは、トルレスは大村氏が再三にわたってパードレの大村派遣を要請したのに対して、大村氏が周辺の諸領主との間に交戦しており、また宣教師が大村領内にいることにより生じる悪評と非難を避けるため、時が来れば人を派遣するとの希望を与えてきたが、ナウ船の到着によってポルトガル人のいた港にパードレを遣わす口実と機会を得た。

ガスパール・ヴィレラとカブラルの両神父が福田に赴いてポルトガル人たちの対応に当たった。カブラルは十一月十五日当時福田に滞在してほぼ二ヵ月を経過していたが、この間、大村氏は戦闘を続け、主要な城(フロイス「日本史」によると彼杵の地の城という)を夜襲によって回復した(7)。一方で、大村氏は頻繁にパードレたちの許に伝言を送り、また彼に仕える少年、すなわち、小姓数名を遣わして洗礼を受けさせた(8)。

同年九月、五島から口之津に戻るアルメイダは、福田の港に着いてすぐに教会に赴き、四日間留まった。同地にはヴィレラ神父がいた。カブラル神父もいたはずであるが、アルメイダの書翰には言及がない。アルメイダは同地から口之津までのおよそ二五レグア(一レグア、五・五キロメートルで換算すると二五レグアは一三七・五キロメートルとなるが、実際にはおよそ七〇キロメートルである)を陸路進んだ(9)。

十一月下旬近く、ポルトガル船の出帆が迫って来た時、トルレスはパードレたちに口之津に戻るよう命じた。これを知った純忠は福田に駆けつけて来てミサを聴きたいとの意向を伝えた。ミサの道具や教会の聖具類は既に船に積み込まれていたが、これを教会に戻してミサが上げられた。純忠はミサ後にナウ船を訪れ、カピタン・モールのメンドンサやポルトガル人たちに暇乞いをした(10)。フロイスの「日本史」によると、トルレスはこの年純忠の要望に添うべく、まだイルマンになっていなかったが、元医師の伝道士養方パウロを大村に遣わした(11)。福田の港にはポルトガル船出帆後にパードレは残らず、同地の教会も翌年のポルトガル船来着までは無人であった。

一五六七年には、ポルトガル船の福田来着はなく、ナウ船は有馬領の口之津に入った。他に二隻のポルトガル商船

が同港に到着した。ポルトガル船が福田港に來航しなかつた理由は定かでない。

一五六八年六月二十八日に、ドン・アントニオ・デ・ソウザのナウ船が福田に來着し、イタリア人神父アレシヤン・ドレ・ヴァラレツジョが來日した。彼が記す一五六八年九月四日付の書翰によると、ナウ船が港に投錨する前に土地の人々が來航を知つて、美しい十字架のついた旗を掲げた多数のフネで出迎へのためナウ船まで至り、海岸全体が女性や少年少女たちで溢れていた。キリシタンたちはヴァラレツジョ神父をほとんど宙に浮かせたままに運んで教会に行き、少年と少女の合唱隊が「テ・デウム・ラウダムス *Te Deum Laudamus* (我ら、神なる汝を讃めたたえる)」を歌いながら前に進み、教会に着くと全員が祈りを捧げたのち暇乞いしたが、彼らはパードレを得たことに深く慰められて帰宅した。その熱狂は、二年間もこうした慰めを欠いていたためである、という。まもなくキリシタンの領主数名がパードレを表敬訪問し、その中に、当地の領主ジョーチン・ロードニ *Joaquim* 福田兼次がいた。二日後に、大村純忠の名代として身分ある有力者の執政官 *Regente* を遣わしてパードレの安着を祝い、自らは戦準備のため出向くことができなかつた、そして、息子が誕生しその子に祝福を与えるため自分が当地に來ることができれば喜ばしいがまだ幼すぎるため遣わすことができない旨、伝えた¹²⁾。福田のキリシタンの数についての記事は、アルメイダの一五六八年十月二十日付書翰に見られる。

福田は海港であり、その領主はキリシタンでドン・バルトロメウの家臣である。そこには約一〇〇〇人のキリスト教徒がいる。そのほかにも、この冬には近くに住んでいる多数の武士や領主たち、およそ二五〇人が改宗するだろう¹³⁾。

(五野井隆史)

註

(1) Cartas. I. f. 202v.

- (2) JOSEPH WICKI, DOCUMENTA INDICA, vol. VI, ROMA, 1960, p. 713.
- (3) ベルシオール・ネ・フィゲイレータの「一五六五年十月二十一日付福田発信書翰」(Cartas. I. ff. 202v.~204.)。アルメイダの「一五六五年十月二十五日付福田発信書翰」(Cartas. I. ff. 169~170.)。Frois, HISTORIA, II. pp. 71~72, 79~81.
- (4) Cartas. I. f. 203v.
- (5) アルメイダ「一五六六年十月二十日付志岐発信書翰」(Cartas. I. ff. 213v., 214.)
- (6) Cartas. I. f. 214.
- (7) Cartas. I. f. 228, Frois, HISTORIA, II. p. 154.
- (8) *ibid.* ff. 228v.~229.
- (9) *ibid.* f. 214.
- (10) *ibid.* f. 229v.
- (11) HISTORIA, II. p. 155.
- (12) Cartas. I. ff. 254~254v.
- (13) *ibid.* f. 254.

第三節 唐船の来航と唐人

十五、十六世紀の交には、明の商船が海禁を破って海外に渡航するようになり、日本には一五三〇年代に福建の漳州・泉州から唐船の渡来が始まり、天文中期の一五四〇年代に入ると、豊後、薩摩の諸港や平戸などにさかんに渡来した、とされる⁽¹⁾。

西海市の面高に唐人墓と称されるものがある。石塔の上部は花崗岩で、南北朝時代半ばに中央の畿内で製造された花崗岩製の五輪塔の系統とされ、十四世紀後半から十五世紀前半にかけて関西付近で製造され運ばれたものと推定されている⁽²⁾。唐人が中国人であるか朝鮮人であるかは明らかでない。しかし、同地に畿内製の五輪塔の一部を墓石

として用いるほどの資力がある唐人が居住し、あるいは同地と何らかの関係を有していたことが知られる。

『李朝実録』によると、日本人であるか朝鮮人であるか不明であるが、肥前の金源珍は朝鮮と肥前松浦地方・薩摩・琉球間貿易に従事していた。応永三十年（一四三三）から永享九年（一四三七）まで、松浦を拠点にして朝鮮・琉球間貿易に関わっていた③。『海東諸国紀』には、大村居住の源重俊、すなわち「肥前州太村太守源重俊」が「丁亥年（応永元年・一四六七年）」に遣使したとあり、またその二年後の「巳丑年（文明元年・一四六九年）」には、「肥前州彼杵郡彼杵遠江清原朝臣清男」の遣使が宗貞国の仲介によって朝鮮に入国した④。

中国人の肥前国彼杵郡への来着が確認される初見は、永正三年（一五〇六）のようである。豊後府内・臼杵に三代にわたって居住した仏師（しっかい〈漆喰〉職人）陳元明の「陳氏系図」によると、曾祖父の陳李朝が度重なる譏奏のため一族一三〇余人と共に故郷の陽州を出奔して泰州南滄津から乗船し、数年後の永正三年二月に肥前国彼杵郡森崎（現長崎市江戸町 長崎県庁付近に比定）に着岸した。森崎の領主納富越後守忠重の保護を得、その推薦によって肥前国太守佐嘉の龍造寺隠岐守康家に奉公して陳兵部重基と称し、伝来の家宝を三人の息子に分与した。彼らは諸国に赴いて諸侯に仕え、李長の祖父陳覚明は永正十二年（一五二五）に豊後府内に移って仏像師になり、智元仏師と称した。父義明は永祿十二年（一五六九）に臼杵に移り唐人町に住んだ⑤。肥後国河尻には、陳元明の一族陳玄蕃（ちんげんぼんのすけ）允重昌がいたことが知られる⑥。有明海に位置する河尻に陳重昌が居住していたことは、同地方に唐船が渡海していたことを示唆している。同地より北にある高瀬は菊池川下流に位置していて、豊後に赴く宣教師たちは島原から同地に渡った。高瀬から旧菊池川を下ると伊倉があり、同地には唐人町があった。

有明海の入口に位置する肥前の口之津には早くから唐船が渡航していた。ジョアン・フェルナンデスの一五六四年十一月十七日付平戸発信の書翰によると、

彼（有馬氏）が遣わした使者たちの一人は剃髮者（仏僧）rapadoであり伝言を「トルレスに」もたらした。もう一人は彼の家臣（atales）で、彼の港の奉行（代官）gouernadorであり、そこにはすでにシナ・ジャンク船が行き多くの船が

交易するために日本全国から来ている^⑧。

永祿七年（一五六四）に既に複数のシナ・ジャンク船、すなわち唐船が口之津の港に入港していたのであり、同地における唐人町形成の礎がその頃から築かれていったように思われる。

一五六五年には福田港にも唐船が来着していたことは前節において言及した。福田港に碇泊中のナウ船が松浦氏と堺商人の連合船隊に急襲された際に、ナウ船を救援したのがシナ人たちのソマ船sona、すなわちジャンク船（唐船）であった。ポルトガル船の福田港来着に伴って、同地に諸国から商人たちが参集して来たことが引き金になって唐船も同港に入ることになったのであろうか、あるいはそれ以前から唐船は福田に渡海していたのであろうか。

一五六六年当時、大村に中国人家族が居住していたことを示すジョアン・カブラルの一五六六年十一月（十二月）十五日付書翰がある。

この時期、パードレ、ガスパール・ヴィレラと私がポルトガル人たちと共にその港にいたとき、私たちはしばしばドン・ベルトラメウの伝言をもった者たちの訪問を受けた。それを携えて来た者たちは、キリスト教徒になりたいとの願望を強く示して、私たちが説いていた教えが甚だ聖なるものと彼らに思われ、さらにすでに彼らの領主がキリスト教徒であって聖なる教えを選んだ以上は、彼らが異教徒にとどまっている理由はないと言い、そして時機が至った時には「説教を」聴聞し終えるために来るであらう、と言った。これらの者のうち四、五人の者と、ドン・ベルトラメウに仕い始めた少年数名がキリスト教徒になった。彼自身が彼らが洗礼を受けるように私たちの許に彼らを遣わした。その他にも自宅に戻る前に洗礼を受けるために来た者がいた。彼らの中に、洗礼を授けてくれるように息子を連れて来た異教徒の一シナ人がいた。彼は少年をドン・ベルトラメウに与えるつもりであったからである。このシナ人はドン・ベルトラメウらの家臣全員が謀反を起こして彼を殺そうとして捜していた時に、ドン・ベルトラメウがキリスト教徒で、家臣たちがそのために彼を憎んでいるのを知った。そして、彼が（ある森に）隠れていた場所を知った時、彼（シナ人）は決して彼を告発しようとしなかった^⑧。



写真4-11 寧波船(帆を揚げた姿) (『唐船図巻』
 収載)
 (公益財団法人 松浦史料博物館所蔵)



写真4-12 長崎甚左衛門純景墓碑 (時津町浜田
 郷字小島田)
 ※同墓地は長崎県指定史跡

のシナ人についてある程度知っていたか、あるいはその社会的立場を尊重していた可能性がある。

唐船が長崎に渡海した時期については明確でない。『長崎名勝図絵』所収 二、唐船石項によると、永祿の初めに明人が船を浮べて来航した。唐船の来航は永祿二年(一五五九)である。この年、將軍義輝の命を受けた小島備前守が上使として長崎に下向し、唐船の見(検)分に当たったが、横暴で豪気な振舞のために甚左衛門頼純の怒りを買い、そのため襲われて逐電したという⑨。頼純とは長崎純景の改名以前の名である。「長崎邑略記」によると、純景は時津で七三歳まで存命した⑩。時津町浜田郷字小島田に所在する墓碑には、「元和七年辛酉十二月十二日 長崎甚左衛門尉」とある⑪。元和七年十二月十二日(一六二二年一月二十三日)に七三歳で没したとすると、その生年は天文十八年(一五四九)である。小島備前守が下向した永祿元年には、純景は九歳にすぎず、彼が小島備前守の所業に対して怒って殺害を決断したということは考え難い。

また、將軍義輝は同年には三好長慶に敗れて近江に逃れ坂本常在寺にいたから、小島備前守を長崎に派遣するよう

右の一節からは、シナ人がどのような立場の人物であったかについて知ることはできないが、謀反発生時に純忠に食糧を運んでいったことから見て、一五六三年には大村に居住していたことになる。彼は純忠がキリシタンであることを知った上で、息子に洗礼を受けさせて彼に任せさせたことは、純忠がこ

な状況にはなかった。しかし、唐船の来航を否定する材料はない。

西川如見の著述『長崎夜話草』によると、唐船の初来航は永祿五年（一五六二）で、戸町浦に到着した⁽¹²⁾。また「長崎建立并諸記摘要」によると、唐船が初めて長崎に来たのは永祿十年（一五六七）である。南蛮船の入津五年前のこととする⁽¹³⁾。一五六〇年代初めに口之津や福田に唐船が到着していたことからすると、同時期に長崎にも到着していたと見ることができるようである。ポルトガル船の長崎来航が一五七〇年代になってようやく実現したのは、唐船の来航と何らかの関わりがあったのかもしれない。

（五野井隆史）

註

- (1) 長崎県史編集委員会編『長崎県史』古代・中世編（長崎県 吉川弘文館 一九八〇）
- (2) 西海町教育委員会編『西海町郷土誌』（西海町 二〇〇五） 二二九、六二二頁、大石一久「石塔類からみた中世・西海町の様相」（西海史談会編『西海史談』第十一号 西海史談会 二〇〇二） 六〇九頁
- (3) 田中健夫「倭寇」（講談社 二〇二二） 九二頁、田中健夫・村井章介編『増補倭寇と勘合貿易』（筑摩書房 二〇二二） 一七五〜一七六頁
- (4) 申 叔舟・田中健夫訳注『海東諸国紀』（岩波書店 一九九二） 一八八頁
- (5) 鹿毛敏夫「戦国大名領国の国際性と海洋性」（広島史学研究会編『史学研究』第二六〇号 広島史学研究会 二〇〇八） 一〇〜一二頁
- (6) 鹿毛敏夫「中世最後の唐人町」平成十八年度九州大学史学会大会 日本史部会報告レジュメ（二〇〇六）
- (7) Jap. Sin. S. f. 3v. エヴォラ版Cartasでは、シナジャンク船ではなく、「その港には）すでにポルトガル人たちが行っていた」（f. 117v.）とある。しかし、ポルトガル人が一五六三年以前に口之津に赴いたということは確認されない。
- (8) Cartas. I. ff. 228v.~229v.
- (9) 長崎史談会編『長崎名勝図絵』（長崎史談会 一九三二） 一七三頁
- (10) 東京大学附属図書館所蔵「長崎来由記」（同図書館蔵）では、「七拾有余迄存命なりし」とある。

〔1〕 時津町教育委員会・時津町郷土史編纂委員会編『時津郷土史考』（時津町 二〇〇五）。なお、長崎甚左衛門夫妻の位牌は現在長

与町法妙寺にある。没年月日は墓碑と同じである。

〔12〕 長崎市役所編『長崎叢書 一』（長崎市役所 一九二六） 二九頁

〔13〕 原田伴彦ほか編『日本都市生活史料集成 六（学習研究社 一九七五） 一八一頁

第四節 大村氏とイエズス会

一 大村の教会建造とキリシタン宣教の推移

上長トルレスは口之津で一五六七年の降誕祭を迎えた後、一五六八年の元旦に同地を発つて志岐に赴いた。七月中旬、彼は堺にいたフロイス神父を除くパードレ五名とイルマン二名を志岐に招集して会議を開いた。九月六日にアルメイダが腕にできた腫瘍のため死に瀕しているとの報らせがトルレスに届いた。志岐氏はトルレスの出発を阻止しようとしたが、彼は志岐鎮経（麟泉）を説得して聖母の祝日（九月十二日）の午後に乗船して、その日の夜に口之津に戻った。これを知った大村純忠はすぐに書状を送って改めて大村来訪を要請した。トルレスの志岐滞在中に、彼に随伴していたと思われるポルトガル人某の一五六九年八月十五日付書翰によると、純忠は復活祭後に使者をトルレスに遣わして一子誕生を伝え、その子への授洗のため来訪を求めていた。一五六八年の復活祭は四月十八日である。純忠の使者の志岐到着は前記書翰によると、五月十日ないし十五日頃とされる〔1〕。なお、イルマン・ヴァスもまた一五六八年に志岐において書き認めた書翰で、純忠の息子の誕生と洗礼について言及している。

ドン・ベルトラメウは、パードレ（トルレス）に彼に生まれた一人息子に洗礼を授け、自領に居住するためにそこに赴いてくれるよう度々要請した。パードレは彼には「行くことを」遅らせて時期を待った。それで、彼の求めによって息子にドン・サンチョの名を送った。彼はそれを身内に公表した〔2〕。

純忠の息子（喜前）は洗礼を受ける前に、ドン・サンチョの洗礼名をトルレスから与えられていたようである。

トルレスは純忠の大村招請を受けて一五ないし二〇日が経過して大村行きを決断し、口之津から福田に赴き、海上でポルトガル人たちの出迎えを受けた。前記書翰は口之津出發を九月と明記しているが、それは早くとも九月末となる。前記書翰の報じるところから推算すれば、十月初旬になって出發したとみるべきである。純忠がトルレスを福田に表敬訪問したのは、平戸の松浦氏との戦いに忙殺されていたため、彼の福田到着後一〇日ほど経った頃である。書翰の本文には、「一〇日も経たないうちにドン・ベルトラメウはパードレに会いに来た。」とある。純忠は数日間福田港に留まって毎回のミサに参列し、トルレスとの間に協議を重ねた³⁾。

トルレスは福田から一日行程の大村に、前述のポルトガル人某を含む五人を同行した。彼が大村に到着するとすぐに、ドン・ベルトラメウ純忠が彼を訪れ、トルレスもまた彼が帰城するとすぐに返礼として彼の屋敷を訪問した。前記書翰の筆者は、その日を土曜日とし、翌十月六日の日曜日に純忠はパードレたちとポルトガル人たちを晚餐に招いた、という。晚餐後に日本人イルマンのダミアンの説教があり、純忠夫人が初めて説教を聴いた。純忠は息子のドン・サンチョをトルレスに引き合わせた⁴⁾。純忠の要望に応じてトルレスが洗礼名を称することを許した息子である。なお、一五六八年十月の土曜日は二、九、十六、二十三、三十の各日である。前記書翰の筆者の記憶に誤りがあるとすれば、トルレスの大村到着は十月十六日の土曜日であったと推定される。

純忠はトルレスが大村に長期に滞在し常住するために教会建設が必須であると考え、広大な敷地をトルレスに与えた。大村に教会を建てる計画は、既に一五六三年五月下旬に、彼が初めて大村を訪れたときに協議されたことであった。彼が大村氏の城下に教会を建てたいとの願いは五年振りに実現されることとなった。聖アンドレの祝日(十一月三十日)に教会建設工事の支柱が打ち込まれ、聖母御受胎の祝日(十二月八日)に落成のミサが立てられた。トルレスらの住む修院の建設も十月中・下旬以降に始まり、十二月頃までには完成していたであろう。イルマン・ヴァスの一五六九年十月三日付志岐発信書翰によると、教会は大村氏の城と屋敷から僅かの距離のところにあつた⁵⁾。

大村での改宗はトルレスの来訪によって推進された。ポルトガル人某の書翰によると、三回の洗礼式で二三〇名が

改宗した。しかし、純忠が息子（ドン・サンチョ）への洗礼をトルレスに求めたのに対し、神父はその母が説教を聴聞したのち、彼女と一緒に子どもをキリシタンにするだろう、と返答した⑤。教会が落成したあと、降誕祭前の日曜日（十二月十九日）には八〇名がトルレスから洗礼を授かり、降誕祭当日にも八名が洗礼を受けた。降誕祭には三回のミサがあり、養方パウロが短い説教をした。キリストの降誕を祝って、純忠はヨゼフの生涯やその他の物語を日本風に上演することとし、それらは夜半まで演じられた。

一五六九年に入って八月までにトルレスが洗礼を授けた者は、前記ポルトガル人某の書翰によると、四〇〇名以上に達した⑥。大村のキリシタンは、イルマン・ヴァスの一五六九年十月三日付書翰によると、およそ八〇〇名に増加していた。多数の者がキリシタンになると期待されているが、打ち続く戦いと難儀が妨げとなっている、という。

一五六九年、福田港にマノエル・トラヴァッソスのナウ船が到着したようであるが、イエズス会宣教師たちの書翰などからは何も知られない。一五七〇年には前年同様マノエル・トラヴァッソスのナウ船が福田に入港し、六月十八日にエステヴァン・レイテのジャンク船が新しい日本上長フランシスコ・カブラルとニエッキ・ソルド・オルガンティーノの両神父を乗せて志岐に到着した。

これより先、復活祭（三月二十六日）前後に豊後の大友勢が肥前に侵攻して龍造寺氏と戦って勝利し、大村氏もまたその侵攻に戦っていた。純忠はトルレスに長崎に避難することを勧めた。復活祭後の第二の八日目（四月三日）に口之津から大村に着いたアルメイダが大村に残り、トルレスはヴィレラ神父のいた長崎のトードス・オス・サントス（諸聖人）教会に移った⑦。

新上長カブラルは志岐に九州の各地で宣教に従事していた宣教師たちを集めて会議を開いたのち、九月下旬にアルメイダを同行して九州のキリシタン教界の視察巡歴に出た。まず樺島のキリシタンを訪問し、そこから福田のキリシタン教界を慰問したのち長崎に赴いた。大村純忠はカブラル神父の大村訪問に先立って長崎に来て同神父に表敬した。カブラルはイルマンのアルメイダのほかバルタザール・ダ・コスタ神父と、日本に來たばかりのバルタザール・ロ

ペス神父を伴って大村を訪れた。カブラルは純忠夫人、嫡男の喜前、娘二人及び約一〇〇人の者に洗礼を授けた⁹⁾。喜前は既にドン・サンチョの洗礼名をトルレスから与えられていたが、正式にカブラルから洗礼を授かった。純忠は城内に教会のための敷地を指図した。彼はまた九〇〇人からなる一集落をキリシタンにする準備を整えており、既に五〇〇人ほどが洗礼を授かっていると報せを得ている、とアルメイダは一五七〇年十月十五日付書翰において述べている¹⁰⁾。フィゲイレドの同年十月二十一日付福田発信書翰によると、「ドン・ベルトラメウ家のこの洗礼に続いて、鈴田の町¹¹⁾の彼の家臣たちが心を動かされて、その土地の有力者からなる二七〇名が教理を学んだ。」純忠は福田にいたフィゲイレド神父に鈴田の洗礼志願者たちへの授洗を求め、彼自ら大村への途中で神父を出迎えて鈴田に同行して洗礼式に立ち会った¹¹⁾。アルメイダが述べる「九〇〇人からなる一集落」は、フィゲイレドが報じる「鈴田」である可能性が高い。

一五七〇年十月に志岐を発つてゴアに戻ったヴィレラ神父は、一五七一年十月二十日付の書翰で、日本出發直前までに得られた宣教活動の状況について報じている。「毎日、大村¹²⁾では人々が洗礼を受けている。真実の名として大村¹³⁾ Vonnara は、彼らの言葉で大きな土地 grande lugar を意味する。キリスト教徒二五〇〇人ほどがあり、三つの教会がある。ドン・ベルトラメウ領の人々が皆洗礼を受けたならば、三〇〇〇人以上になるであろう。」大村以外の地、福田、ホマチ(戸町)¹⁴⁾ Fomachi、手熊には一二〇〇人のキリシタンがいて、一教会がある、という。恐らく福田の教会を指すのである。また、小島の樺島にはほぼ四〇〇人のキリシタンがおり、二つの教会を持っている、という¹²⁾。

一五七〇年の降誕祭ののち、フィゲイレド神父は純忠の書状をもって大村領内を巡回した。領主がキリシタンであった戸町¹⁵⁾ Fomachin では、その妻が改宗したことから全領民がキリシタンとなり、教会建設予定地に十字架一基が立てられた。手熊でも殿の妻が改宗して全領民がキリシタンとなった。式見¹⁶⁾ Xoujini では殿と息子はキリシタンであったが、妻と他の者たちが受洗して全村がキリシタンとなった。三重¹⁷⁾ Mize の城将ドン・ロウレンソの妻も説教後に洗礼を受けた。更に神浦¹⁸⁾ Canara では殿と叔父二人がフィゲイレド神父の説教後に受洗し、主要な家臣全員もキリスト教に改宗

した。神父は更に雪の浦 *Jacquimour* の城で殿の妻とその地のほとんど全員に洗礼を受けたが、殿自身がキリシタンであったかは不明である。神父は大村への帰路でナガエ (長与カ) *Nagaie* に立寄り、領主に説教した。しかし、改宗までには至らなかった⁽¹³⁾。

二 長崎の開港と新町の形成とポルトガル貿易

長崎において宣教活動が始まったのは一五六七年である。領主長崎甚左衛門純景は、一五六三年に大村純忠が横瀬浦において洗礼を受けた時に一緒に受洗した武士 *Idalgos*、重臣の領主 *senhores dos seus mais principaes* 二五名の一人と考えられている。彼が一五六三年にキリスト教に改宗していたとしたら、領地長崎での宣教活動は同年ないし翌年に始まってしかるべきであるが、四年経過したのちによりやく始まったのは何故であろうか。一五六三年には一四歳にすぎなかった甚左衛門純景が重臣の一人として大村家の重

職を担っていたのであろうか。

「新撰士系録」長崎家系譜によると、彼の祖父は有馬肥前守貴純三男である⁽¹⁴⁾。父純方についての消息は不明である。「藤原有馬世譜」は、「長崎拾芥」を引用して、「長崎小太郎より十一代に至て有馬領主有馬肥前守貴純^(マ)八三男康純と云者を養ひ家を譲る、其子長崎左馬介、其子長崎甚左衛門」と記す。有馬氏と長崎氏との関係が、有馬氏と大村氏との関係同様に強いものであったことが知られる。純忠が若年の甚左衛門を重用したとしたら、有馬氏との関係に



写真4-13 狩野内膳筆 南蛮屏風(左隻部分)
(神戸市立博物館所蔵、大村市教育委員会写真提供)

拠るものであったかもしれない。甚左衛門がいつから大村氏の家臣となったかについては明らかでない。

甚左衛門がキリスト教に改宗していたことは、イルマンのヴァスの書翰一五六八年の志岐発信によって初めて知られる。「昨年（一五六七）、パードレ・コスメ・デ・トルレスはイルマン・ルイス・アルメイダを長崎に派遣した。その地の領主はドン・ベルトラメウの家臣で、すでにキリスト教徒である。その地でイルマンは多数のキリスト教徒をつくった¹⁵」。

甚左衛門の洗礼名がベルナルド *Bernardo* であることは、後述するイルマン・フランシスコ・ピレスの「覚書」によって知られる。一五六七年に長崎の宣教に着手したアルメイダは、マカオ在留の司教カルネイロに宛てた一五六八年十月二十日付書翰において、宣教活動の成果について述べ、「この冬に幾人かのイルマンを介して当地の身分ある者全員が五〇〇人の住民と共に聖信仰に改宗した¹⁶。」と報じている。この一五六八年には、アルメイダのほかにアイレス・サンシエス修道士も長崎で活動していた¹⁷。

長崎における宣教活動は、領主甚左衛門が改宗したことによって可能になったと考えるべきである。彼の改宗は一五六三年ではなく一五六六年であったようである。前節において紹介したジョアン・カブラルの一五六六年十一月（十二月）十五日付書翰に見られるように、「ドン・ベルトラメウに仕い始めた少年数名がキリスト教徒になった。彼自身が彼らが洗礼を受けるように私たちの許に彼らを遣わした。」の一節からは、少年数名の一人が甚左衛門であったように思われる。彼の受洗後まもなく、翌年に長崎で宣教が始まったとみることができる。

ヴィレラ神父の一五七二年二月四日付コーチン発信書翰によると、一五六九年、一五七〇年に長崎にいたヴィレラは甚左衛門から城に隣接する廃寺を与えられて住み、これを修築して教会とした。これがトードス・オス・サントス（諸聖人）教会である。宣教活動の最初の年に一五〇〇人が改宗した。彼らは受洗を感謝して同地にあった偶像の家（仏寺）を悉く破壊した、という¹⁸。

志岐から口之津に戻ったトルレス神父が純忠の要請を受けて同地を発ったのは、既述のように一五六八年九月末ないし十月初めであった。ミゲル・ヴァスの一五六八年の書翰によると、

トルレスは口之津からガスパール・ヴィレラがいる長崎に行き、そこからドン・ベルトラメウの土地で、ポルトガル人たちがいる港の福田に行った。ここでは彼はキリスト教徒および異教徒の諸領主全員と執政たちの訪問を受けた¹⁹。

トルレスの一行は口之津を船出して、恐らく茂木の港に着き、そこから長崎に陸行したようである。口之津あるいは志岐から福田へ、野母岬を迂回せずに陸路で行く場合には、長崎はその通路になっていたとされる²⁰。長崎から福田へは船を利用したのであろう。福田港にいたポルトガル人たちがトルレスを海に迎えに来たとポルトガル人某は書翰に書いており、トルレスが長崎から船で福田港に赴いたことは確実である。

なお、ここで注目すべきことは、ヴィレラ神父が一五六八年に長崎にいたとするミゲル・ヴァスの指摘である。ヴィレラ自身は前記書翰で一五六九年と一五七〇年に長崎に滞在していたと書いている。一、二年前の自らの動静についての記憶を間違うということは考え難いことであるが、ヴァスがトルレスの行動を詳述して一五六八年に書き認めた書翰であり、その記載は信頼できるであろう。

トルレスが福田から大村に赴いた時、彼に同行したポルトガル人は、ポルトガル人某の前記一五六九年八月十五日付書翰によると、五名であった。一五八三年に来日したフランシスコ・ピレス修道士の「覚書」には、トルレスがポルトガル人たちと一緒に一五六九年に福田から長崎に至った、という。

福田においてバードレ・トルレスは日本人たちにかの長崎の入江^{Bay}がどのようなか聞いた。彼はポルトガル人たちと一緒にそこに行った。：彼らは大木の森であった長崎へ行った。彼らはベルナルド(長崎甚左衛門)と、トードス・オス・サントス教会にいたバードレ・ヴィレラを訪れた。そこからバードレはドン・バルトロメウを訪ねて行き、ポルトガル人たちが彼に陸路随行した²¹。

トルレスが福田から長崎を経由して大村に赴いたのは一五六八年であり、その行程については既述のミゲル・ヴァスの書翰によって確認される。トルレスはそれ以降一五七〇年四月まで大村を離れることはなかった。このピレスの

「覚書」の内容はビレスが来日する十数年前のことで、伝聞によって得られた情報である。その内容を額面どおりに受け入れることはできないが、長崎から船で福田に着いたトルレスが長崎の入江について一方ならず関心を抱いたことは否定できない。福田の港が横瀬浦や長崎の港のように入江が奥深くなく外海からの強風を受け易く碇泊に適さないことを痛感したようである。そのため、彼は福田にいたフィゲイレド神父に長崎の入江の調査を命じるに至ったのであろう。その間の事情について、フロイスは「日本史」(一部九八章)において詳述している。

ドン・バルトロメウの改宗後四、五年が経過して、パードレ・コスメ・デ・トルレスはパードレ・ベルシオール・デ・フィゲイレドに対して、二つの目的のために福田と称する港に居住するよう命じた。一つには、シナのナウ船でそこに来るポルトガル人たちに説教をし彼らの告解を聴くためであり、二つにはそこにいたキリスト教徒たちを教化するためであった。それは、ナウ船が来た港にはこれの後を追ってできた手頃な集落がその港に作られていたためである。そして、この福田の港は「港として」相応しくなく、ナウ船は同港では危険にさらされて様々な危機に遭遇しているのので、パードレ(トルレス)はナウ船がドン・バルトロメウの領内に引続き留まることのできるように、そしてそれによってキリスト教界が保護され援助されうるように、安全な港を探すことを望んだ。そこで、パードレ(フィゲイレド)はわざわざ数名の同行者からなる水先案内人一人を連れて、その海岸を駆け巡って最良と思われる所を見つげるため港口の水深を測った。この結果、長崎の港が適地で好便であると判断して、先ずドン・バルトロメウと必要な協定を結んだのち、パードレとナウ船の庇護のもとに家族と共に沿岸に住んでいたキリスト教徒たちは、そこにきっちりとした定住地を設定し始めた²²。

長崎の開港に関して、純忠はトルレスとポルトガル人たちの要請にすぐには応じなかったとされる。「大村家秘録」によると、元亀元年(一五七〇)この地を調査した南蛮人が大村純忠に対して、今後この浦に入港したいと請願した。しかし、純忠は思うところがあつてなかなか許可を与えなかった。そこで南蛮人は、純忠の実兄にあたる有馬義貞に願ひ出て、斡旋の労をとってもらつた。義貞からの手紙を受け取つた純忠はやむを得ず承諾を与えることになつた²³。

純忠が当初長崎の開港に消極的であったと「大村家秘録」は指摘するが、何故、彼は初めから快諾できなかったであろうか。純忠は甚左衛門の所領長崎に対して領主としての強権を発動する立場になかったためであろうか。甚左衛門と有馬氏との関係が大村氏同様に深く、有馬氏が長崎に強い影響力を有していたと思われるために、純忠はすぐに決断できなかったためであろうか。甚左衛門が永禄年間に長崎港に渡来した中国船との取引関係を維持していたと思われることから、純忠はこのことを配慮して、ポルトガル船の入港を許すことになれば甚左衛門の中国船貿易に支障をきたしその権益を侵害することになって彼の関係がこじれることを懸念したのであるか。甚左衛門が純忠に臣従した時期は定かでないが、その時期は浅く両者の関係はまだそれほど強固でなかったことが原因して決断できなかったのではないかと思われる。南蛮人、トルレスとポルトガル人たちが有馬氏に斡旋を依頼したという背景には、純忠が有馬氏に長崎開港の意向を打診したことを示唆しているように思われる。それは、純忠がキリスト教への改宗を決意した際に、十字架を頸から垂して義貞の前に出て暗黙の了解を得ようとした行為に通じるものである。

長崎の港が開かれ、翌元龜二年（一五七一）三月には六つの町の造成が始まった。イルマン・ミゲル・ヴァスの一五七一年十月八日付の志岐発信書翰には、次のような記載がある。

時が経って、シナ（マカオ）のナウ船と一隻のジャンク船がドン・ベルトラメウの新しい港に來た。その港は長崎と称され、その港には今年一つの大きな集落が造られた。そこは、追放されて身を寄せるところがなくやって來たキリスト教徒たちの土地であるためである²⁴。

フロイスは「日本史」（一部九八章）において、長崎の新町に各地から追放されて來たキリシタンたちについて、次のように報じている。

これらのキリスト教徒たちの多くは、各地方からの多数の追放者であり、ある者たちは彼らの領主たちから領外に逐い出され、あるいは彼らが棄教しようとしなかったため「郷里を」立ち去った者たちであり、他の者たちは戦のため故郷が破壊されたためそこを離れて來た者たちであった。これらのある者たちは島原から、他の者たち

編集上の都合により
掲載できません

図4-5 長崎新町六町位置図

は志岐、五島、平戸、山口、博多、および様々な国から来た者たちであった²⁵⁾。

長崎新町の町建てについて、「長崎邑略記」は、元龜二年末三月に島原と大村の両主が相談の上で諸商人が入り来たために六丁の町を建てたとする。また、「長崎年来記」には「島原大村当地の者とも相謀て森崎と一の堀の間に六町の町を立始る」とある。

『長崎実録大成』によると²⁶⁾、元龜元庚午年に長崎湊に南蛮船が初めて着岸し、今後長崎を渡りの津に定めた旨を領主大村理専に願った結果、翌年三月家来友永(朝長)対馬を長崎に遣わして地割を始めた。同書は、旧記として、「元龜二年町割有シ時、島原町ハ有馬修理大夫建^レ之、大村町ハ大村理専建^レ之由見ヘタリ。評ニ曰、其頃長崎ハ大村家ノ領地ナルニ、有馬家ヨリ島原町ヲ建、大村家ヨリ大村町一町ヲ建、其外諸處ノ者此地ニ来テ心ノ儘ニ町造リスヘキ理有^レ之哉。是年々出来セシ町筋ノ内ニ、同郷親族ノ者近隣ニ集リ住テ、或ハ島原ノ者、或ハ大村ノ者住居セシ町筋ヲ、自然ト其町名ニ呼習セシ由也」を採っている。

長崎の新町六町の町建てが、当初から六町が設定されて町建てが始まったか否かは明確でないが、『長崎実録大成』に収載・採用された旧説が、町建て当初の実態を語っているのかもしれない。「長崎邑略記」には、六町出来に関わる記載が見られる。

嶋原町 有馬氏御舖立、^(マ)両測ハ町屋也

大村町 大村利仙御屋舖立、^(マ)両測ハ町屋也

平戸町 平戸出生日野浦与左衛門居住

横瀬町 横瀬浦五右衛門居住

外浦町 同人屋舖有、後ニ乙名役

文知町 文知坊居住

長崎頭人後十六人アツテ諸事ヲ支配ス

頭人一六名の中には、高木新七郎、高木勘左衛門、町田市郎右衛門、佐々木茂四郎（後、高島四郎兵衛と称す）、白倉怒庵、須川主水、横瀬浦五右衛門、日浦与左衛門、馬場甚兵衛、平戸屋文知坊らの名が見られる。また他国から来た牢人は皆長崎甚左衛門の一味同心の人であり、馬場甚兵衛は甚左衛門の従弟である、という。

「長崎縁起略説」によると②、平戸町は日浦与左衛門が町建てし、横瀬「浦」町と外浦町は横瀬浦与五右衛門が乙名を務め、文知町は文知という者が以前から家居が大なるために町の名となった、という。宣教師たちの報告では、各地方から集住した新町六町の住人の来歴は一樣に信仰のため、また戦乱のため長崎に移り住んだという認識である。横瀬浦町と外浦町の乙名で住人の横瀬浦与五右衛門の前歴は不明であるが、横瀬浦港に関わった者であったたのであるうか。同港の焼失・荒廢により福田港の開港に伴って同地に移り、更に長崎新町の町建てにより同地に移住して来た者であったのであろうか。もしそうだとすればキリシタンであった可能性が高い。平戸出身の日浦与左衛門のほかに、平戸屋の屋号を持つ文知坊も平戸出身者と思われ、共に貿易に関与していたのであろう。

新町の頭人の一人馬場甚兵衛が長崎領主の甚左衛門の従弟であったことは、甚左衛門が新町六町の町建て後もなお、長崎港において影響力をもっていたことをうかがわせ、彼が中国船貿易において確保していたと思われる権益がポルトガル船との取引においても保証されたことを予測させる。

長崎に新町六町が建ち、ポルトガル船がマカオから来航したことによって、長崎は名実共にキリシタンと貿易の町として発展する基礎が一五七一年に置かれた。この年、フイゲイレド神父によって新町六町の端近い岬に小教会サン・パウロ教会が建てられた。新町のキリシタン住民と来航したポルトガル人たちのための教会であった。上長カブラルは同年九月長崎を発って上洛し、翌一五七二年五月になって長崎に帰還した。この年、大村純忠は、後藤貴明・松浦隆信・西郷純堯の連合軍に急襲されて三城城に籠城した。いわゆる、三城七騎籠である。「大村家覚書」によると、元龜三年七月晦日、陽暦では一五七二年九月七日のことである。これに連関して、長崎は西郷純堯の弟深堀純賢の攻撃を受け、甚左衛門の城山の麓に建ち並んでいた家屋が焼かれ、トードス・オス・サントス教会も焼失した。新町の六

町も危険にさらされた。

フロイスは、この事件を一五七三年のこととして「日本史」(一部一〇〇章)において扱っている。新町六町の住人たちが果敢に戦って町を守ったことが述べられている。この防衛戦は聖週間に起こったことである、とされる。フロイスは当時京都にいたから、「日本史」執筆時に蒐集した資料や伝聞によって書いたものであり、時間的ずれがある可能性もある。フロイスの指摘どおりに戦いが聖週間であるとすると、一五七三年の聖週間は三月十六日～二十一日(土)までの期間である。したがって、甚左衛門の城下の家屋とトードス・オス・サントス教会の焼失は、三城七騎籠から六ヵ月以上のちのこととなる。フロイスによると、新町、「現在の長崎」は木柵を築き岬 *Ensa de Lays* を切り開いた砦(城塞)の集落であった(28)。

「長崎縁起略説」は、六町について「一ノ堀とハ嶋原町後藤氏ノ堀也、又二ノ堀ハ桜町ニ有リ、今ノ札ノ辻也、三ノ堀ハ今ノ高木氏ノ辺、是ヲ三ノ尾と云、是昔勝山左近と云人ノ屋敷也、依テ今ハ名を勝山町と云」と伝える。「長崎来由記」もほぼ同様の記載である。一五七三年の時点で既に三つの堀があったということは考え難いが、かなりの防備がなされていたことは否定できない。

深堀氏に攻められて劣勢であった甚左衛門は、フロイスが「日本史」で指摘するところによると、深堀氏に恭順の意を示そうとしてパードレとポルトガル人たちとの関係を清算しようとした。彼らに宿を与えず、彼らが運にまかせてどこへでも立ち去るように伝えることを家臣たちと決めたこと、その決定を殿ベルナルドの妻一人が反対して恩あるパードレやポルトガル人たちに手の平を返すような態度を取ろうとする夫を非難したことを、ポルトガル人と結婚していた一日本人女性からの情報として報じている(29)。甚左衛門が実際に深堀氏に内応したか否かは明らかでない。ここで注目すべきことは、彼が一五七二、三年に既に結婚していたことについてである。

「長崎邑略記」は、甚左衛門純景は二五歳の時に「本国の領主大村丹後守智」になったとする。彼が二五歳の時は天正二年(一五七四)に当たり、前述のフロイス「日本史」の記載内容から、一五七四年結婚説は否定される。「大村家

覚書」三には、純忠の第五子に当たる三女が純景に嫁したとある。第三子の長男喜前は一五六八年の出生である（大村家史料では一五六九年となる）。第五子の記載は喜前の後に生まれたことを指しているのであるのか。とすると、一五七四年に純景と結婚した時には五歳にも満たない年齢であり、その結婚が成立していたとは考えられない。

「藤原姓大村氏世系譜」によると、純忠の三女の母は「家臣一瀬氏の女」である³⁰。一五六三年にキリスト教に改宗した純忠が、受洗後に側室を置いていたのであるのか。受洗以前に出生した子女があるように思われる。外山幹夫は、純景夫人の名はトラであったとし、「恐らく寅年生まれによるとみられる」としてその名の由来について推測し、「天文二十三年寅年（一五五四）」の生まれであると³¹。なお、純景夫妻には実子がなく、有馬修理大夫の末子竜松を養子とした。有馬修理大夫とは有馬晴純のことであり、「藤原有馬世譜」一によると、晴純の五男の丹後守が松浦家の養子となり、その子が甚左衛門純景の娘婿になったとする。丹波守とは松浦丹後守盛である。その後、純景には実子が生まれたと「長崎邑略記」は伝える。

ポルトガル船ナウは、一五七二年以降毎年長崎に来航した。一五七六年に来航したジャンク船一隻は口之津に入港した。イエズス会の上長カブラルは一五七二年九月二十三日付の書翰をインド管区長宛に発信したが、同月二十九日の発信地は口之津となっている。カブラルは一五七三年九月七日に再び上洛の旅に出たが、長崎からではなく口之津から出発した。一五七二年九月下旬以降は口之津に滞在していたようである。

イエズス会の宣教師たちが一五六七年以降一五七九年までに肥前国の各地から発信した書翰数は五五通に上るが、口之津発信が一九通であるのに対し、長崎発信は九通である。一五七二年に二通、一五七五年に三通、一五七六年に二通で、一五七六〜七九年にはない。このことは、長崎の政状不安と関わりがあるようである。新町がまだ十分に機能していなかったようでもあり、宣教師の来往も一定していなかったのかもしれない。

◆ イエズス会への長崎・茂木寄進

天正七年七月二日（一五七九年七月二十五日）に、カピタン・モールのリオネール・デ・ブリトのナウ船が口之津に到着した。同船でイエズス会東インド管区巡察師アレッシヤンドロ・ヴァリニャーノがやって来た。ヴァリニャーノはマカオにおいて、有馬の若き王鎮純がキリスト教界との和解の意向を示してキリスト教への改宗の可能性があるとの情報をもとに日本在留の宣教師から入手していた。カブラルがローマに送付した一五七八年十月十五日付の書翰は開封のまま送られたから、ヴァリニャーノはマカオにおいてその書翰の内容を知りえたはずである。それによれば、鎮純が自ら将来キリシタンになることを予告したものであった³²。

ブリトのナウ船が長崎ではなく口之津に入港したのは、ヴァリニャーノの意向に添うことを優先したからであろう。ヴァリニャーノは、大村純忠の宗家である有馬義貞アンドレの死後、致命的な打撃を受けた有馬領内におけるキリシタン教界復活の兆しを感じ取っていたようである。事実、ロウレンソ・メシア神父は、一五八〇年十月二十日付で作成した「一五八〇年の書翰（日本年度）」において、鎮純がヴァリニャーノに伝言を送って、「ナウ船を彼の港に入れるためにパードレ・ヴィジタドル（巡察師）が便宜を図ってくれたことを感謝した³³」と伝える。フロイスの「日本史」（二部一五章）によると、大村にいたガスパール・コエリヨ神父は、迫害の張本人であった若い王鎮純が叔父の大村純忠の女との結婚を望んでキリスト教への改宗を思案していることを知って、鎮純の側近でキリシタンのジョアン左兵衛殿（安富得円）の仲介を得て有馬に至り同地に二カ月間滞在したが、彼の改宗までは至らなかった³⁴。それは一五七八年のことであった。

ヴァリニャーノが口之津に到着すると、鎮純は直ちに口之津に表敬のため赴き、ヴァリニャーノもまた返礼のため有馬に鎮純を訪れた³⁵。彼の「一五七九年十二月十日付書翰」によると、鎮純は全領内のキリスト教化を図ろうとして洗礼を受けるため二度までも自ら口之津に赴こうとしたが果たせなかった、という。一度目は口之津へ行こうとして乗船しようとする直前に失神して倒れたため、二度目には龍造寺氏に内応した有力家臣が謀反を起こしたためであっ

En la villa de la donada q' hizo
Dn Bartholomeu Pido Omura de los dos
lugares de Mongui y de Calpaquí

Dn Bartholomeu señor de Omura y su hijo sancho ferido en el pecho
a tornada de guerra al Rey de la Castilla ygo el dho donado para sí y sus
al dicho Rey y al visorrey de Castilla del qual de Calpaquí libre de los
hijos y castros q' el dho Rey sin quedar nada y q' los dho de agora la
pobre della y a p' los dchos p' de la Conf' podrá meter por Capital de dicho
lugar que ellos quisieren y para de los otros y qual quiera q' fuere por ellos
degado los facultad para poder meter y hacer toda la justicia necesaria
para ellos y omura de la tierra y castros de los q' quedare de las leyes de ella
tambien en dho y los para dho de dho para la rra de los p' q' se
p' el dho de Castilla e dho p' de los dchos para ni los derechos de ella
y de todos los dchos y de los dchos p' de los dchos los quales yo mandare recitar
por mis oficiales los quales se se en dho en ninguna cosa q' sea q' sea a la p' q'
para calpaquí de los dchos lugares y de la mesma manera los para dho de los
p' de los lugares de Mongui y de los dchos y castros q' se de la p' de la rra
y para dho de dho para dho de dho de dho de dho de dho de dho de dho de dho
en dho de dho de dho de dho de dho de dho de dho de dho de dho de dho de dho
a los 27 de febrero de dicho año de 1527

Dn Bartholomeu
Dn Sancho

写真4-14 イエズス会への茂木・長崎の寄進状 (イエズス会ローマ古文書館所蔵、長崎市 市史編さん室写真提供)



写真4-15 茂木港(長崎市茂木町)

である。

これは大村の領主ドン・バルトロメウが茂木と長崎の二カ所について行った寄進の内容である。

大村の領主であるドン・バルトロメウとその息子サンチョは、コンパーニヤ(イエズス会)のバードレたちに多く尽くさなければならぬことを考慮して、前記コンパーニヤおよびそのバードレ・ビシタドル(巡査師)に、長崎の町 *puerto* を、その境界に接するすべての田畑一切を含めて永久に無償で贈与する。かくて、私は今からそれを譲渡する。したがって、コンパーニヤの前記バードレたちは、彼らが望む者を、その管理のために前記土地のカピタンとして配置することができる。私は彼らによって選ばれた者には誰にせよ、その土地の良き統治のために必要な裁きをし、同地の法を破る者を罰し殺すことのできる権限を与える。また、私はポルトガル人たちの船 *naves* が前記港に碇泊している期間にいつも支払っているものを永久に譲渡し与える。その港の関税と、前記港に到着するすべての船の税(入港税)は自分のために保留する。私はそれらを私の役人たちによって徴収する

た⁽³⁶⁾。鎮純が有馬においてヴァリニャーノから洗礼を授かったのは一五八〇年の四旬節第一週(二月十七日)から十数日後の三月上旬のことであった⁽³⁷⁾。

一五七九年にポルトガル船が入港しなかった長崎について、カリオン神父は「ここには諸領主から迫害されて信仰を失うまいとして各地から追放されて来た様々なキリスト教徒たちによって造られた四〇〇以上の家屋からなる集落がある。」と報じている⁽³⁸⁾。同地には通常バードレ二人とイルマン一人が居住し、彼らは半レグア(二・七^{キロメ}ト)の入江によって純忠の大村の地と分けられている地方全域のキリシタン教界を担当していた。この年、大村純忠は新町長崎と茂木を天正八年四月二十七日(一五八〇年六月九日)の日付をもってイエズス会に譲渡した。長崎及び茂木譲渡に関する書状、いわゆる譲り状(あるいは寄進状)の文面は以下のとおり

ために「彼らを」派遣する。彼らはその土地の統治あるいは裁判に関わるいかなることにもしも介入しない。このため、私は永久にパードレたちに茂木の土地を、これに付属するすべての田畑と共に付与する。前記寄進を将来にわたって決して変更しない印として、しかし、末長く価値あるものとするために、私は私と私の息子サンチョによって署名されたこの書状を作成する。天正八年四月二十七日

ドン・バルトロメウ

ドン・サンチョ 39

純忠は長崎港に関する関税と入港税とを保有するかたちで、長崎と茂木をイエズス会に割譲し、その統治権と司法権をも委ねた。更に、ポルトガル船の碇泊料もイエズス会に付与した。イエズス会は町の統治と管理のためにカピタン(責任者)を自由に選任することができたし、純忠が徴税のために派遣した役人たちが長崎の統治に関与することを否定した。

純忠による長崎・茂木譲渡の申し出は、ヴァリニャーノが一五七九年秋に大村を訪れた際になされたと言われる。彼は一五八〇年八月十五日付で長崎からローマの総会長に書き送った書翰において、純忠がイエズス会に長崎と茂木を寄進しようとしたことについて言及している。すなわち、(一) 肥前佐賀の龍造寺隆信が大村氏に長崎譲渡を要求する可能性があること、これを拒めば武力行使が予想され、そのために貿易による収益(約三〇〇〇ドゥカド)を失うことになる。(二) 長崎がイエズス会の所有地となれば、ポルトガル船は確実に同港に入り、大村氏は貿易の利益を永久に確保することができる。(三) 何かことが起こっても、常に長崎へ避難でき身の安全と領国の保全のためになるというものであった(40)。なお、ヴァリニャーノは「スマリオ(日本諸事摘要)」(第四章)において、「ドン・バルトロメウはその土地と一緒に、私たちに一〇〇〇クルザードに相当するナウ船の碇泊料を与えた(41)」と報じている。

日本イエズス会は、大村氏の申し出を受けるべきか否かを、第一回協議会の議題に加えた。協議会は豊後・都下の三教区で分割開催され、「二十一議題」のなかで、「議題十四 長崎と茂木の土地を所有することが善いか否か」



写真4-16 狩野内膳筆 南蛮屏風(右隻部分)
(神戸市立博物館所蔵、大村市教育委員会写真提供)

が提起された。まず一五八〇年十月に豊後臼杵において会議がもたれ、次いで翌年七月に安土山において、最後に一五八二年十二月に長崎において論議され、ヴァリニャーノが裁決を下した。協議会出席者二六名が議論し、長崎・茂木の二カ所を受け入れ所有することで一致をみた。すなわち、

① 下地方には戦争が絶えず、異教徒の領主たちが支配しており、イエズス会は貿易と船のために全資産を長崎に有しているため、安全堅固な土地を持つ必要がある。長崎は安全堅固な土地であり、この地を征服する者は船から期待する莫大な利益のためにパードレたちを同港に保持することを喜んでいる。

② 迫害を受け、戦争勃発のために土地を追われたキリシタンたちの維持のために長崎は避難所となる。

③ 大村領にある住院の扶養費や、諸領主への贈物の経費調達が船の来着により好都合である。

④ ポルトガル船の来航により、イエズス会が必要とする必需品が容易にもたらされ、好便である。

⑤ イエズス会はいつでも同地を手離すことができる自由裁量権を有している。

以上の理由によって、イエズス会がこれらの土地を取得することがいかに重要であるかが、長崎港の近くにいる異教徒の領主たちのイエズス会に対する対応から分かり始めた、と結論している。同問題における議論に対するヴァリニャーノの裁決は土地を手放し得るという自由裁量を日本布教長に委ねるといふ条件で、長崎と茂木の所有を妥当とした⁽⁴²⁾。

イエズス会は、本来、「会憲」の定めるところによって土地の所有は許されなかった。このため、ヴァリニャーノは協議会の議題として採

り上げて、長崎・茂木寄進問題には慎重な対応をした。彼は協議内容とその結論をローマの総会長に上申して特別の裁可を要請した。総会長はこれを認可し、ローマ教皇グレゴリオ一三世も承認するところとなった(43)。

「一五八〇年度日本年報」もまた、大村氏が長崎・茂木の寄進をイエズス会に申し入れた理由の一つとして、佐賀の龍造寺氏の長崎港に対する野心について述べている。龍造寺氏が長崎港を大村氏から奪おうとしていることを大村氏が怖れていたこと、また一方で、パードレたちが大村氏に与えてきた恩恵と好意に報いるためであった(44)、と指摘している。

「大村家覚書」巻二によると、天正八年(一五八〇)深堀純賢と西郷純堯が長崎を攻め、甚左衛門は大村純忠の援軍を得て深堀氏を敗北させた。またこの年には純忠は龍造寺氏に招かれて佐賀に赴いて和談し、女を隆信の四男江上又四郎に嫁がせたが、一方で嫡男喜前を人質としてとられ、龍造寺氏への臣従を強いられた。純忠の佐賀訪問がイエズス会への長崎・茂木寄進状作成以前であったのか、それ以後であったのかは判然としない。龍造寺氏が大村氏を攻めたのは天正六年一月十三日(一五七八年二月十九日)であり、大村にいたグレゴリオ・デ・セスペデス神父の書翰によると、六〇七〇〇からなる龍造寺勢は郡の戦いで四〇〇名を殺されて退却した(45)、という。これ以降一五七九年には大村氏と龍造寺氏との間に戦いはなく小康状態にあったようであり、一五八〇年の純忠訪問となったのである。

純忠の長崎・茂木寄進の意向は一五七九年秋にヴァリニャーノが大村を訪問した際に表明されたとされることから推測すると、純忠の長崎港に対する懸念は、龍造寺氏の長崎港強奪というよりは、ナウ船が有馬領口之津に到着したことによって、しかも、甥の鎮純がキリスト教への改宗を表明して領内のキリシタン化に努めつつあったことよって、ポルトガル船の入港地が長崎から口之津に変更されるのではとの現実的問題にあったようである。鎮純がヴァリニャーノの口之津来着によってキリスト教に急速に傾斜し、彼のキリスト教への改宗が時間の問題となりつつあったことに、純忠は焦燥感を抱いていたようである。鎮純は一五七九年十月ないし十一月頃に洗礼を受けるため口之津に

赴くはずであったから、彼の改宗によって口之津がポルトガル船入港地として固定するのではと考えてしかるべきである。一五八〇年にナウ船は長崎に入港したが、ジャンク船は口之津に到着した。

純忠が長崎・茂木の寄進をイエズス会に申し出た最大の理由は、ポルトガル船の来航地が口之津に移ることに危機感を抱き、これを阻止するためであったようである。茂木の地は、恐らくイエズス会の要望に依って、純忠は譲渡したのである。イエズス会は大村領のキリシタン教界と同様に、鎮純の改宗を契機に有馬領に強大なキリシタン教界を作れることを願望し、そのために同地に教育機関の一つセミナーオ（神学校）を設置することをヴァリニャーノは早くから構想していたと思われることから、長崎港と有馬を結ぶ中継地としての茂木の占める地理的位置が重要視されたのであろうと思われる。

（五野井隆史）

註

- (1) Cartas. I. f. 282v.
- (2) Jap. Sin., 6. f. 250.
- (3) Cartas. I. f. 283v.
- (4) *ibid.* f. 284.
- (5) *ibid.* f. 268.
- (6) *ibid.* f. 284.
- (7) 前掲註(6)
- (8) アルメイダ、一五七〇年十月二十五日(十五)日付平戸発信書翰(Cartas. I. f. 294.)
- (9) *ibid.* f. 296. フイゲイレス、一五七〇年十月二十一日付平戸発信書翰(Cartas. I. f. 297v.)
- (10) Cartas. I. f. 296.
- (11) *ibid.* ff. 297v.~298.

- (12) *ibid.* f. 318.
- (13) Jap. Sin., 7Ⅲ, f. 68v. *Cartas*. I. f. 317.
- (14) 大村市立史料館所蔵 史料館史料(請求番号)一〇二一八 「新撰土系録」卷之十 複写
Cartas. I. f. 252.
- (15) *ibid.* f. 253v~254.
- (16) Jap. Sin. 6, f. 249.
- (17) *Cartas*. I. f. 302v.
- (18) Jap. Sin. 6, f. 250v.
- (19) パチエロ・テイエロ著・佐久間正訳『長崎を開いた人―コスメ・デ・トルレスの生涯―』中央出版社 一九六九 二〇二頁
- (20) Schütte, *Textus Catalogorum Japoniae*. p. 395.
- (21) Frois, *HISTORIA*. II. pp. 376~377.
- (22) 長崎県史編集委員会編『長崎県史』対外交渉編(吉川弘文館 一九八五) 五一頁
- (23) *Cartas*. I. f. 316v.
- (24) *HISTORIA*. II. p. 377.
- (25) 田辺茂啓著・丹羽漢吉・森永種夫校訂『長崎實録大成』正編 長崎文献叢書 第1集第2卷(長崎文献社 一九七三) 四頁
- (26) 長崎歴史文化博物館蔵 福田文庫(オリジナル番号)テ13 125 「長崎縁起略説」全 写本(中尾貞治/写本)
- (27) *HISTORIA*. II. pp. 391, 393.
- (28) *ibid.* p. 390.
- (29) 大村市立史料館所蔵 史料館史料(請求番号)一〇二一七六 「藤原姓大村氏世系譜」複写
- (30) 外山幹夫『中世長崎の基礎的研究』(思文閣出版 二〇一一) 三〇八頁
- (31) Jap. Sin. 8 I, f. 202.
- (32) *Cartas*. I. f. 461v.
- (33) *HISTORIA*. II. pp. 499~500.
- (34) フランシスコ・カリオン 一五七九年十一月十日付口之津発信「一五七九年度日本年報」(*Cartas*. I. f. 434v.)
- (35) Jap. Sin. 8 I, f. 244v.
- (36)

- 〔37〕 HISTORIA. Ⅲ. (1部1九章) pp. 139, 141~143.
 Cartas. I. f. 435.
- 〔38〕 Alejandro Valignano S. I. SUMARIO de las Cosas de Japon (1583). ADICIONES del SUMARIO de Japon (1592). editados por José Luis Alvarez-Taladriz. Tokyo. 1954. Introduccion. p. 70.
- 〔40〕 Jap. Sin. 81. f. 277. 五野井隆史『日本キリスト教史』(吉川弘文館 一九九〇) 二二九~二三〇頁
- 〔41〕 SUMARIO. p. 79.
- 〔42〕 井手勝美訳『日本イエズス会第一回協議会(一五八〇—一八二)と東インド巡察師ヴァリニャーノの裁決(一五八二)』(キリシタン文化研究会編『キリシタン研究』第二十二輯 吉川弘文館 一九八二) 二四六~二九二~二九三~三三八頁
- 〔43〕 H・チースリク『キリシタン知行地長崎』(キリシタン文化研究会編『キリシタン文化研究会会報』通号21(6巻3号) キリシタン文化研究会 一九六二) 五~九頁
- 〔44〕 Cartas. I. f. 467.
- 〔45〕 セスベデス 一五七八年大村発信書翰(Cartas. I. f. 410)

参考文献

大村市立史料館所蔵 史料館史料(請求番号)一〇一—一六「大村家覚書」二 三 複写

第五節 天正遣欧使節と大村氏

一 使節派遣の背景と目的

一五八二年二月二十日(天正十年一月二十八日)、一五七九年七月に来日して以来、日本のイエズス会とキリシタン教界の実情把握に努め、豊後臼杵・安土山・長崎において協議会を主宰して日本イエズス会の今後の宣教方針を確立したイエズス会東インド管区巡察師アレッシヤンドロ・ヴァリニャーノが、ローマに帰還するため長崎の波止から出発した。彼はその際に、豊後の大友宗麟、肥前の有馬鎮純と大村純忠のキリシタン大名の名代として、四人の少年



写真4-17 ヴァリニャーノ神父肖像
(大村市立史料館所蔵)

を帯同した。いわゆる、天正遣欧少年使節(巻頭写真)である。

ヴァリニャーノが、使節たちの記録や覚書を整理編集してスペイン語で著わし、これのラテン語訳をドゥアルテ・デ・サンデ神父に委嘱してできた『天正遣欧使節記』(1)の本文「対話一」には、遣欧使節派遣の目的と理由が余すところなく語られている。すなわち、

第一の理由は、イエズス会の巡察師、パードレ・アレッシヤンドロ・ヴァリニャーノが日本まで航海して来て、第一に日本人たちの習慣がヨーロッパ人たちのそれと極めて異なることを経験によって認識したことである。のちには、地理的距離の大きさのために、ヨーロッパの諸王国・諸地方の広がりや壮観さ、王侯たちの権威と権力、そしてその他の賞讃に値する多くの事柄が日本の島々に容易に伝えられず、漠然とした風聞によっても同様であることを知った。このほかにも、彼は、当地で私たち同国人(日本人)たちがヨーロッパについて話していたコ
ンパーニャ(イエズス会)のパードレたちを少しも信用していないこと、そしてそこから、靈魂に対する偏見によつ



写真4-18 大友宗麟像(模写)
(京都市 瑞峯院所蔵)



写真4-19 有馬晴信像(福井県坂井市丸岡町 台雲寺所蔵の複製)
(南島原市教育委員会所蔵)

て、また少なくとも最も望ましい精神的な成果については多くの不利な状況が生じていたことを確認した。彼が早急に決断して、私たちの国からヨーロッパへ数名の領主や貴人 *Princes & Nobles* が渡航することが最大の便法であると考えたのは、噂がもっぱら外国人を通じてのみ私たちに達したことに対して、彼らが自らの目で見、世界のその地方の状況とすべての物事を手で触れるためであった。そして、それらについて祖国に戻った時に、人々の面前で適切な証言をなし、またあらゆる虚言の疑惑を払拭して、私たちが間違っていて理解していたヨーロッパの事情についての誤解を改めさせるためであった²⁾。

第一の理由に続く第二の理由については、イエズス会のパードレたちが神すなわちデウスの真理の光を伝えるために日本に来られたが、この教えと教理は私たちにはまったく知られていなかったたので、人々が神々や仏の偽った宗教に浸っていたために、パードレたちが日本人たちをその無意味な宗教から遠ざけ、キリスト教の教理が真理に完全に一致していると彼らに納得させることは常に難しいことであつた。(中略)。他方、今まで日本に来たパードレたちは、私たちの生活の規範に従って控え目で目立たない質素な方法で私たちの間にあり、しかも外国人であるためにいかなる権力も權威をも用いなかったので、私たち国民は彼らの風采や生活の仕方に「気を配って」キリスト教の御名の威厳や偉大さを知ることができなかった。逆に、外見で判断して、むしろ彼らが語っていた教えがそれ自身卑俗な生活様式を含んでいると決めつけて、他の疑惑に陥ってしまったてであるうし、更に同様に起こってしまったことを詮索していることである。このことから様々な思いつきによって心を紛らわせたため、キリスト教信仰の発展はひどく遅れてしまった。こうした事情のために、私たちの国から著名な家柄の者数名が、キリスト教が栄えている世界のその地に行くのは当然のこと

あつた。それは、彼らが神の真理の光が人間の精神を高めている光輝と誉れがどれほどのものであるか、キリスト教が人類に立派にかつ幸福に生きるためにどれほどの恩恵をもたらすものであるか、そしてついにはこの光が照らしている人々といまだに闇の中に生きている人々の間にどれほどの差異があるかとの理解を得るためであつた。このことは、遠方からの風聞に基づく漠然とした噂やあいまいな言葉によるのではなく、実見して、会話によつて、親しく交わることによつて、また確かな経験によつて理解を得ることである。そして、彼らがすべて明白に得られた知見について、祖国に戻つた時に私たちの国民のすべてに知らせるためである(3)。

いわば頂点にあるのは第三の理由であり、あなたがたもまた快く認めるであらう。思い出していたきたいことは、この地上においてキリスト教信仰の創始者である真実のデウス、キリストの機能を有している全キリスト教徒の最高の高位者ないし教皇がおられることであり、彼はヨーロッパにおいて最も高貴で最も著名な都市、すなわち世界の大部分の上にはば常に権力を揮つてきたローマに、既に数世紀にわたつて固定された本拠を持つておられる。彼はこの地から世界にある最も正確な神託所のごとく、法律を定め、重大な問題に回答を与え、至上の牧者に似てキリスト教共和国全体を統轄しておられる。彼の許にはしばしば高貴な人々や非常に重い身分の司祭たちや王たちが駆けつけ、できることならば彼ら自身が自ら「赴いて」至高なる父に対する哀願者の如く膝づいている。もしも自ら出向く可能性がなければ、彼の使者を遣わして地上におけるこの最高の權威と聖性を再認識している。このようにして、手足と頭との間、牧者とその羊の群との間にはしかるべき信仰の一致が維持されているのである。さて、神の恩寵によつて私たちの国民の少なからざる一部の者がキリスト教の教えを聴いてこれを受け入れたのち、主ご自身とその最高の代理者の宗教に移つて、甚だ幸せな人々の数の中に加えられたのである。しかし、並外れた「遠大な」距離のために、私たちの許にはローマや、ローマ人及び教皇聖下についての一種のあいまいな評判しか届かなかつたことである。また教皇の耳には日本及び日本の諸侯に関する薄弱な噂さえほとんど届かなかつたことである。私たち日本人がいかなる種類の人間であるのか、その才智があるか劣つて

いるか、名譽や評判に関心を抱いているか否か、あるいは名譽や名声にまったく顧慮しないのか否か、学芸があるか、あるいはこれに完全に無知であるのかということである。そして、パードレたちの書翰によって蒐集された情報は別として、他の多くの詳細を知らないもので、既にキリスト教信仰に適應してきた日本人領主たちが教皇を訪問して、同じ宗教「を信じる」外の諸侯の慣例に従って教皇の足下に大いなる喜びをもって口づけをするために膝づくことができないので、せめても自らと血縁につながる若者数名を遣わして、大使としての任務を負わせて領主たちの名代で敬意を表し、このようにして、これまで漠然としか知られていなかった日本の名が世界において最も名高い舞台であるローマにおいて更に際立ったものとなるようにすることであった。そして、教皇ご自身も臣従する誕生したばかりの息子たちを、例え「ローマに」不在であつても、父の愛と望ましい好意をもって抱擁し、いまだキリスト教信仰に教化されていない他の者たちが、このような慈悲と父の慈愛という証をもつて、できる限り早くこの信仰を受け入れるようにすることであつた。これらは、イエズス会の巡察師アレッシヤンドロ・ヴァリニャーノが豊後と有馬の王であるフランシスコ(大友宗麟)とプロタジオ(有馬鎮純)に、そして大村の領主バルトロメウ(大村純忠)に表明して、この使節を組織する準備に着手した。そして、彼はこれらの理由を説明して、これらの領主たちが教皇聖下への公式使節「legados」としてマンシヨと私(ミゲル)を、同行者(副使)「compañeros」のマルティーニョとジュリアンと共に派遣するようにした(4)。

以上は、大使の一人千々石ミゲルが「対話一」において語ったことである。

ルイス・フロイスは『デ・サンデ天正遣欧使節記』に依拠して、「日本人使節のローマ行記」(遣欧使節行記)「*Relato dos Embaixadores Japões que foram de Japão a Roma*」を執筆した。彼は遣使の理由について四点挙げている。その記すところは以下のとおりである。

第一の理由は、日本において聖福音の宣教が許されて三〇年になり、彼ら(三大名)が教皇聖下の羊(信者)となって信仰の絆によってローマの聖なるカトリック教会の子となったために、その牧者に感謝し、教皇聖下の足下に

Tratado
dos
Embaixadores Japões
que foram de Japão a Roma
no Anno de
177369 1582.

Capitulo primeiro
De como se ordenou a Em-
baixada dos Senhores Japões
para Europa.
E de sua partida para
a China.

De Roma foi enviada por Visitador da Índia, e
rigoroso Sr. Alexandre Veliquano pelo Most. e Sp. Com.
rario Mercaviano de Santa Memória: o qual Japoy de
seu visitado se partiu da Índia, Malaca, e China, veio a
Japoy, e onde comtinha a cidade, visitou por casualmente
os principaes Christãos das partes de Ximo, a que por se-
ra o nome Chama, e a cerca de que se dizem os Reynos de
de Occidente de Japoy, e de Japoy, continuados em sua Jp.

膝づくこの聖会の子としてその従順の意を表すことを多年にわたって延期することは重大な怠慢と思わざるをえなかつたことである。彼らがその聖なる御足を頭上にいただいたのち、そちらから至聖なる御父の祝福を彼らに送っていただいたことである。

第二の理由は、日本人たちがそのような遠く離れた島々に住んでヨーロッパとの交流を欠いており、またキリスト教徒となつた国王たちや領主たち *Reys e Princes* には、そこ(ヨーロッパ)で起こっていることについてパードレたちが彼らに説明してきたこと以外に情報がないために、彼らの信仰を更に根づかせ、教皇聖座について抱く優れた見解と評価を確認するために、高貴な日本人数名が、地上において私たちの主であるデウスの代理者が定められている卓越さを、またカトリック教会の現状と絶対的なすばらしさを、神聖な儀式が執行されていることよつてみられる崇敬さと、壮麗さと威厳を、またキリスト教徒の諸王侯 *Reys e Princes* の壮大さと気高さを、かつ各建造物の豪華さを、そしてその富裕さと国家と都市の価値や洗練さを、またそこ(ヨーロッパ)にある多くの修道会とその聖性、宗教生活における完璧さを直接に見ようとすることは必要であり、また重要であると思われるからである。そして、彼らが目撃の証人としてそれらを詳しく土地の人々(日本人)に語ることができたためであつて、このことは、同じ事柄に関わつているヨーロッパのパードレ自身によつて語られるよりもつと受け入れられるであろうし、また疑問の余地のないことであろうからである。

第三の理由は、これらの領主たちが——日本人たちは自分の名を不朽のものにすることに強くこだわっているために——この「事業の」名譽に関する最初の成果を得ることを願望したことである。特に、それは甚だ優れて遠大なものであつたことであり、また彼らの子孫あるいはのちにキリスト教徒になる他の領主たちにこの機会を与えないためである。そのため、彼らは、事実、厳密に言えば日本においてカトリックの信仰を受けた最初の王侯である。そして、このことについては、天にある教皇グレゴリオ十三世が既に以前に豊後のフランシスコ王に送つたその父なる愛情に満ちた小勅書に、彼らが感謝していたことである。その中で、「教皇は」彼をこの上なく

慰撫し、その艱難に対して励まされ、かつ思いやりのある言葉をもって、彼の改宗がいかに大きく受けとめられ、そしていかにこれに感謝しているかということを発表された。

第四の理由は、その時、パードレ・ヴィジタドール（巡察師）がインドに出発するという甚だ時宜を得た好都合な機会を与えられたからである。彼は厚く尊敬されて権威ある人物であるので、彼が日本のこのキリスト教界に関わっていることが知られるほど大きな愛情と深い愛着を抱いているために、日本人たちは彼に絶大なる信頼を寄せている。そして、何度も繰り返し主張していたように、彼が「ヨーロッパへ」帰還する最も有力な理由は、

教皇聖下とフェリペ国王陛下に対して日本の改宗について、特に完全な報告を申し上げることであった。そして、彼がなしうる限りそれを拡大し強化するために尽力することであった。このため、彼の信用と影響力をもってすれば、かように際立った重要な使節のために必要であった準備が、この予期しない突然「の決定により」欠けていた不足をヨーロッパでは余り感じないことであろう(5)。

フロイスは「遣欧使節行記」において、遣欧使節派遣の理由として、三人のキリシタン大名がローマ教会に受け入れられたにもかかわらず、教皇に対して感謝し従順の意を表明することを長きにわたって怠ってきたこと（第一の理由）、そして、彼らが教皇への使節派遣に関して最初の実践者としての榮譽に浴したいたとの願望を持っていたこと（第三の理由）、そしてこの時期に巡察師のインド・ローマ帰還という機会を与えられたため（第四の理由）と指摘する。『サンデ天正遣欧使節記』においてはフロイスの指摘する第一と第三の理由について言及されていないが、第三の理由を述べるなかで、高貴な人々や高位聖職者や国王たちがしばしば教皇を尊敬し、彼らが表敬できない場合には使者が代参していること、日本の諸領主もヨーロッパの諸侯の慣例にならって教皇の許に赴きその足下に膝づくこと、それができないならば血縁につながる若者を遣わして敬意を表し、世界の舞台であるローマへの日本人の登場について語っている。そして、遣使の発議は巡察師によってなされ、遣使の準備も彼によって進められた。巡察師ヴァリニャーノは大友、有馬、大村の三大名に遣使について話したという(6)。

遣欧使節のローマにおける処遇と評判についての報告が日本にもたらされた時、同使節の処遇に強い異和感を覚えたパドレ・ラモン神父は、一五八七年十月十五日付で生月からローマのイエズス会総会長に書き送った書翰において、使節派遣の決定時期と大友宗麟の当使節派遣への不関与について興味深い報告を行っている。

パドレ・アレッシヤンドロは豊後に着いた時、私と一緒に府内にいたマンシヨをすぐに有馬のセミナリオに送りました。あるいはその時、または少しのちに私たちが彼を送りました。このことは余り問題ではありません（確かなことは確かなこととして、また疑しいことは疑しいこととして言うためです）。パドレ・アレッシヤンドロが乗船するために長崎に滞在していた時、ほぼ二〇日、あるいは多分三〇日ほど前に、そちらに行った例の少年たち *marceos* を派遣することを決定した、と言うことで十分です。そして、この決定が余りにも急で突発的なことでしたので、尊師（アレッシヤンドロ）は豊後の修練院にいた都生まれのイルマンを彼らと一緒に派遣しようとしたが、彼を呼び寄せる時間がありませんでした。このため、その代わりにイルマン・ジョルジェが赴きました。そのようなわけで、フランシスコ王すなわち豊後の屋形は自分の使者としてマンシヨを送ることを考えたことはありませんでしたし、また、彼らが発した時まで、マンシヨが他の者たちと一緒に出発したということも知りませんでした。私は以上のことを詳細に熟知しています。なぜなら、私はすべての点でフランシスコ王に掛け合い、彼の告解を聴いていたからです。なによりもまず記憶に誤りがなければ、この件について彼と話していた時に、彼は私に、何のためにあの子供たち *marceos* をポルトガルに送るのかと言いました。私は彼に、日本人たちにあちらを見せるためであると答えました。……豊後の王には使節を遣わすという考えは決して生じなかつたことであり、そのような書翰を書かなかつたことをも、私は確かに知っています②。

右のラモンの書翰からは、ヴァリニヤーノがインド帰還のため長崎を出発する二〇日ないし三〇日前に遣欧使節の派遣を決定したこと、そして、この遣欧決定には大友宗麟がまったく関わっていないなかつたことが知られる。ヴァリニヤーノが使節一行に同行させたいと思つた日本人イルマンを呼び寄せる時間がなかつたという指摘からは、豊後と

長崎との間を往復する余裕がなかったことが示唆され、宗麟に使節派遣について説明し、その了解をえて教皇やエズス会総会長宛の書状をえることも不可能であったことが推察される。フロイスが「遣欧使節行記」において、使節派遣の決定が予期しない突然のことであり、そのために遣使の準備不足が顕著であったとする指摘は、ラモンの書翰によって十分に納得されることである。

巡察師ヴァリニャーノのインド帰還は、一五八二年一月六日に終了した長崎の協議会において既決していたし、もしも彼が戻れない時には、彼に代わる人物が様々な懸案事項を協議するためローマに行くことが全会一致で決定していた⁽⁸⁾。しかし、この協議会では、遣欧使節の派遣問題が議題とされ、これについて論議されることはなかったようであり、協議会とその裁決には同問題に関する発言は皆無である。ヴァリニャーノがインド帰還を控えて、協議会終了後に突如使節派遣を決断・決定したことは否定できない。しかし、既に紹介した『デ・サンデ天正遣欧使節記』の「対話一」の第一・第二の理由と、フロイスの「遣欧使節行記」の第二の理由において、日本人がローマやヨーロッパ世界の実情を実際に見て体験し祖国に戻ったのち、それらを証人として語ること、いわば「語り部」としての役割が遣欧使節に期待されていた事情を考える時、ヴァリニャーノは案外早い時期から遣使計画について思い巡らしていたのではないかと思われることである。その背景について探ってみる。

日本のキリシタン教会が初期教会の状況に近いとの思いを抱いて一五七九年に来日したヴァリニャーノは、日本教会の実相と実態を知り、深い失望を味わった。当時のキリシタンの数は推定一三万人であり、これはザビエルの宣教開始から三〇年間の成果であった。彼は何故に日本宣教に失望し不満を抱いたのであるうか。彼が身をもって経験したことは、日本におけるイエズス会宣教師たちの献身的な活動にもかかわらず、その活動が正当に評価されず宣教師たちの言動さえもが疑念を持たれていたということである。日本滞在を重ねるほどにその思いは募り、その打開策を講じざるをえなくなっていたようである。そうした状況下に、日本布教長フランシスコ・カブラルをはじめとした宣教師たちの貧弱な日本理解と日本の文化・習俗に対する姿勢がどのようなものであるかを知った彼は、日本宣教が期

待していた以上の成果を上げていなかった解答を見出したようである。

来日して一年以上が経った一五八〇年十月、彼は白杖で開催された協議会において「日本において仏僧が用いている気質かたぎと儀礼を万事遵守することが善いか否か」(議題第一八)を諮問し、その第二項で「巡察師の名をもって、我々会員同士と他人との交際において守るべき習慣および気質の適切な指針が作成されるべきである」との見解が支持された。これを受けて、ヴァリニャーノは「指針」作成の準備を豊後居住の同僚に指図して上洛した。一五八一年十月に豊後に戻った彼が一気に書き上げたと言われるのが、「日本の習俗と気質に関する注意と助言」(『イエズス会士礼法指針』9)である。これはヨーロッパ人宣教師に対する行動指針とも言うべきものであり、日本の宣教活動において宣教師に何が必要であり何が問われているかという切実な問題を提起している。その序文において次のような助言が述べられている。

パードレヤイルマンが日本の習俗や気質に応じた行動をするために……幾つかの必要な助言が簡潔に記される。これらの助言によって、パードレヤイルマンは上記の気質と習俗に対しては彼らにとつて十分なだけの正しい教養 *education* をもつて振舞うことができよう。これらの助言がなければ、彼らは多くの不躋 *edges and sins*、不作法に落ち入らざるをえないばかりか、彼ら自身の評価並びに宗教(キリスト教)にひどい損害を与え、キリスト教徒にも異教徒にもなしうる成果を大いに失うことになる¹⁰。

ヴァリニャーノは、宣教師が日本の教養すなわち、礼儀作法に匹敵するだけのものを身につけて行動すべきこと、日本の習俗・気質に関する知識(教養)が欠如していれば宣教師の評価が落ち、彼らの説く教えにも傷がつき、本来得られるべき成果が失われてしまう、と指摘する。更に日本人改宗のためには、宣教師としての權威を維持することと、キリシタンに対する親密さ、愛情ある態度の実践が必要とされ、この両者をいかに調和させていくかが肝要である、と結論している¹¹。特にしかるべき權威を守るためには、「宣教師は日本式に行なうべき挨拶に精通することが必要である。尊敬するに値する人物を訪れたり、彼らに会いに来る客人を迎える時には、日本の気質(習慣)に従う

このできない人間、殊にポルトガル人を「一行に」加えたり同伴しないようにすべきである。何故なら、こうしたことはパードレの評判をひどく落とすからである(12)と指摘する。

当時来日した異国人の大多数はポルトガル人で、その社会的身分や地位は一般に低く商人と船乗りであり、日本人の彼らに対する評価は低かった。畿内の人々はシモキリノ(九州)に住む商人や農漁民を「山の人 *gente de montão*」、すなわち田舎者と蔑称しており(13)、彼らと接触していたポルトガル人も同じ輩と見ていたようである。南から来た野蛮人のポルトガル人が南蛮人と称されたのは、彼らが礼儀知らずの野蛮人であるというよりは、国家的驕りのような自尊心のために自国の生活様式に拘泥し固執して保守的であり、柔軟さを欠いて新しい情況に適応しようとしなかったことにも拠るのであろう。深い教養と知識を身につけていた宣教師たちも、日本人から見れば無教養で保守的なポルトガル人と同類に思われていたようであるから、彼らがいかに立派な教えを説き、ヨーロッパ世界の偉大さと繁栄について話したところで、直ちに信じてもらえる状況ではなかったのである。

カブララらポルトガル人宣教師の多くは日本の習俗への適応を頑なに拒んで日本語の習得に熱心ではなかった。日本の習俗、特に礼法に無知で、これを身につけることを拒み続けていた宣教師に対する日本人の対応はおのずから推察されるところである。ヴァリニャーノは『イエズス会士礼法指針』執筆後の一五八三年十月にインドのコチンで、『日本諸事摘要(14)』を著わし、『礼法指針』における論点を更に深めて展開している。

日本人には、私たちがすべてを混合して、まったく躰わがまがなされず礼儀を弁わがまえない人たちであると思われる。特にこの点には仏僧たちが心を砕いているために俗人ほどには多くの儀礼を守ることはしないが、彼らは自分たちの間で、また外部の者にも応対して彼ら独自の儀礼を有している。私たちがまたその儀礼を必ず遵守しなければならぬ。何故なら、そうしなければ日本人たちが侮辱されることになるからである。そして、彼らはパードレたちが弁解して、私たちが異なった習慣によって育てられて彼らの礼法を知らないことを彼らが配慮しなければならぬと言った時、彼らは度々私に答えた。この点について私たちが会員に同情を禁わがまじえないし、一、二年間

はそれを我慢するが、しかし「私たちが日本に住んでから」何年も経っているので、「もはや」我慢することができないことである。会員たちが日本の習慣と礼法に学ばないのは、あるいは学ぼうとしないのは、彼らにそれが相応しいと思われないからである。このことは彼ら（日本人）には恥辱であり道理に反することである。何故なら、彼らがその国（日本）にやって来て少数である以上は彼らは日本人に適応しなければならぬし、日本人は彼らに順応すべきではないし、またその礼法を棄てることができないし、あるいは彼らにそのための才覚と能力が欠けているためにそれを学ばないのである。そうであるならば、日本人にはそれほどの価値のない教えを受け入れたり、能力のない人物を師として仰ぐことは相応しいことではない、と言っている（二三章）¹⁹。

右は、日本人との交際には礼儀正しい態度を守ることがいかに重要であるかについて指摘したものであるが、この指摘は、ヨーロッパ宣教師の日本語及び日本の習俗に対する閉鎖的で不寛容な姿勢を看破したものと見て注目し値する。こうした宣教師がまず正さなければならぬとの懸念が、ヴァリニャーノに『礼法指針』を書かせることになったといえる。彼が偏頗で權威主義的な宣教師を決然と否定したのは、布教長カブラルに対するクリスタン領主たちの強い不満が潜在していることを察知したからであろう。領主たちが宣教師に冷淡な態度を取り続け、これが常態化していたことは、宣教師が日本人を積極的に理解しようとしてこなかったことの証左であり、こうした宣教師の在りように強い衝撃を受けたヴァリニャーノは、宣教師の意識改革の必要に迫られたといえるべきである。宣教師の言動が日本人に十分に理解されなかった理由は宣教師自身にあるとの認識に至ったヴァリニャーノの課題は、日本人クリスタンたちの宣教師に対する誤解をまず取り去ることであった。

それと同時に、キリスト教の教えの真実と、宣教師たちの言動が正しいことを実証してくれる者が必要であると次第に考えるようになっていたことも確かなことである。ヨーロッパ世界を見聞し実際に経験したことを率直に感動的に語って、教会と教皇に対する日本人の偏見と誤解を解きほぐしてくれる存在が強く求められたということであろう。こうしたことは、既に述べたように、『デ・サンデ天正遣欧使節記』において指摘されていることであり、フロイスも

また『遣欧使節行記』において言及して、「語り部」としての使節の役割の必要性を強調しているところである。ヴァリニャーノは、『イエズス会士礼法指針』執筆後、協議会を終えて長崎を立出する一五八二年二月までの四ヵ月間に、日本人をローマに同行したいとの思いを日増しに募らせていったように思われる。

天正遣欧使節が予定を過ぎてヨーロッパからゴアに戻ったのは、一五八七年五月二十九日である。彼らの帰還を鶴首して待っていたヴァリニャーノは、インド管区長としてゴア残留を余儀なくされたが、彼に対する感謝の演述が副使節原マルテイーニョによってなされた。ゴア到着から六日目のことである。彼は使節一行が見聞してきたことはパードレ方が話していたことに少しも違うところはなかったとラテン語で述べた。「聞いていたところよりも見たところははるかに大いなるもので」あり、「われわれの心を捉え、かつ衷心から心に満ちわたる満足を覚えたのは、我らの父のエケレンジア(教会)の壮大さ、神の恩寵、天使の熱誠の大きさに及ぶものはございませぬ。……耳から取り入れただけのものは、直接目をもって見たものに較べて心を動かすことの少ないのは自然の理である……」(「原マルチノの演述」[16](#))。

ヴァリニャーノの期待どおりにキリスト教精神に則って教育された少年たちが見たヨーロッパのカトリック世界は、彼らには一点の曇もない完璧な世界に映じたことであつたであろう。彼らが教皇グレゴリオ十三世に献上した「安土屏風図」はヴァリニャーノから託されたものであり、その献上の日は正式謁見から一〇日後の一五八五年四月三日である。教皇はこの贈物に大変満足の様子で、直ちに一行を「画廊と名づけられる一種の廊下」に案内した上に、その画廊に屏風図を陳列するよう命ぜられた¹⁷。

「安土屏風図」はヴァリニャーノが織田信長から贈られたものである。日本イエズス会準管区長ガスパール・コエリヨが一五八二年二月十五日付で作成した「一五八一年度日本年報」によると、この屏風 *Beaus* は信長が日本で最も著名な絵師に一年前に製作を命じたもので、新城と新都市安土が実際と少しも違うことなく邸宅や湖水その他すべてが描き込まれていた。信長は帰国するヴァリニャーノへの贈物として、彼がコレジオ(セミナーオ)を絵に描いて持ち帰

りたいとの希望があるのではと付度^{すんだ}して屏風図を贈った(18)。「安土屏風図」には三階建てのセミナリオが描かれていたのであろう。同年報が報じるところによると、この屏風はたいへんな評判になり内裏(正親町天皇)の叡覧^{えいけん}に与かり、天皇が所望されたとされる。また屏風図を見るために安土山、都、堺や豊後、その他ヴァリニャーノが通過する土地で多数の人々が参集し、公家衆の一人は西下する彼のため帰路にある各地の領主に書状を送って彼を紹介したとされる(19)。

ヴァリニャーノは、西下する道々、そして長崎に戻ったのちも、信長から贈られた屏風図に対する異常な評判を計りかねていたのかも知れない。このことは、宣教師が日本人から評価されていない実情を見、その打開策を考えていた最中でのことであり、信長の破格な厚意は彼に一縷の望みを与えるものであった。彼が屏風図が有効に活用される道を模索し始めたとしても不思議ではない。ローマ帰還の日が次第に近づく中で、彼は屏風図を教皇への手土産にしたいとの願望を抱くようになったのではなからうか。日本最高の絵師によって描かれた政治の中心地安土城とその城下町にそびえ立つ三階建のセミナリオの図絵は、日本の為政者による最高の贈物であり、イエズス会宣教師の日本における宣教活動の成功を端的に物語るものであった。

そして同時に、彼が日本人修道者養成のために設立した教育機関、特にセミナリオにおいて有能で将来性のある少年たちの姿とその成果を教皇とローマ教会に披露しうる絶好の機会ととらえたのであろう。三階建てのセミナリオが描かれた安土屏風図が教皇への最高の贈物になりうるのと彼の判断が、少年たちを語り部に仕立て派遣すべきか否かについて逡巡していた彼に最終的な決断をさせることになったとみることができる。

ヴァリニャーノが、使節派遣に対して最も期待したことの一つは、ローマ教皇とポルトガル国王の日本教会に対する深い愛情と配慮であった。それは端的には教皇や国王による物質的援助を獲得することであった。このことは協議会の「議題十三」によって示唆される。

もし教皇聖下と国王殿下がこの新しい日本の教会とキリスト教徒を擁するイエズス会を確保し維持することを希

望されるならば、これらの経費をまかなうのに充分で確実な定収入をイエズス会に支給することが必要である。との意見が開陳され、ヴァリニャーノもまた、

教皇聖下と国王殿下が実情を知れば、少なくとも教皇聖下は、特にごく僅かな額で救済できるのであるから、この新しい教会を本心から救済せざるをえないことを必ずや御理解下さる筈である(20)、

との希望を表明していることから確認されることである。この問題について、ヴァリニャーノは一五八三年四月七日にインドのコチンに到着したのちの十月二十八日付でローマの総会長クラウディオ・アクアヴィヴァに宛てた長文の書翰において随所で述べていることである。

第一のことは、然るべき援助が与えられないために大きな危険にさらされている日本の事情について、猥下に十分な報告をするためです。私には日本の性情や習慣が甚だ奇意で新奇なものと思われまますので、私が自ら行かなければ、ローマでは理解されませんし、望まれている援助は何もえられないということです。……私が望んでいた、そして私を「そちらに」行かせようとした第二のことは、極端な危機の中にある例の地方のコンパーニャ(イエズス会)全体とキリスト教界に手立てがないために、日本の「財政的」支持のため世俗的な援助を捜すためでした。すなわち、これは、私が日本を出発することになった主要にして唯一の理由でした。そして、この援助は潤沢な年金および甚だ優れた資金でなければなりませんので、日本では現金で保有されなければならぬことです。……第四のことは、彼らが大いに助けとなると納得し、またそれが確かなことと思われましたので、これらの日本人の子供たち Misio を連れて行くためです。そして、私が望んだすべてのことのために彼らを同行しました。特に、日本の世俗の援助のためでした。何故なら、公子たちは疑いもなくそれらを見ることに実に心を動かされていたからです(21)。

ヴァリニャーノが遣欧使節派遣を決断するに至った背景と目的について検討した結果として言えることは、日本におけるヨーロッパ人宣教師の活動が正当に評価されて宣教事業が進展をみるには、日本人の宣教師に対する信頼を確

固たるものにする必要があると、彼は日本に来て以来常に考え続けていたことである。そのため、日本人をローマに遣わしてカトリック世界の真相を見たままに伝えてくれる語り部が必要であるとの認識に至ったことである。そして一方で、世界の涯に生まれた新しいキリシタン教界の存在をローマ教皇とローマ教会のすべてに知らしめ、それが新生のイエズス会によってなされたことを使節派遣によって強く印象づけようとする意図があったことである。それは、異教世界に活動するイエズス会と日本キリシタン教界への財政援助を引き出す有力な手段となりうると判断されたためであった。

二 天正遣欧使節と大村氏

天正遣欧使節の派遣に関して、大村の領主純忠はこれにどのように関わったのであろうか。岡本良知の訳書『九州三侯遣欧使節行記』の書名から見ると、九州のキリシタン大名三名が主導的な役割を演じたような印象を受ける。しかし、フロイスの原著には「九州三侯」に相当するような言葉はない。既に前項において言及したように、遣欧使節の企ては、九州のキリシタン大名たちが中心になって計画したのではなく、巡察師ヴァリニャーノの発意によるものであった。キリシタン大名たちの意向はどのように報じられていたのであろうか。フロイスは「遣欧使節行記」第一章において次のように記載している。

彼（ヴァリニャーノ）はインドに戻り、そしてそこから（障害がなかったため）ローマに行くための準備ができていたので、豊後の王^{マサ} フランシスコと大村の領主^{Señor} ドン・バルトロメウ、および有馬国の領主ドン・プロタジオには、効果的な諸理由によって彼らの使節をローマに遣わし、併せてフェリペ国王陛下を訪れることはともかくも適切であると思われた。しかし、彼らの希望を實行することは先延ばししていた。彼らが突然この決断をしたのは、パードレ・ヴィジタドール（巡察師）がすでに今にも出発する時期になっていたので、乗船するため彼らに暇乞いに来た時であった。このようにして、「出発までの」時間が短かったため、重要な事柄のために必

要とされていた準備をする余裕がなかったことである²²。

三人のキリシタン大名がローマへの使節派遣を希望し、巡察師ヴァリニャーノが帰国挨拶に来た折に遣使を決断したというフロイスの記載は全面的に認めることはできないが、彼らが遣使を希望していたことは事実であったのであるか。

一五六三年にキリスト教に改宗した大村純忠はキリシタンとなって既に二〇年になり、ローマ教皇とローマ教会に對する畏敬と憧憬は誰よりも強かったと思われるが、非力な小大名として自領を維持することに明け暮れてローマへの使節派遣など考え及ばなかったであろう。一五七八年に受洗した大友宗麟は同年十月の日向遠征で島津氏に敗れて大きな痛手を負っていた。一五八〇年九月にヴァリニャーノが臼杵を訪れて十月四日にアシジの聖フランシスコの祝日に盛大なミサがオルガン演奏を伴って執行された。この時以降、宗麟のローマ教会への思いは高まったかも知れないが、大友氏には既に昔日の勢いも実力もなく、自らローマへの遣使を送るだけの余裕はなかった。一五八〇年にキリスト教に改宗したばかりの若い領主有馬鎮純はイエズス会とポルトガル人の援助を得て所領を龍造寺氏から守った状況にあり、遣使について考える立場にはなかった。

一五七八年に来日してすぐ大村に赴任して宣教に従事したアフォンソ・デ・ルセナ神父は一六一四年十一月にマカオに追放されたが、彼が同地で著わした「回想録」は、領主純忠の傍近くにいた者の記録として重要である。遣欧使節については次のように報じている。

東洋の巡察師アレックスサンドロ・ヴァリニャーノは初めて日本へ来た時に、日本人の高潔さや教養・高貴・礼節を教皇やキリスト教徒たる貴族に示すため、有能で理解力と素質のある日本人青年貴族をヨーロッパへ派遣しようと考えた。彼はその計画をドン・バルトロメオに相談し、この件に関する意見を求めた。パードレのこの申し出がドン・バルトロメオには天からの賜物のように思えた。それでその年ただちにそれを実行に移すように求め、日本のこの秀れた名譽ある仕事のために必要な援助をすべて提供することを申し出た。ヨーロッパへは四人の者

が行ったのであるが、パードレはその四人のうちの二人——それはドン・バルトロメオの家臣であり親戚である——のヨーロッパ行きを承諾するようにドン・バルトロメオに求める以外には何の援助も彼に求めなかった。殿はパードレがこの聡明で教養あり素質に恵まれた二人の少年に眼をとめたことを感謝した。それでパードレ・アレックスンドロは大村からはこの二人、すなわち原マルティーニョと中浦ジュリアンを派遣することに決めた。三人目は豊後王の家臣・親戚の男児・伊東マンシヨ、四人目は有馬の殿の従兄弟でドン・バルトロメオの甥に当たるミゲル千々石である(23)。

右のルセナの『回想録』によると、ヴァリニャーノは遣使計画についてまず大村純忠に相談してその意見を求め、賛意を得た上で彼の家臣の子弟二名の派遣について打診して了解を得た。ヴァリニャーノは純忠には家臣の子弟二名の派遣を要請する以外には、いかなる援助をも要請しなかった。彼がいつ純忠に遣使計画について話したのかは明らかでない。長崎における協議会が終わった一五八二年一月六日以降、彼の長崎出発の二月二十日までの期間に、彼は大村に赴いて純忠に遣使計画について話し、既に人選していた家臣の子弟二名の派遣と、彼の甥に当たる千々石ミゲルの正使としての派遣について了解を求めたのである。大友・有馬両氏に対して家格の劣る大村氏には、ヴァリニャーノは彼の家臣の子弟二名を大使二人の随行者すなわち副使として遣わすことについての了解をまず得たようである。甥の千々石ミゲルが有馬氏派遣の使者すなわち大使の一人として既にヴァリニャーノの構想にあり、純忠はこの件については伯父の立場であったためにヴァリニャーノの構想を受け入れざるをえなかったであろう。彼の甥であるということがせめても彼の面目を保たせたことになったようである。

純忠が使節に託した書状はローマ教皇を含む五人に宛てられ、その日付は一五八二年日本の第一の月二十七日、すなわち天正十二年一月二十七日であるが、陽暦では一五八二年三月一日となる。二月二十日の出発後に発給されたと考えられないから、従来考えられてきたように一五八二年一月二十七日付の書状ということになる。ヴァリニャーノは長崎出発の二〇ないし三〇日前に遣使派遣を決断したとするラモン神父に従えば、その決断は一月二十日以降に

編集上の都合により掲載できません

写真4-21 イエズ会総長宛大村純忠書状

(京大大学総合博物館所蔵、大村市教育委員会写真提供)

なされ、一月二十七日以前に大村を訪れて純忠に遣使計画について伝え、それを了承した純忠は一月二十七日付の書状五通を作成してヴァリニャーノの許に送ったようである。しかし、後述するように、純忠の書状と宗麟の書状の筆致は酷似しており、同一人によって書かれたとされる。

なお、ラモン神父がその作成を否定した大友宗麟の書状については、日本語原文はイエズス会総会長宛一通を除いて、ローマ教皇やフェリペ国王ら宛四通の日本語書翰は不明であるが、翻訳文は確認される²⁴。その作成日はいずれも一五八二年一月十一日である。

フロイスの「使節行記」には、「偉大なる国王フェリペへ呈す」との上書をもつポルトガル語訳文と、親王兼枢機卿ドン・エンリケ宛訳文が収載されている²⁵。幸田成友は『日欧通交史』において、スペイン王宛の分は実はポルトガル王宛であったものを、使節出発後ポルトガル王が死んでスペイン王が同国王を兼ねるようになったので流用した²⁶、とする。

ポルトガルでは若き国王セバステイアンが一五七八年夏にモロッコに遠征して戦死し、後継の親王兼枢機卿ドン・エンリケは一五八〇年一月三十一日に病死していた。スペイン国王フェリペ二世は一五八〇年十二月初めにリスボンに入城し、トマールに全国議会を召集してポルトガル王フェリペ一世として宣言した²⁷。スペイン・ポルトガル国王兼職の報せは、ヴァリニャーノのマカオ滞在中に同地にもたらされていた。したがって、大友宗麟の書状のフェリペ王宛の上書きはマカオで書き改められたようである。

松田毅一が指摘しているように²⁸、宗麟と純忠の書状が同一人によって書かれたことは、京都大学文学部所蔵の

純忠のイエズス会総会長宛書状²⁹と、幸田成友『日欧通交史』に挿入された宗麟のイエズス会総会長宛書状の写真³⁰を照合すると、歴然としている。宗麟と純忠の書状が同一人によって書かれたとすると、ヴァリニャーノは純忠からイエズス会が書状を作成することについて予め内諾を得ていたであろうか、純忠もまた書状を書くことはなかったのであろうか、推測の域を出ない。

純忠はポルトガルの親王兼枢機卿ドン・エンリケ宛に一五八二年一月二十七日付の書状を書いている。有馬鎮純のローマ教皇及びイエズス会総会長宛書状の日付は一五八二年一月十一日で、宗麟の書状作成日と同じである。鎮純のポルトガル国王宛は二月八日付である。彼の書状の作成日が一月十一日と二月八日の二回に分けられていることも異なことであり、二回に分けて書かれた意図は不明である。松田毅一が推察するように鎮純の一月十一日付の書状は、宗麟と純忠の書状を書いた同一人によって書かれたのかも知れない。鎮純の二月八日付のポルトガル国王宛の日本語書翰を確認することはできないが、マカオにおいてポルトガル国王の死とフェリペ国王の兼職を知ったにもかかわらず、宛名が改変されなかったのは、鎮純自身によって書かれた書状であったためかも知れない。ヴァリニャーノはまず純忠を訪れて遣使計画について話し、その後に有馬の日野江城に赴いてその計画を鎮純に伝えたように思われる。純忠のポルトガル国王宛書状の日付が一月二十七日、鎮純の書状の日付が二月八日であることから推察されることである。

遣使したキリシタン大名の三人について、ヴァリニャーノをはじめとしたイエズス会、そしてローマ教会は、彼ら三人の社会的立場・地位をいかに把握し理解していたのであろうか。

『デ・サンデ天正遣欧使節記』では、既に紹介したように、ヴァリニャーノは豊後と有馬の王³¹、大村の領主 Scambior として、大村純忠の社会的地位・身分を大友・有馬両氏の下に位置づけていたことが知られる。この認識は、イエズス会の歴史家バルトリによって受け継がれている。彼は一六二〇年代にローマの修練院において日本人司祭ミノエス・ミゲルと交流する機会を得ていた。バルトリは、使節派遣に当たり有馬のセミナリオに学ぶ少年六人が選ばれ、

彼らは各々三段階の階層に属する者であるとし、二人は純粹に王の血筋の者、二人は王と縁戚関係にある公子(領主 *Principi*) から生まれた者、そして二人は普通の貴族の階層の者であるとし、第一階層の者は大使、第二階層の者はその同行者 *Compani*、第三階層の者は小姓 *Page* であるとする。そして、豊後の王は第一階層の二人のうちの一人、すなわち日向の王の従兄弟修理亮の一子ドン・伊東マンシヨを遣わし、他の一人は有馬の王及び大村の領主 *Senhor* の血縁の者で、有馬の王の従弟、大村領主の身内の甥である千々石ミゲルである、とする。同行者二人は異なる縁戚の者で肥前国の城の男爵 *Baroni di castela* である(31)、という。身分階層の明確なヨーロッパ社会では、王と領主と貴族(騎士)との違いは厳然としており、かつて五カ国の守護であった屋形大友氏と、かつて肥前守護として屋形を称していた有馬氏に比べ、大村氏は一ランク下の領主として理解されていたことである。フロイスが「遣欧使節行記」で記すところも、「豊後の王フランシスコ *Rey Fr.co de Bungo*、大村の領主ドン・バルトロメウ *Senhor de Vomura*、及び有馬国の領主ドン・プロタジオ *Senhor de Estado de Arima*」(32)である。なお、大村の王 *Rey de Vomura* の名で書状が書かれているのはポルトガル国王宛の一通のみであり、教皇、イエズス会総会長及び親王兼枢機卿ドン・エンリケ宛の三通の署名は「大村のドン・バルトロメウ」である。

教皇庁ではどのように受けとめていたのであるうか。「フランシスクス・ムカンシウスの儀典日誌」は、一五八五年三月二十二日の条において、日本の使節の青年四名がローマに入ったこと、その使節がキリスト教徒の二人の王と一人の領主によって遣わされたことを記し、翌二十三日の条では「土曜日、早朝、日本の上記の王と大村領主の大使ドン・マンシウスとドン・ミカエル、並びにその随員ドン・マルティヌス……(33)」と報じて、大村氏を王として扱っていないことが分かる。

一五八六年に『日本遣欧使者記』を著わしたギイド・グワルチエリは、第二章において使節のローマ派遣の理由について述べるなかで、使節を派遣した人物について触れ、「最も大にして最も主要なのは豊後の王」、そしてもう一人は有馬の王であり、その父は肥前国の大半を領し、その権威は今も大きく諸侯(領主)の間に傑出している、と記す。

そして、「第三は大村の君で、ドン・バルトロメオ」となる。「この君に他の諸侯に先じて我等が御主の聖教を日本に入るの特権を与へたまうた(34)」と称揚している。「君」は領主と同義である。

三 使節の一行について

ヴァリニャーノが長崎を出発してマカオに向かった時、彼が引率した一行は、正使としての伊東祐益マンシヨと千々石純員ミゲル、副使としての原マルティーニヨと中浦ジュリアンの四人に加えて、彼らを補佐し世話するコンスタンティーン・ドウラードとアウグステインの二人である。バルトリは、前項で言及したように、彼ら六人が有馬のセミノリオに学び、各二人が三階層のそれぞれに属していたとするが、ドウラードとアウグステインがセミノリオの神学生であつたとの指摘は正しくない。

ヴァリニャーノはインドのコチン滞在中の一五八三年十月二十日に、ローマの総会長アクアヴィヴァからの書翰を受け取って、インド管区長としてゴアに留るようにとの命令に対して、いくつかの理由をあげて甚だ混乱した状況にあると述べ、その理由の一つとして日本の少年四人をキリシタン大名たちの名代として教皇の許に行くべく連れて来たことだと打ち明けているが、四人の少年たちのほかに、彼らの教師として日本人修道士 *Fernando* 一人と、イエズス会の神父一人が同行し、彼ら六人のほかに少年たち仕える同宿二人が行くこと、彼らは修道者 *Religiosos* となるために養成されている、と報じている(35)。ドウラードとアウグステインは一五八〇年に有馬に設けられた「下のセミノリオ」に神学生として学んだことはなく、既にカテキスタ(伝道士)ないし説教師として宣教師たちの下で活動していたようである。

四人の少年のうち、千々石ミゲルを除く三人は一五八〇年に有馬のセミノリオに入学した。同地のセミノリオが開設したのは同年の復活祭(四月三日)直後のことであり、原マルティーニヨと中浦ジュリアンの二人は開設と同時に神学生となったのであろう。伊東マンシヨは遅れて入学した。前項で言及したように、ヴァリニャーノが豊後を訪れ

た九ないし十月に彼は伊東マンシヨに会つて直ちに有馬に送つたか、あるいはその後少し経つてから送られたことはラモン神父が述べていることであり、十月中にセミノリオで学び始めたようである。

伊東マンシヨについて、フロイスは「遣欧使節行記」において、「王フランシスコは、日向の王の姉妹の子である彼の甥ドン・マンシヨを遣わすのが良いと思つた(36)」と記しているが、血縁関係のなかつた王フランシスコの交友宗麟がこの人選に与かることはなかつた。日向の王、すなわち大名の伊東義祐と宗麟の女との間には義益とその妹(町上)がおり、義益の息子祐勝ジェロニモは、「秀才の少年であつたので、彼はキリスト教的教育を受けるために(37)」安土山の「都のセミノリオ」に送られていたため、彼を呼び戻すだけの余裕がなく、代わりに有馬のセミノリオにいた従兄弟の祐益マンシヨが選ばれた。彼の父は伊東祐青である。準管区長コエリヨは、一五八二年二月十五日付、長崎発信の「一五八一年度日本年報」において、「他の一人は日向の王の息子で、豊後の王の甥のはずであつたが、「彼は」都からは「出発に」間に合うように来るべきでないために、彼の従兄弟で日向の老王の甥がその代わりに行く(38)。」と報じている。マンシヨは一五七〇年(元亀元)に日向国都於郡(つぐの)に生まれ、元服して修理亮祐益と称し、一五八〇年に弟と一緒に臼杵で洗礼を受けた。弟はジュスト(ユスト)の洗礼名をもち、一五八三年に有馬のセミノリオに学び、一五九一年にイエズス会に入会したが、一五九八年以降に退会した(39)。

正使の一人、千々石純員ミゲルは有馬の大名有馬鎮純の従兄弟であり、大村の領主大村純忠の甥に当たることは、フロイスの「遣欧使節行記」や、ローマ市から付与された「ローマ市民権証書写」(40)に見られるとおりである。彼は一五七〇年に有馬領千々石に生まれ、領主鎮純が受洗した一五八〇年に洗礼を受けた。父直員は有馬晴純(仙巖)の三男である。

正使の伊東マンシヨと千々石ミゲルに同行した原マルティニヨ(マルティン)と中浦ジュリアンについて、ヴァリニャーノは一五九八年に著わした「アポロヒア Apologia (論駁)」において、彼らを副使と称している(41)。彼が二人の副使について述べているところは以下のとおりである。

初めの二人はたいへん家柄の高い王の血筋であり、他の二人は彼らの同伴者で親戚のように彼らから遇されていることは十分に理解できる。……ドン・マルティンには大村の領主の兄弟と結婚している姉がおり、他の一人の兄弟は大村領内にある立派な城の一つの領主である。当城には多数の家臣と使用人(下僕)がおり、大村の領主の有力な縁戚である。

ドン・ジュリアンは、平戸と大村の国境にある城の領主であった武将の息子である。しかし、数年前に大村の領主ドン・バルトロメウと平戸の領主との間にあった戦いのためその城を失った。これらの武将たちの高潔さについては、前記書物の各所で語られている(42)。

原マルティニョは大村領波佐見に一五六八年(永禄十一)ないし一五六九年に生まれた。ヴァリニャーノの理解するところ、父は波佐見城主原中務であったようである。「ローマ市民会議決(議事録)」には、文言の一部が原と中浦が入れ替わっているが、「顕榮なるドン・マルチノ、肥前国ハサミの首長たる顕榮なるドン・中浦・ズイングロの子(43)」と記載される。「ドン・中浦・ズイングロ」の文言は、「ドン・ファラ・ナカズカラ *Farahi Naazurara*」となる。「ポロニャ元老院日記」一五八五年六月二十二日の条によると、「ドン・マルティン・原 *Ortiz*、ハザミの町に生まれた公子 *Signor principale*、ナカズカサの子 *Naazurasa*、一六歳(44)」である。

中浦ジュリアンは、一五六八年ないし一五六九年に(西海市)大村領中浦に生まれた(45)。前記「ローマ市民会議決」の記載の中で、「中浦・ズイングロ」と「ファラ・ナカズカラ」の文言を取り替えて正しい呼称とすると、「ドン・ジュリヤノ、肥前国ナウカリの首長たる顕榮なる中浦・ズイングロの子」となる。「ポロニャ元老院日記」では、「ドン・ジュリアン・中浦、中浦の公子、ジシククロ *Niguro* (甚九郎)・中浦の子、一八歳(46)」となる。ジュリアンの父とされる甚五郎(甚九郎)は、一五六九年(永禄十二)の宮(佐世保市長畑町)・葛(久津)峠の合戦で大村純忠を守るため殿を務め、伯父の小佐々弾正純俊と共に戦死した。小佐々弾正と甚五郎の墓碑は西海市大瀬戸町多以良の小佐々氏墓所にあり、また両人の塚が南風峠にある(47)。なお、中浦の領主は小佐々氏であり、多以良・松島・中浦の三家に分かれてのち、中

浦小佐々氏であることを表わすため地名「中浦」を用い、「中浦殿」と呼ぶようになった、という(48)。

四人の使節に同行したコンスタンティーン・ドゥラードは、一五六六年(永祿九)に諫早に生まれた。使節の四人よりも少し年長であり、長崎を出発した一五八二年二月には一六歳であった(49)。一五八〇年に有馬のセミナリオに入学したとされるが、前述したヴァリニャーノの書翰では、同宿とされ将来修道者になる者とみられていたから、カテキスタ(伝道士)としてパードレたちに仕えていたようである。彼は活字印刷機の日本導入に備えるためその技術を習得する目的をもって使節に同行した。

同宿の一人であるアウグステインについては、その詳細は不明である。生年と出身地についての情報はない。彼の役割は使節四人の身の回りの世話をするのであったように思われる。ドゥラードとアウグステインのほかに、名前の記されていない日本人の付人(従僕)がいたようである。

使節一行の教師として同行したイルマンのジョルジェ・デ・ロヨラは一五六〇年に諫早に生まれた。一五八〇年十二月にイエズス会への入会を許され、説教師として活動していた。一五八一年十二月には有馬のセミナリオにおいて神学生の世話に当たっていたようである。彼は既にラテン語を習得していた(50)。準管区長コエリヨが「一五八二年度日本年報」において彼について報じている。すなわち、

このセミナリオの成果は、すでに述べられていること他に、猊下に捧げられる初穂によって理解されるでしょう。と言うのは、巡察師が同行して行くイルマンの一人と四人の少年達が同セミナリオの成果であるからです。イルマンはここ(セミナリオ)にいた数カ月でたいへん結果を出したため、巡察師は彼をコンパーニャ(イエズス会)に迎えました。彼は一年の修練期間の後に、猊下やヨーロッパのパードレやイルマンたちに会いに行くという幸運を得ました(51)。

一五八〇年十二月に豊後の臼杵に開設された修練院に彼が学んだか否かは明確でない。一五八一年十二月二十日作成の名簿には、修練生一人が見られるが、彼の名はない。彼は有馬のセミナリオにおいて特別に修練者としての教



写真4-22 メスキータ神父肖像画
(長崎歴史文化博物館所蔵)

話せなかった。一五八三年作成の名簿にその名が見られるが、それ以降の消息は不明である⁵²⁾。

使節に同行したパードレのディオゴ・デ・メスキータは、ポルトガル国のポルト司教区メイアンフリオの出身で、一五七四年四月にイエズス会に入り、三年後の一五七七年に来日した。二四歳の時である。一五七九年十二月作成の名簿では、都のカーザ(修院)にいたことが確認され、日本語を十分に習得していたことが知られる。一五八一年十二月二十日作成の名簿によると、安土山の修院にいた。同地の修院建設は一五八〇年五月以降であったから、同年秋には三階建ての修院が完成し、その頃にメスキータはオルガンティノー神父らと一緒に安土山に移ったであろう。彼が日本の政治・文化の中心地である京都と安土山に二年間居住し、またセミナーオでの教育に関与していた経験と実績が上洛したヴァリニャーノによって評価され、使節の教師として抜擢されたのであろう。一五八二年二月に長崎を出発した時には既に司祭に叙階されていた。二九歳になっていた⁵³⁾。

四 ローレンスの旅路

巡察師ヴァリニャーノと遣欧使節の一行は、カピタン・モール(司令官)、イグナシオ・デ・リマの船で、一五八二

育を受けたのであろうか。こうした経歴ゆえに、少年四人のラテン語学習のために同行を命じられたのであろう。彼が選ばれたもう一つの理由は、ヴァリニャーノが述べているように、都出身のイルマンを豊後から呼び寄せる時間的余裕がなかったからである。都出身のイルマンとは、当時由布院のレジデンシアにいたマティアスとみられる。彼は一五五四年生まれで、一五七七年にイエズス会に入り、一五八二年には二八歳であった。説教師であったが、日本語以外の言葉については理解せず

年二月二十日(天正十年正月二十八日)に長崎港を出発し、三月九日にマカオに到着した。同地には前年七月二十四日にゴアから来たベドロ・ゴメス神父が日本のコレジオの院長として赴任するため日本に渡航するため待機していた。使節一行はマカオに約一〇ヵ月間逗留し、この間、ラテン語学習と日本文字の書き方、楽器の練習に努めた(54)。スペイン国王フェリペ二世がポルトガル国王に即位したとの報せがアロンソ・サンチェス神父によってマカオにもたらされたのは三月三十一日であり(55)、ヴァリニャーノはその対応に苦慮したであろうことが推測される。

使節一行は十二月三十一日にリマのジャンク船でマカオを出帆し、一五八三年一月二十七日にマラッカに到着したが、僚船のポルトガル船はシンガポール海峡で難破した。マラッカには八日間滞留し、二月四日にゴアに向けて出帆した。航海では風と暑熱と水不足のため病気になる者が多く、メスキータ神父は四日間も患い、伊東マンシヨもまた重病に陥るほどであった。船は航海士の過誤によりセイロン(スリランカ)島とペスカリア海岸の水道にあつて坐礁の恐れがあつたため、トリカンドゥリオに碇泊した。ヴァリニャーノと使節一行は上陸してマナパルに進み、同地で三月三十一日に復活祭を祝った(当年の復活祭は四月十日)。彼らは更に陸路キーロンの要塞に至り、同地から使船を得て一日がかりでコチンに達した(56)。バルトリによると、四月七日のことである(57)。病気のためマナパルに近い植民村ツチコリンに残留していたメスキータ神父と日本人同伴者らも回復後に遅れてコチンに着いた(58)。

コチン地方は冬季に入り、五月から九月までは港が砂のために閉ざされるため船の出入りはず、船は越冬を余儀なくされた(59)。このため、ヴァリニャーノらは約八ヵ月間コチンに滞在し、十月末にコチンを出帆した船でゴアに向かった。この間、四人の少年はラテン語学習に努め、楽器や歌唱の練習に励んだ(60)。

ヴァリニャーノが、ローマの総会長からの書翰を受け取ったのは、既述のように、十月二十日である。グワルチエリによると、コチンからゴアには二〇日後に着いた。彼のゴア帰着は十一月二十日頃であった。ゴアに留ったヴァリニャーノは、メスキータ神父を遣使使節の通訳兼世話役とし、他にヌーノ・ロドリゲス神父を全旅程の案内者とした。ロドリゲス神父は当時ゴアのサン・パウロ学院の院長であった(61)。ヴァリニャーノは総会長アクアヴィヴァに対す



図4-6 天正遣欧少年使節の概略行程

(大村市教育委員会提供)

る一五八三年十二月四日付の書翰において、ゴアで開かれた会議でヌーノ・ロドリゲス神父がローマへの東インド管区プロクラドル（代表）に選ばれ、彼と共に日本人少年四人が行くことを報じている⁶²。

使節一行がロドリゲス神父と一緒にゴアを出発したのは、一五八三年十二月二十日頃であった。コチンには翌一五八四年一月初旬に到着し、二月二十日にサンティアゴ号で同地を發ちポルトガルに向かった。コチンを出帆した船は三月九日に南緯八度線の赤道を通過したのち、サン・ロウレンソ島（マダガスカル島）を過ぎ、五月六日にアグーリヤス岬を望見して、同日に喜望峰を通過した。同二十七日にセント・ヘレナ島に到着して初めて上陸した。同島には一日間滞留した。リスボン郊外のカスカイスに着いたのは八月十日で、翌日リスボンに至って夕方に上陸し、イエズス会の所有するサン・ロケ教会の宿舎に入った。六ヵ月以上も続いた洋上生活では、使節の少年たちは大病を煩うこともなく、毎日ラテン語学習と日本語の読み書き、楽器を奏することを欠かさず、時には魚釣りに興じた⁶³。

リスボンに到着した使節一行は、八月十三日にテー



写真4-23 ベレムの塔
(大村市教育委員会提供)

節の少年四人と思われる絵が描かれている。

四人の使節はリスボン市内にあるイエズス会のコレジオ、サン・アンタンを見学し、更に聖ドミニコ会の修道院に神学者のパードレ・フライ・ルイス・デ・グラナダを表敬訪問した。使節は日本でイエズス会によって進められていた彼の著述の日本語訳文を持参していた⁶⁵。彼の著述数点が翻訳されて印刷され、キリシタン版と称されて今に伝えられている。その一つ、『ぎやどべかどる』は一五五六年にポルトガル語訳されたもの(一五七三年刊)からの邦訳である⁶⁶。

ゴア管区のプロクラドル(代表)、ヌーノ・ロドリゲス神父は使節に先立ってリスボンを発ちローマに向かった⁶⁷。ローマでの協議が急がれたためであった。使節一行がリスボンを出発したのは九月五日であり、八日にはエヴォラに到着し、同地に八日間滞在した⁶⁸。大司教ドン・テオトニオ・デ・ブラガンサから厚遇され、九月十四日の十字架称賛の祝日に招かれて大聖堂でのミサに出席した。教会の内陣を案内された際に、伊東マンシヨと千々石ミゲルが三段式のオルガンを弾き、大司教を驚嘆させた⁶⁹。翌十五日にはエヴォラを発つてヴィラ・ヴィソソーザに至り、ブラガンサ公を迎えられて十八日まで同地に留り、この日、ポルトガルの国境の町エルヴァスに達した。

ジョ河沿いにあったリベイラ宮に枢機卿アルベルトを表敬訪問した。アルベルトはオーストリアの枢機卿と称し、ポルトガル国王の代理を務めていた。その午後にはリスボン大司教セバステイアン・モライスを訪れた。リスボンには、『サンデ天正遣欧使節記』によると二五日間、フロイスによると二六日間、滞在した。この間、枢機卿の招きでリスボンから六レグア離れたシントラの宮殿に招かれた。その翌日にはペロンガ(ペニャロンガ)にあるサン・ジェロニモ会の修道院を訪れて一泊した⁶⁴。同修道院の廃墟跡地から発見されたタイルには、使



写真4-24 フェリペ2世肖像
(大村市立史料館所蔵)

ヘロニモ修道院において、六歳の王太子 *Prince Felipe* フェリペの宣誓式があり、この日のミサと、五時間にわたる宣誓式には使節四人も陪席した⁽²⁾。

原マルティニョの疱瘡はほぼ完治していたようである。同行していたメスキータ神父の一五八五年八月十日付の書翰によると、

すでにトレドで体調を崩していたドン・マルティノは熱で倒れた。重症で、四人の医者(その中の一人は国王付きの医者)が、マルティノを手厚く治療した。マルティノは体質的に丈夫だったので、四回瀉血^{しゅけ}された。下剤の処置も受けて、ついに、神のお助けにより二〇日間で治癒した⁽³⁾。

国王フェリペ二世との謁見は十一月十四日(水)に行われた。使節の四人は日本風に着飾って、「刀 *Cinagas*、脇差 *Vaguzaxis*、足袋 *tabas*、シキレ *Xiquires* (尻切) を身に着け、袴 *Calçados* をはいていた⁽³⁾。」

使節は午後三時に馬車二両に乗ってイエズス会のコレジオを出て王宮に着いた。国王との謁見は進み、正使の伊東マンシヨと千々石ミゲルが日本語で使節の使命について述べ、イルマン・ジオルジェがその書状を朗読した。大友宗

スペインに入ってバダホスを経て、聖母修道院のあるグアダルーベに巡礼のため立ち寄ってトレドに着いたのは九月二十九日であり、同地に二〇日間逗留した。トレド出発を前にして千々石ミゲルが熱病にかかり、十月二日には更に悪化したためであった。彼の病気は疱瘡 *oroforo* であった。十八日には原マルティニョが発病し、熱が下らない状態で十九日にトレドを発ち、翌二十日に一行はマドリードに入った。千々石ミゲルの疱瘡はマドリードに到着して回復した⁽⁴⁾。マドリードに着いて二一日目に当たる十一月十一日(日)、聖マルティニョの祝日に、近郊のサン・

麟のフェリペ国王宛ポルトガル語文の書状、有馬鎮純のポルトガル国王宛書状、大村純忠のポルトガル国王宛書状が捧呈され、謁見式は四五分間続いた⁷⁴。謁見式が終わって、彼らは国王に招かれてサント・エウヘニオ礼拝堂であった晩禱に出席したのち、宿舎のコレジオに戻った。

十六日(金)には、使節はエスコリアル宮に参観し、十九日にマドリードに戻ったが、同宮殿についての詳細な描写がコンスタンティーンによって残された。その手記には、イルマン・ジョルジェがロレンソ修道院長の求めに応じて、日本人公子たちがエスコリアル宮に来た時日、どこから何ゆえに来たかということ、鳥ノ子の和紙一枚に日本語で認めたことが記されている⁷⁵。

十一月二十三日、メスキータ神父は王宮に参上して国王に暇乞いをしたが、その際に金貨七〇〇クルザードを下賜された。ローマまでの路銀五〇〇クルザードと、コレジオ滞在中の費用としての二〇〇クルザードであった。また、自由通行のための旅券と、カタルヘナに碇泊する艦隊の代表と監察官宛書翰、ムルシア市長及びローマ駐在大使宛紹介状等が与えられた⁷⁶。使節一行は二十五日(日)にマドリードを発つ予定であったが、国王が突如使節に会うためコレジオに臨幸されたため、同日出発は翌日に延ばされた。マドリード滞在は三七日に及んだ⁷⁷。

十一月二十六日、使節一行は降雨のなかマドリードを発つて六レグア離れたアルカラに夕方に着した。同地に三日間滞留し、この間、宿泊したイエズス会のコレジオでは、神学の討論に出席し、またトレドの大司教フランシスコ・ヒメヌが設立した大学(『遣欧使節記』ではアカデミアと記す)を訪問した⁷⁸。十一月二十九日、アルカラを発つた使節一行はビリヤレホ、ベルモンテを経由して、十二月十日にムルシア市に至った。当地で降誕祭を迎え、またイタリヤへの便船についての情報を待つため、二三日間滞在した。ムルシアを出発したのは一五八五年一月三日であり、五日に港町アリカントに着いた⁷⁹。

アリカントには一カ月間滞在を余儀なくされた。東風の逆風のため、同港を出帆したのは二月七日で、三度目の出帆であった。しかし、逆風が吹き、船はマジョルカ島アルクジャの港に避難し、二月十九日に同港を出帆して、三月

一日にイタリアのリヴォルノに到着した⁸⁰。

翌二日、トスカーナ大公の要望によって、使節一行は大公差し回しの馬車でピサに向かい、午後に着いた。その夕方に、宮殿に大公を表敬訪問した。大公は使節が四旬節の始まる灰の水曜日（三月六日）まで同地に留まるよう要請した。使節は一日も早くローマに行くことを望んだが、大公の求めに応じた。翌日の夜には、王妃が宴に使節を招いて舞踊会を催した。伊東マンシヨは王妃と踊り、他の三人も貴婦人たちと踊った。灰の水曜日には、教皇で殉教者の聖ステファーンの名をもつ教会に招かれて、その儀式に参列した⁸¹。

三月七日にピサを発ってフィレンツェに赴きイエズス会のコレジオに着いたが、トスカーナ大公の希望により彼の宮殿に六日間逗留した。セネーリア広場にあるヴェッキオ宮殿である。同地逗留中に、ピッティ宮殿とその庭園を見学し、また十日には楽器のクラボを見に行った。フロイスはその著述において、クラボの音域の広いこと、クラボが様々の音を奏ることについて詳述している⁸²。

三月十三日、使節一行はフィレンツェからシエナに向けて発ったが、大公はローマ教会領まで多数の人々が、徒歩、騎馬、馬車で随行するよう命じた。シエナには翌日到着し、同地に三日間逗留した⁸³。十七日にシエナを発ってサント・タイリコの町に着くと、教皇の使者が遣わされて来ており、使節が早くローマに赴くようにとの伝言を伝えた⁸⁴。使節一行は十八日にヴィテルボに着き、二十日に枢機卿ガンバラの招きでバニヤアに赴いて狩りを楽しんだが、この頃から中浦ジュリアンが熱病にかかった。

翌二十一日にはカブラローラの枢機卿ファルネゼの館に一泊し、翌日、ローマに向かった。これを知って教皇庁からは出迎えのため枢機卿ジャコモ・ボンコンパニが軽騎兵一隊を引率した。イエズス会からもヌーノ・ロドリゲス神父らが一マイルの所まで出迎えた。ローマに入ったのは夜になってからで、イエズス会のジェズ教会に着いて、総会長アクアヴィヴァの出迎えを受けた。中浦ジュリアンの病状はかなり進行していた⁸⁵。

◆ 五 ローマにおける動靜

■ 一・ 教皇謁見

教皇庁においては、使節一行がローマに近づいているとの報せを得て、これを迎える準備が進められた。使節にかなる資格と地位を与えるべきかを確定するために、使節が持参した書翰などの写しを予め入手し、その処遇について、教皇は数名の枢機卿から意見を聴取した⁸⁶。テオドジオ・パニツァが枢機卿デステに三月二十二日に書き送った書翰によると、

日本人たちが夕方前、二四時に到着した。……教皇は今日ヴェネツィアの大使閣下にたいへん喜んで、これらの日本人は三人で、服従を表わすために三人の王に代わって来た者たちであり、彼らのうち二人は王の孫で、第三の王のために来た者は貴族であり、彼ら全員は権勢があるとの由であると語った。そして明日、彼らに公式の謁見 *il Consistorio Publico* を与え、すでにサラ・レジア *sala regia* (王の間) が準備されている、と語った⁸⁷。

教皇は既に二十一日に式部官を通じて、枢機卿に対し二十三日に日本人に公式謁見を許すこと、そのために枢機卿会議の法律顧問 *Anacati Consistoriali* を召集することを命じ、教皇に対する服従(帰服)の儀式 *atto dell'obediensa* を行うに際し、

日本人を大使として迎える旨を伝えた⁸⁸。

使節一行がローマに到着した翌三月二十三日(土)の朝、エスパリーニャ大使は豪華な馬車を使節が宿泊したイエズス会の修院に遣わした。これには馬丁六ないし八人が付いていた。使節一行は、この馬車でポポロ広場のサンタ・マリア(聖母)教会に行き、ポポロ門外にある教皇ジュリオ三世の園 *giardino* に赴いて入市式の準備を整えた。そこには既にローマの名士や、司教・高位聖職者・枢機卿の家人と多数の市民が集まっていた⁸⁹。千々石ミゲルが『遣



写真4-25 グレゴリウス13世肖像
(大村市立史料館所蔵)

『欧使節記』の中で語るところでは、イエズス会は使節のローマ訪問は身内のこととして取り扱い、できうる限り慎ましく教皇からは私的に迎えられることを望んでいたが、教皇は使節のローマ訪問を全キリスト教界に関わる共通の公的事件として考えて、使節に名誉を与えて盛大に処遇しようとしたと判断された、という(90)。

ローマに着いても熱が引かなかった中浦ジュリアンは、医師から外出を止められていたが、これを拒んで他の三人と一緒にポホロ門近くの聖母教会に行った。エルコレ・エステンセ・タツソニは枢機卿デステに送った、謁見当日の書翰において、中浦ジュリアンは謁見式に堪えることができなと思われたため、謁見前にサン・シスト枢機卿に導かれて密かに教皇の許に行きその御足に接吻した、と伝える(91)。フロイスによると、モンシオール・ピンチが中浦ジュリアンを教皇の部屋に連れて行った。彼は教皇から帰館して休養するように諭されて馬車で修院に戻った(92)。

使節一行の入市に当たって、教皇から遣わされたイモラの司教アレサンドロ・ムソッチが、教皇の名代として、教皇聖下と教皇聖座に帰服を表するためローマに来た使節に対して教皇が甚だ満足している旨を述べた。使節に随行していたメスキータ神父がそれを日本語に訳して彼らに伝えた(93)。

その後まもなく、使節一行はサン・ピエトロ寺院に向かって出発した。その行進は、「フランシスクス・ムカンシウスの儀典日記」によると、すべて王侯使節の入市式の例にのっとって行われた(94)。行進と行列は、前記「儀典日記」とフロイスの『遣欧使節記』によると、次のようなものであった。

先頭に二列二隊の軽騎兵が進み、これにスイス衛兵が付き添った。次いで枢機卿方のラバが続き、それぞれのラバに枢機卿の使臣 *chanciers* が乗り、その後に枢機卿方の家人 *gentilshommes* が三列三隊(あるいは四列四隊)が騎乗して随った。これに続いてローマに駐在する各国大使たちの家人が進み、更に教皇の侍従たち *camareros* と衛士たち *escuderos* と教皇庁の職員全員 *officers* が続いた。次いで教皇の部屋付きの聖職者たち *clerics* が進み、ローマの騎士団 *carabinieri* 全員が従った。この後数手 *tambours* 一三人が続き、そのほかにラッパ手や吹奏者が加わっていた。ソリア公ジャコモが遣わした三頭の馬に乗った伊東マンシヨが両側に二人の大司教の付き添いを得て、次いで千々石ミゲルが二人の大司教に、

更に原マルティーニョが大司教と司教に付き添われて進んだ。彼らの周りには教皇の衛兵がいた。三人の使節は刀と短剣を腰に付け、日本風の装いであり、ローマ市民には驚異の目で受けとめられた。彼らの後に騎乗した多数の貴頭Principesの士が続き、その後から通訳を務めるメスキータ神父が行った。その行列は半レグアであった。市内に入った行列は聖ヒエロニムス教会と聖ロッキ教会の前を一直線に進んでテベル川の左岸に至り、聖アウグスティノ教会前を通過してバンキ通りに至った。多くの男女が窓から行進を見物した。サンタンジェロ(天使)城手前の橋に差しかけると、大砲三〇〇発が発射され、これが止むと城の上から音楽が聞えた。新ブルゴ通りを通過してサン・ピエトロ広場に入ると、教皇の銃隊が射撃し、使節が広場の中程に達すると一行を歓迎して一二発の祝砲が発射された⁹⁵。

時を同じくして、教皇グレゴリオ一三世は枢機卿たちと共にサラ・レジアに入って着座された。使節一行は馬車を下りて司教たちに導かれて教皇庁に進み、枢機卿会の中に案内された。教皇と一緒に枢機卿二四、五人が臨席し、他に多数の司教と大司教、高位聖職者が出席していた⁹⁶。

教皇は使節がその前に歩みよると、涙を抑えられない様子で、眼には涙が溢れていたとされる。あるいは感激のあまり涙を流されて心中の感動を隠しきれぬ有様であったとも言われる⁹⁷。教皇は使節に慣例の祝福を与えただけでなく、注目すべきことに彼らに向かって低頭された。使節の三人が教皇の御足に口づけすると、教皇は各人に手を与えて、これに接吻するのを許し、一人ひとりを抱擁した。この後、彼らは枢機卿たちの席のその末席に退いて起立した。次いで使節が日本からもたらした大友・有馬両王と領主大村氏の書翰が捧呈され、予め日本語文からイタリア語に翻訳されていた書翰が読み上げられた⁹⁸。大村純忠のグレゴリオ教皇宛書翰は次のようなものである。

教皇に対するドン・バルトロメウの書翰の写し。

無礼を顧みず、主の恩寵をもって恭しくこの愚かな書を教皇聖下に奉る。

聖下はこの世におけるデウス(神)の代理者にして、キリスト教界全体の聖なる師匠にして博士である故に、余は自ら海を渡って貴地に赴いて聖下の御足に口づけし、その下に頭を垂れるべきであるが、多くの用務が妨げと

なつて、余はこれを果せない。従つて、今この時に当たつて、イエズス会の巡察師がこの遠方の地を訪問のため当地に來た。その來着によつて大いに感謝に値する事を数多く調整したのちに、彼は貴地に戻られることになり、この好機会を得て千々石の領主である、余の甥ドン・ミゲルが同行する。彼も余も、この旅を実行し、敢えて聖下の御足に達するべき功德を有していないが、そのことは、余には大いに感謝し義務とすべきことである。余が聖下に対して恭しく懇願するのは、今後も引き続きこの国と新しいキリスト教界、並びに余について想起していただきたいことであり、これ以外のことは他に何も望まない。巡察師とドン・ミゲルが他のことは詳細に申し上げる。敬意を表して羞恥と理性と恐懼をもつてこのことを言上する。

主の托身の一五八二年、日本の第一月二七日。

デウスの代理者である教皇聖下の御足に伏して挙手して捧呈する。

ドン・バルトロメウ 99

三書翰の朗読後に、イエズス会のカスバル・ゴンサルヴェス神父がラテン語で演説し、使節を派遣した大友・有馬・大村三大名の名において教皇に対する帰服と感謝の言葉を述べた。彼はその演説の中で、特に大村純忠が諸領主の中で最初にキリスト教の信仰を受け入れて受洗し、そのために幾多もの危険を招き領内から追放されながらも棄教せず信仰を堅守したについて語つて、純忠に讃辞を呈した¹⁰⁰。ゴンサルヴェス神父の演説が終わると、これに対する答辭が教皇に代わつてアントニウス・ブッカパドリウスによつてなされた。彼はおよそ一五分にわたつて、大友・有馬・大村の三人が近親の諸子をローマに遣わしたことを評価し、カトリック教会に対する彼らの帰服を受納する旨の演説を行った¹⁰¹。

これをもつて謁見式は終わった。フロイスによると、椅子を立つた教皇は使節一行を随従させて、そのマントの裾を捧持させる榮譽を与えた。この後、彼らは教皇の縁戚に当たるサン・シストとディオゴ(ジャコモ)・バンコンパーニら枢機卿三人が出席した祝宴に招かれて接待を受けた。祝宴後に、教皇は再び使節を招いて旅行及び日本の諸事情

について聴聞した。使節は教皇の勧めに従ってサン・ピエトロ寺院のサン・グレゴリオ礼拝堂に参詣したのち、サン・シスト枢機卿とエスパーニャ大使の馬車で宿舎の修院に帰り、長い一日を終えた¹⁰²。

■二、教皇の使節に対する配慮

グレゴリオ教皇の少年使節に対する慈しみと心遣いは正に父の如きものであった。少しでも一緒の時間を持ちたいとの思いがあったのである。教皇は謁見の翌日に教皇の礼拝堂に来るよう下命したが、イエズス会総会長アクアヴィヴァが使節には休養が必要であるとの申し出により、翌日の外出はなかった。しかし、翌々日の二十五日(月)には、使節一行は日本風の衣服を着て騎乗し、教皇に従ってドミニコ会修道院のサンタ・マリア・デラ・ミネルヴァ礼拝堂に行き、孤児の乙女たちの結婚式に陪席した¹⁰³。

教皇は使節のローマ滞在費として一〇〇〇クルザードを支給してイエズス会総長に託し、また使節四人のためにイタリア風の衣服を作らせるために、二十四日に一万二〇〇〇クルザード相当の綿布入りの箱を携えた裁縫師を一行の許に遣わした。衣服は各人三着で、一着は短衣、二着は長衣であった。そのほかにも室内服も作らせた。四人の使節に対してだけでなく、彼ら一行に随行して来た者たちの衣服もその費用から出費された。使節のために作られた衣記について記した文書がイタリア・ミラノのブレラ図書館にある。それによると、第一の衣服は黒ビロードの外装、四着、金ボタン付き。黒ビロードの長着(長衣)、四着、金の組みひもの飾りと金ボタン付き。黒ビロードのベレー帽、四つ、ダイヤカットの金糸飾り付きで毛皮製。ヴェネツィア深紅のラシャのズボン、四着、金ボタン付き。上質のラシャのシャツ、四枚。靴下、一二足、バラ色の絹製四足、ナポリの深紅の絹製四足、黒色の絹製四足。ナポリの二重ネットの絹製の帯、黒四本、さめたバラ色、四本。ポローニャの絹製のさめたバラ色の幅広リボン、八組。他の絹製リボン、八組。ローマ風の靴八足、紐は絹製。黒ビロードのスリッパ、八足。

第二の衣服。ダマスコ織りの外套、四着。金糸の組みひもの飾り付き。さめたバラ色のラシャの長着(長衣)、四着。金ボタン付き。なつめ色のダマスコ織りの部屋着、四着。紫色のビロードのスペイン風チョッキ、四着。紫色のラシャ

のズボン四着。金のボタン飾り付き。紫色のラシヤのチョッキ、四着。黒ビロードのベレー、四つ。フィレンツェのラシヤのカップ。襟首のシヤツ。ハンカチ。布製の靴下。

四人の随行員の服装。

黒布の正服。

薄バラ色のズボン、四着。ボタン付き。

ライオン色のサージ入り絹製のズボン、四着。ボタン付き。

ラシヤのズボンに似たチョッキ、四着。

サージ混じりの絹製のチョッキ、四着。

黒ビロードのベレー、四つ。

フェルトの帽子、四つ。裏地には黒いラシヤで黒真珠風のリボン。

フランダースのさめたバラ色の毛織物の靴下、四足。

ライオン色のラシヤの靴下、四足。

ビロードの帯。組みひもの飾りに鉄製のバックル。フィレンツェのラシヤのカップ、四着。これ以外に、靴下、シヤツ、ハンカチが十分に準備された¹⁰⁴。

四人の随行員の二人は、コンスタンティノ・ドゥラードとアウグスティンである。彼らのほかに、二人の日本人が随行していたことが知られる。

使節は三月二十九日（金）に、サン・ピエトロ寺院で行われた贖罪の儀式に教皇から招かれた。この日、まだ病氣から回復していなかった中浦ジュリアンを除いた三人は、ローマ風の新しい衣服を初めて着て出席した。その装いは、金の飾りが付いた黒ビロードの長衣 *longuea* と袖なしの短白衣 *coat* であった¹⁰⁵。三月三十一日のバラの日曜日には、教皇の伴をしてサン・ピエトロ寺院の礼拝堂に赴いた。

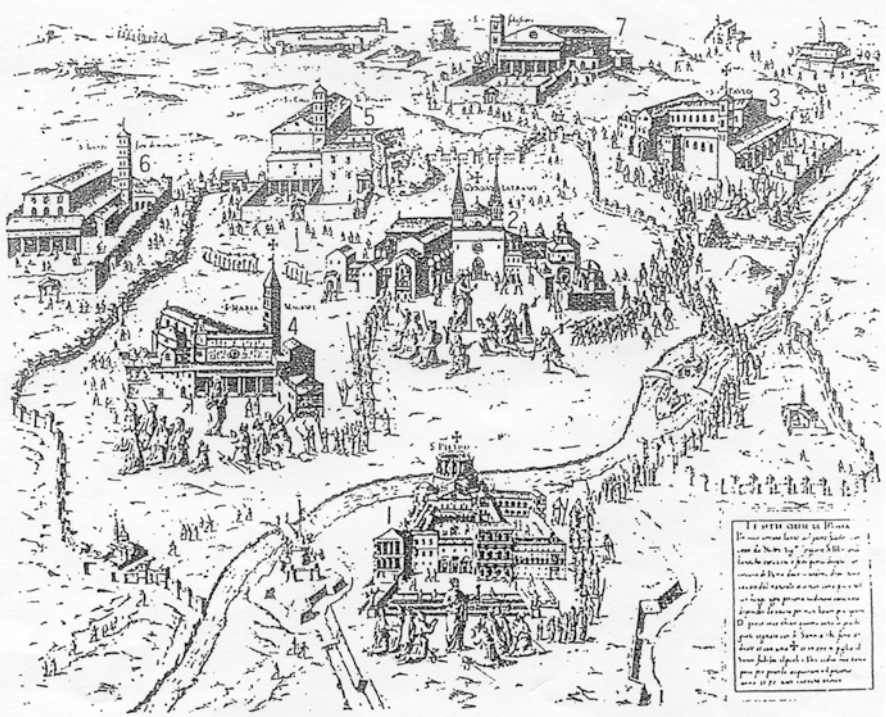
四月三日には、教皇は再び使節を内謁した。特別の親愛の情をもって使節をもてなし、伊東マンシヨと千々石ミゲルを着座させて、日本の諸事情やキリスト教界、また何を学んだかと尋ねられた。会見後、教皇は使節を世界の諸都市図が飾られているガレリア（画廊）と称されていた回廊に導いた。教皇はその日贈呈されたばかりの「安土山の城壁 muralas de Anzuchama」の絵（安土屏風）をそこに飾らせた¹⁰⁶。「ローマ通信」一五八五年三月三十日には、「安土屏風」について「多くの豪華な建物で飾られた主要な都市の絵図」と報じられている¹⁰⁷。

中浦ジュリアンは、病気から回復せず、ローマ到着の翌日に教皇に非公式の謁見を許されてのち、いずれの儀式にも参加することができなかった。教皇は毎日代理の者を遣わして見舞わせ、絶えず医師四人を派遣して医師が調剤した薬を刻限どおりに服用するよう伝言を送った¹⁰⁸。四月七日（日）の受難の主日には、教皇自身がミサを挙げられ、伊東マンシヨと千々石ミゲルは教皇の側に侍立したが、中浦ジュリアンは欠席した、とミゲルは述べている¹⁰⁹。

■三、グレゴリオ教皇の薨去と新教皇の選任・即位

使節一行がローマにある七大寺（バジリカ）の巡礼を始めたのは四月九日（火）であった。中浦ジュリアンも参加した。七大寺は、四つの大バジリカ（大聖堂）と三つの小バジリカ（小聖堂）からなる。大バジリカの第一がローマの司教座でもあるサン・ジョヴァンニ・イン・ラテラノ教会、第二がサン・ピエトロ・イン・ヴァティカーノの聖堂、第三がサン・パオロ・フオーリ・レ・ムーラ教会、第四がサンタ・マリア・マジョーレ教会である。小バジリカは、サン・ロレンツォ・フオーリ・レ・ムーラ教会、サンタ・クローチエ・イン・ジェルサレメ（エルサレム）教会、そしてサン・セバステイアーノ教会である。

翌十日（水）、使節が馬車でローマの教会を巡っている途中に、枢機卿サン・シストの使者によって教皇グレゴリオ一三世の訃報が伝えられた。教皇は、前日使節一行が七大寺を巡歴するに当たり、彼らを厚遇するよう諸教会に指図を出していた。この日、教皇は前夜からの発熱とカタルのために特赦の署名事務を執行できず、部屋から出ることはなかった。十日には甥の枢機卿サン・シストから終油の秘跡を授かり、午後三時に薨去した¹¹⁰。八四歳の高齢で、教



- 1 サン・ピエトロ大聖堂 2 サン・ジョヴァンニ・イン・ラテラーノ聖堂
 3 サン・パオロ・フオーリ・レ・ムーラ聖堂 4 サンタ・マリア・マッジョーレ聖堂
 5 サンタ・クローチェ・イン・ジェルサレム聖堂 6 サン・ロレンツォ・フオーリ・レ・ムーラ聖堂
 7 サン・セバスティアーノ聖堂

写真4-26 七대바지리카 (라플레리의版画, 1575年)

(石鍋貞澄「サン・ピエトロが立つかぎり」私のローマ案内(吉川弘文館 1991年)所載)

皇在位は一二年一カ月あまりであった。フロイスによると、教皇は最後の日の朝には、日本から来た少年使節がどのようなか気遣っていた、とされる¹⁰⁾。

教皇の遺骸はサン・シスト、すなわちシステイーナ礼拝堂に移された。翌十一日にはサン・ピエトロのサン・グレゴリオ礼拝堂に安置され、十二日(金)にシステイーナ礼拝堂において葬儀が始まり九日間続いた。ミゲルの語るところによると、葬儀の第一日には、一高位聖職者が逝去された教皇聖下の生涯とその功績について追悼の辞を述べ、最後の日には亡き教皇のための慣例のミサが立てられたのち、特に聖霊の加護を求めるための別のミサが行われ、更に新しい教皇を選ぶための説教をもって終わるものであった。すなわち、四月十三日(土)に枢機卿による定例の会議があり、前教皇についての追悼演説と新教皇選出についての演説があった¹¹⁾。

教皇選挙枢機会 *Conclave* は、四月二十一日、復活祭の日曜日にシステイーナ礼拝堂において五〇人¹²⁾ 近くの枢機卿が参加して始まった。二十四日(水)に新教皇が選ばれた。イタリアのアンコーナ出身で、フランシスコ会に属していたモンタルト枢機卿はグレゴリオ教皇によって司教及び枢機卿に拔擢された人物であって、新教皇にシスト五世の名を選ばれた。



写真4-27 シスト5世肖像
(大村市立史料館所蔵)

新教皇のシスト五世は、選出後の四月二十六日(金)¹³⁾に使節一行を引見し、その近況について尋ねられた。伊東マシヨが一行を代表して教皇即位について祝辞を述べ、日本の新しいキリスト教界の保護を懇請した。教皇はこれに親しく答えて、そのようにするであろうし、彼ら使節一行にも特別に配慮するであろうと述べた。五月一日(水)に挙行された戴冠式¹⁴⁾ *Coronatio* (即位式)には、病气から本復していなかった中浦ジュリアンを除く三人が招かれた。彼らはフランス及びヴェネツィアの大使や教皇が武官長に任命したジャコモ・ボンコンパニ閣下と一

緒にパリオパロ (捧げ天蓋) の支柱 *palis* を捧持して歩き、伊東マンシヨは莊嚴なミサの際に教皇の手に一度水を注ぐ榮譽を賜った¹¹⁴。

慣例として行われる新教皇のサン・ジョヴァンニ・イン・ラテラノ教会への行幸は、五月十五日に行われた。これには中浦ジュリアンも騎乗して一行に加わった。『ムカンシウスの儀典日誌』によると、「フランスの大使、ヴェネツィアの大使、日本の王たちの使節が二人の貴族を伴った¹¹⁵。」アラ・チェリ教会を出発した行列については、『遣欧使節記』の「対話二六」において詳述される¹¹⁶。

■四. ローマ市民権証の授与

ローマ市は、五月二十九日(水)の朝、使節一行を招いて宴を設け、終了後にローマ市民権を彼らに授与した¹¹⁷。ローマ市が市の顧問官、市政官、市民による秘密会議において使節に市民権を贈ることを決めたのは、五月十日である¹¹⁸。使節四人がローマ市民として貴族に列せられ、各人に証書が渡された。それは、羊皮紙に書かれ、その周りがローマの象徴と紋章とが彩色配合されていた。この市民証書四通の値いは黄金で八〇〇クルザードと見積られた¹¹⁹。『大日本史料』には、フィレンツェ文書館所蔵の写二通、中浦ジュリアンと千々石ミゲル宛の証書の訳文が収載される¹²⁰。また、結城了悟はローマ・イエズス会文書館にある、中浦ジュリアン宛証書写を記載している¹²¹。

証書の内容は、その前書の文脈は支倉常長が一六一五年十一月二十日に受領した証書の文面に酷似している¹²²。中浦ジュリアンと千々石ミゲル宛の証書の後半の記事内容は若干異なり、中浦ジュリアンの証書には、「司祭職を志望し」の言葉が見られる。

■五. 教皇シスト五世の返書

ローマ市から市民権証を授与される前の五月二十七日(月)、使節一行は教皇に招かれてサンタ・マリア・マジョーレ教会に至る公式の行列に参加した。フランシスコ会のアラ・チェリ教会を出発し、教皇自身もこの行列に加わった。教皇はまた使節に騎士 *cavaleros* の称号を与えることを発意し、その授与式は二十九日の午後に行われた。彼らは

教皇の命によって黄金作りの剣を身につけて甚だ優雅な短い服を着て教皇の礼拝堂に赴いた。それは、教皇が自らの手で彼らをサン・ピエトロ（ペドロ）の騎士に叙することになっていたからである。昇天の晩禱ばんとうののち、教皇は全枢機卿と司教が参列するなか、祝別された剣と黄金を張った蹄鉄を四人それぞれの手に渡して、「父と子と聖霊の名においてこの剣を受けよ。それは汝自身とデウス（神）の聖なる教会を守るため、またキリストとキリスト教の敵たちを混乱させるために用いるためである。……¹²³」と述べた。

ローマ出発が近づいていた使節のため、教皇は前教皇グレゴリオ一三世が日本のセミナリオのための年金四〇〇〇クルザードを既に下賜していたことに加えて、二〇〇〇クルザードの増額を決定した。教皇は、使節を派遣した王である大友・有馬の両氏には、鉄製の細身の剣 *glouge* と豊かな飾りの付いた金銀の鐔 *carriete*、そして教皇がヨーロッパの王侯たち *Reys e Princes* に授ける真珠をちりばめたピロードの帽子を贈った。ルイス・デ・グスマンによると、帽子は青の代わりであった¹²⁴。フロイスによると、有馬氏には黄金のバラが贈られた¹²⁵。王の処遇を受けなかった大村氏には、王侯に贈られる剣も鐔も帽子も授与されず、黄金のクルス（十字架）に嵌めこんだ十字架の木片 *l'cruce de Cruz* を贈った。グスマンは、それは大友・有馬両氏に贈られた十字架の木片よりも大きいものであった¹²⁶、という。教皇はまた、帰国する使節のために旅費三〇〇〇クルザードを下賜し、通過する教皇領に宛て使節一行を厚遇するよう指図を与えた¹²⁷。

教皇シスト五世が大友、有馬、大村の三氏に遣わした返書は五月二十六日付をもって作成された。その返書の内容は、基本的には同内容のものであるが、大友宛の書翰は最も長文で礼を尽くしたものである。大村氏宛の書翰は有馬氏宛のものよりも短く、大友宛書翰の半分にすぎない¹²⁸。フロイスによると、教皇は大村氏に対して特に小勅書 *Breve* を遣わした。

彼（教皇）は前記ドン・バルトロメウに対して一通の小勅書 *Breve Apostolico* を遣わした。その中で、彼を他のキリスト教徒の王たちに加え、枢機卿会において諸王の間に「彼の」代表が受け入れられることが出来るようにした

教皇シストが小勅書を発したのは、領主を称する大村純忠に対して、王の名をもつ大友・有馬両氏と同等の待遇を与えることができなかつたことへの氣遣いがあつたためであろう。日本における最初のキリシタン領主としての榮譽を顕彰しようとしたように思われる。それは恐らく教皇グレゴリオ一三世の意志でもあつたのであろう。

なお、ローマに滞在した使節四人についての覚書が、ローマのイエズス会文書館に残されている。それによると、

ドン・マンシヨ(年齢一七歳)、日向の王「大名」の孫、父は修理亮と呼ばれ、同じ日向国の身分の高い人 *Senhor grande* (有力な領主―筆者註)であつた。その日向国の都於郡の出身である。ドン・マンシヨの豊後のフランシスコ王との親戚関係は、ただ、フランシスコ王の妹がドン・マンシヨの叔父、すなわち、ドン・マンシヨの母の兄弟と結婚しているだけである。

ドン・ミゲル(年齢一七歳)、現在(有馬)を支配しているドン・プロタジオの父、有馬の王ドン・アンドレの甥である。ドン・ミゲルはこのドン・プロタジオのいとこである。ドン・ミゲルの父はドン・プロタジオの父の弟であつた。……ドン・ミゲルは肥前国の千々石の出身で、同時にドン・プロタジオとドン・ミゲルの父の兄弟である大村の領主ドン・バルトロメウの甥である。

ドン・ジュリアン(年齢一八歳)、中浦出身で肥前国の身分の高い人 *Senhor principal* (主要な領主―筆者註)の息子である。

ドン・マルティノ(年齢一六歳)、波佐見出身で肥前国のもう一人の身分の高い人(主要な領主―筆者註)の息子である(13)。

六 使節の帰国

■一・ローマからリスボン出発まで

使節はローマ出発の前日、六月二日(日)、教皇庁に教皇シスト五世を訪ねて暇乞いした¹³¹。翌三日の早朝、使節一行はイエズス会の修院を発った。アシジ、ペルージャを経由してロレートの聖母教会に巡礼する予定であった。メスキータ神父や、ゴア管区代表のヌーノ・ロドリゲス神父が一緒であった。イエズス会の総会長アクアヴィヴァは使節の世話に当たらせるため、またローマとの連絡のためイッポリト・ヴォリア神父と、イルマンのアレッササンドロ・レニ及びラザロ・カタノの三人を同行させた¹³²。ローマからは教皇が遣わした軽騎兵と多数の頭官がチリタ・カスターナまで付き添った。ナルニ、スポレトを経由して六月七日にアシジに至り、聖フランシスコの聖遺物を見てのち、ペルージャには夕方のお告げの祈りの時に着き、イエズス会のコレジオに泊った。同地には三日間滞在し、十二日にレカナートを出発して夕方にロレートに着き、直ちに聖母の大聖堂に参詣した。パレスティナの地ガリラヤのナザレにあった聖母マリアの家が天使によってイタリアに運ばれ、のちロレートの教会に移されたとの言い伝えがある¹³³。高山右近の旧領であった摂津の茨木の潜伏キリシタンたちは大正年間まで秘かに信仰を守ってきたが、彼らの一人であった中谷家には「ロレート聖母浮彫画像」が伝存されてきた¹³⁴。

使節一行はイエズス会のコレジオに泊り、翌朝再び大聖堂を訪れた。なお同地のコレジオには一五七〇年に来日したオルガンティーノ神父が一五六五年に院長としていた。彼は翌年同地からインドに旅立った¹³⁵。伊東マンシヨは六月十三日付でローマの総会長に感謝の書翰を送り、ロレートの聖母の家を見学して深く慰められたことを伝え、同時に日本に戻る自分たちと一緒に多くの神父とイルマンを派遣してくれるよう懇請した¹³⁶。ローマを出立して一〇日が過ぎた時点で、使節一行は各地での歓迎攻めと訪問のため疲れがみえ、毎日四時間以上の睡眠はとれず、朝夕の馳走に加え慣れない食べ物のため消化不良の状態が続いていたことが、同行したイルマン・レニの総会長宛六月十三日付書翰から知られる¹³⁷。十四日(金)朝、大聖堂を訪れたのちロレートを発ち、手厚い出迎えを受けてアンコーナ

市に着いた。出迎えの人々の中には教皇シスト五世の甥ルドヴィコがいた。ペルージャの時より以上の人々の歓迎のなか宮殿に到着した。翌朝、アンコーナを発つてウルビーノ公領のセニガリアに向かい、ペザロに着いてウルビーノ公の館に一泊した¹³⁸。

使節一行は翌朝同地を発つて、チェゼナ、フォルリを経て十八日(火)にイモラに着いた。当市の文書館が所蔵する「市会記録」(第二三卷)には、イモラ市が使節四人に与えた処遇に感謝する六月十八日付の書状が見られる。イタリア語とローマ字日本語、そして漢字で書かれ、四人のローマ字による署名がある¹³⁹。翌十九日にポローニャ市に入った。聖体の祝日(二十日)に予定されていた聖体行列に間に合うようにペザロを出発していた使節は、イタリヤ風の金飾りの衣服を着て金の飾りのある黒の外套と帽子を被つて聖体行列に参加した。彼らは携帯聖体容器を運ぶ人を覆う天幕の前方の支柱四本を持つて市の判事たちを補助した¹⁴⁰。同地に三日間滞在し、二十二日(土)朝、同地を発つて二十三時頃にフェラーラに着き、エステ公の宮殿に宿泊した。その宿舎はフランス国王(アンリ三世)が数年前に接待された所であった。二十四日のサン・ジョアン・パウティスタ(聖洗礼者ヨハネ)の祝日には、使節はエステ公アルフォンソに随行して大司教座教会に行き、ミサに与つた。この日、中浦ジュリアンは激しい熱病に襲われたが、病氣は長引くことはなく小康状態を保つた¹⁴¹。二十五日(火)、使節一行はエステ公が所有する船でフェラーラを発ち、ポー河を下つてヴェネツィア領キオツジャに向かつた。同船にはほかに三隻の船が随航した。エステ公は中浦ジュリアンの病氣を慮つて医師をヴェネツィアまで同行させ、彼のために三つの船室の一室に寝台を置かせた¹⁴²。

ヴェネツィアの大統領が遣わしたキオツジャの市長が港からレグア手前の所でヴェネツィア元老院の名において使節一行を出迎えた。翌二十六日には、中浦ジュリアンの病氣に配慮して早朝の出発は見合わされた。キオツジャを出発した一行は、ヴェネツィアから二マイル離れたサント・スピリト修道院に至つて食事をとり、その後に元老院議員四〇人の歓迎を受けた。その後、使節はピアットと称する船に乗つてヴェネツィアに向かい、イエズス会のコレジオに着いた。多くの船とゴンドラが随航した。教会に入る前に、彼らは「テ・デウム・ラウドムス(我等、神なる汝



写真4-28 ヴェネチア少年使節記念碑拓本

(大村市立史料館所蔵)

を讃めたてまつる」の歌をもって甚だ莊重に迎えられた¹⁴³。

「ヴェネツィアにおける日本人使節への歓迎報告書」(のち「歓迎報告書」と略記)によると、ヴェネツィア市の心遣いにより、使節がヴェネツィアの町をゆっくり見ることができるよう、船は少し迂回してサン・ジョルジェからサン・マルコ広場の裏側に出て大運河を通過してサン・トロヴァソ河に入り、そこからジュデカの運河に出てイェズス会のコレジオの前の道に着いた¹⁴⁴。一日おいて二十八日(金)使節は宮殿において大統領ニッコロ・ダ・ポンテ(一四九八〜一五八六)に謁見し、日本の衣服二着、刀一振、脇差一振を贈呈した。「歓迎報告書」によると、脇差は二振である。謁見後、使節は武器室と宝庫に案内され、午後にはムラノに連れて行かれ、ガラス工場を見学した¹⁴⁵。

ヴェネツィア共和国は、聖体の祝日に当たる六月二十日に使節が到着すると予測して聖体行列を行った。その後、二、三日遅れて到着すると予想して、聖マルコの出現の祝日である二十五日(火)に、再度聖体行列を行うことをすべての学校に指示したが、使節が到着したのち、聖体行列は二十九日(土)の聖ペトロと聖パウロの祝日まで延期された。土曜日、使節は聖体行列の始まる前にサン・マルコ教会に赴いて荘厳ミサに参列し、そののち、トレ・ヴィレ宮殿から行列を見物した。山車が三〇〇台前後出て、ヴェネツィアではそれまで一番立派な行列であった、とされる¹⁴⁶。

七月四日(木)、使節は大統領に暇乞いのため政庁を訪れた。「歓迎報告書」によると、大会議室の広間には彼らの肖

画像が置かれ、十人会議室には刀と着物が展示されて説明文も刻まれていたとされるが、岡本良知によると、完成した肖像画は伊東マンシヨのみで、他の三人のは素描のみであった¹⁴⁷。肖像画がいつ描かれたのかは不明である。バルトリの「イエズス会史」によると、画家はジャコメ・チントレットで、彼には二〇〇〇クルザードが支払われた¹⁴⁸。肖像画の下には、イタリア語の説明をもった日本語の貼り紙を付けることが決まっていた、それにはこれら重要な人物の来訪とその理由、彼らの資格と身分が要約されて書かれ、彼らの署名があった¹⁴⁹。現在、これらの肖像画は不明であるという。

共和国が使節に贈った品々は金一〇〇〇スクードを超えるものであったとされる。「歓迎報告書」によると、深紅色ビロード 一反。深紅色羅紗 一反。深紅色ダマスコ織り 一反。深紅色ダマスコ織りと金糸織り 一反。深紅色タビ糸透かし織り 一反。紫色ビロード 一反。紫色ダマスコ織り 一反。紫色ダマスコ・金糸織り 一反。紫色タビ・金糸透かし織り 一反。大鏡、ゼミナ風の飾り絵で彩色されている 四面。黒檀縁の鏡 四面。諸種ガラス製品入り梱包 二個¹⁵⁰。千々石ミゲルが語るところによると、二個の大箱には五〇〇以上のガラス製品が入っていた¹⁵¹。フロイスは、贈物の第一として高価な象牙製の十字架四箇を記載している¹⁵²。

七月六日(土)、使節一行は二隻の船に乗り、多数の元老院議員に伴われてアルガルにあるサン・ジョルジェ教会に赴いて、そこでの宴に参加したのち、パドヴァに出発した。パドヴァには二日間滞留した。同地では第一にリスボン出身の聖人アントニオが住んでいた聖アントニオ修道院を訪れ、次いで公営の植物園 Horto carne を訪れた。園長のドイツ人ベルシオール・ギランデイーノは四冊の書物を使節に贈った。その第一冊にはオランダ人アブラハム・オルテリウスによって編纂された『コスモ・グラフィア *cosmographia* (世界の舞台)』が含まれていた。他の三冊には世界の最も著名な都市図があった¹⁵³。

使節一行は、七月九日(火)、パドヴァを発って、同じヴェネツィア領域のヴィチエンツァに赴き、同市の劇場で行われた丁寧な歓迎会に出席して楽器演奏を楽しんだ。翌日にはヴェロナに出発し、同地に二日間滞在したのち、七

月十三日(土)にマントーヴァ公領ヴィラフランカを經由してマントーヴァ市に入った。世子 Prince (皇太子)は父の名代として同市七マイル手前の地で使節一行を出迎えた。同市に到着した使節を出迎えたのは、病気のマントーヴァ公が遣わしたジェルサレムの総大司教シピオーネ・ゴンザーガであった¹⁵⁴。使節は宮殿に案内されて、そこに五日間滞在した。翌朝、使節は世子を伴ったマントーヴァ公グリエルモ・ゴンザーガの訪問を受けた。公は痛風のため輿に乗っていた。その後、彼らはマントーヴァ公の礼拝堂がある聖バルバラ教会のミサに出席した。歩行が困難であった公爵は輿に乗って教会に来た。ミサの際に演奏されたオルガン曲は公爵が作曲したものであった¹⁵⁵。マントーヴァ公が日本の使節に強い関心を持っていたことが知られる。彼はヴェネツィアに駐在する書記官ガブリエレ・カルツォニに対して、彼の名において使節を自領に招待することを申し出、終始使節に同行すべきことを命じただけでなく、一族の身分の高い騎士ムーティオ・ゴンザーガをヴィラフランカに遣わしていた。書記官カルツォニはヴェネツィアから使節の動静について詳しく報じていた¹⁵⁶。マントーヴァ公から厚遇された使節がマントーヴァ市を出発したのは七月十八日で、世子がガッツォロ城まで同行して見送った¹⁵⁷。

ミラノに向けてガッツォロ城を出発した使節はソスピロの町に行き、当地の主任司祭の農園で食事を取り、クレモナとの境で枢機卿スフォンドラートが遣わした馬車に乗り替えてクレモナ市に入った。その入市は祭り騒ぎと音楽演奏のうちに盛大で華々しいものであった。クレモナの枢機卿はローマで使節に会って、その来訪を要請していた。使節は枢機卿の宮殿に二泊し、彼が執り行なった十九日と二十日のミサに参列した¹⁵⁸。使節は二十一日(月)、周壁の外まで見送った枢機卿に別れてクレモナを發った。

使節がミラノに着いたのは、サンティアゴ(聖ヤコブ)の日である七月二十五日の夕刻であった。ミラノ公テラノヴァは市の外廊の門の外にあって二人の子息、全元老院議員及び騎乗した五〇〇人以上の貴顕と一緒に使節一行を出迎えた。入市した使節はイエズス会のコレジオに導かれ、同地に九日間滞在した。滞在中にスペインのエスコリアル修道院に送られることになっていた二八体の青銅像を見学した。それは一二使徒、四人の福音書家、四人の教会博士及び

他の聖人像からなっていた。四教会博士の一人、聖アンブロジオの遺骸にも参詣し、大聖堂をも訪れた。ミラノ公は別離に当たり、使節四人それぞれに剣と短刀とその帯を贈った。使節がジェノヴァから、同地を出航するスペイン行の艦隊についての報知を得てミラノを発ったのは、八月三日である¹⁵⁹。

使節はその日チェルトザ修道院に泊まり、翌日(日)、パヴィア市に着いてミサに与かり司教館に泊まった。五日、使節の出発に際し司教は馬車六両で一レグアの地まで同行した。使節がミラノ領最後の地ヴォゲラに着くと、ミラノ公が随行を命じていた騎士たちはそこで使節と別れて引き返していった¹⁶⁰。

八月六日、使節はジェノヴァ領ノヴィに向かい、オッタジオ、アツクエを経由してジェノヴァに着いた。到着の一マイル手前には、元老院議院四人と騎乗の貴顕が出迎えていた。使節は美しい馬四頭にそれぞれ騎乗して、イエズス会のアヌンシアタ(お告げの)教会に導かれた。翌日、ジェノヴァ共和国の大統領を表敬訪問した。スペイン艦隊の出航は二十四時と決められていたため、使節は午後八時に乗船した。九日(金)、ジェノヴァを出航した艦隊は、ヴォリオ神父の八月十三、十八日付のローマの総会長宛書翰によると、向かい風のためサヴォナから五マイルの地に碇泊し、翌朝再出航して、その日ないし翌日にロアナに、そして四日目にマルセイユに寄港した¹⁶¹。

使節一行がバルセロナに着いたのは、八月十六日(金)である。バレンシアの一イエズス会司祭ミゲル・ジュリアンによると、使節は馬車で市内に入り、翌日、市長や貴顕の表敬訪問を受けたのち、大聖堂に案内された。数日後にイエズス会のコレジオの別荘に赴いたが、中浦ジュリアンは四度目の発熱のため市内のコレジオに戻った¹⁶²。フロイスは、ジュリアンの病気のため、使節は二五日間郊外の別荘で過した¹⁶³、という。千々石ミゲルは、ジュリアンの病気のためバルセロナに二五日間滞在し、その大部分を田舎の家 *casa de campo* で過した。と述べる¹⁶⁴。

九月九日(日)、使節はバルセロナを発ってアラゴン州のモンソンに向かった。同地の離宮には国王フェリペが滞在していた。最初の日はバルセロナから七レグア離れたモンセラートの聖母修道院を訪れた。翌朝には修道院長の司式による荘厳な歌ミサがあり、院長は説教の中で特に日本人使節の旅について語った¹⁶⁵。モンセラートには聖ベネ

デイクト会の修道院がある。その聖堂は、イエズス会の創設者イグナティウス・デ・ロヨラが騎士の魂でもある剣を置いて神の兵士として働くことを誓った所である。使節のモンセラート巡礼は神によるロヨラの召命を、彼らは自らの召命として受けとめる契機となったようである。結城了悟は、使節はすでにローマの聖スタニラウスの墓前でイエズス会に入ることを決心していた、とする¹⁶⁶。

九月十一日、使節はモンセラートを発つてモンソンに向かい、同地には十四日に到着した。その三日目に離宮に参上して国王フェリペを表敬訪問した。国王は使節に対して、イタリアについての印象を聞き、中浦ジュリアンの病気に気遣いをみせた。使節はそれまでの旅の覚書を国王に捧呈した。ヌーノ・ロドリゲス神父がローマの総会長に送った一五八五年九月二十九日付書翰によると、国王は旅費として三〇〇ドゥカドを支給し、更にバルセロナからリスボンまでの馬車などの経費四〇〇ドゥカド以上を援助することを伝えた。使節が宿泊したのはバレンシアの総大司教の館であった¹⁶⁷。

九月二十日、モンソンを出発した使節はアラゴン州の都サラゴサに向かい、同地のイエズス会のコレジオに三日間滞在した。コレジオでは、学生たちがイタリア、スペイン、日本三カ国が出てくる対話劇を演じて使節一行を慰めた。同地には聖ヤコブ(サンティアゴ)が聖母マリアのために建てたとされるピラールの聖母教会があり、使節はここに参詣した。教会建立に関する言い伝えは『遣欧使節行記』の中で詳述されている¹⁶⁸。

使節はサラゴサからダロカに進み、アルカラには十月十五日に到着した。ヌーノ・ロドリゲス神父はその日のうちにマドリードに発ち、使節は同地に四日間留まった¹⁶⁹。使節がマドリードに入ったのは十九日頃である。更にオロペサを経由してポルトガル領内のヴィラ・ヴィンソザに戻って来たのは十月末頃であり、ブラガンサ公や母君カタリーナ女王の厚いもてなしを受けた。同地に四日間滞在したのち、十一月五日にエヴォラに向かった。エヴォラ市と大学関係者二〇〇人が一レグア手前の所まで出迎え、使節は大司教テオトニオ・デ・ブラガンサが遣わした馬四頭に騎乗して入市し、市民の歓迎を受けた。使節が宿泊したのはイエズス会のエスピリト・サントのコレジオ内にあった国王



写真4-29 エヴォラ大学内 元コレジオ礼拝堂

エンリケの館であり、ここに九日間滞在した。エヴォラ大学は十一月七日(木)に使節のための歓迎会を催し、それは二時間半も続いた。十日にはサント・アントニオ修道院を訪れ、また使節に同行していたイルマン・ジョルジュ・ロヨラが大司教テオトニオから叙品された¹⁷⁰⁾。

エヴォラを出発した使節は、テージョ河をはさんでリスボンの対岸にあるヴィレ・デ・ロザールのイェズ会の山荘 Casa de Retiro に至り、数日間滞在して休養を取った。リスボンには枢機卿差し回しの船でテージョ河を渡って入り、サン・ロケ教会付設の誓願者のコレジオに落ち着いた¹⁷¹⁾。リスボン入市の日付は明確でないが、十一月下旬頃であったであろうか。枢機卿は使節の滞在費として一五〇〇クルザードを支出したが、これは翌年春にリスボンを出発するまでの費用であった¹⁷²⁾。十二月四日(水)午前、サン・アントンのコレジオの神学生二五ないし三〇人が使節を迎えるためサン・ロケのコレジオを訪れた。使節は枢機卿の馬車でサン・アントンのコレジオを訪れて聖遺物を礼拝したのち、神学生たちが演じる対話劇を観た¹⁷³⁾。

十二月十六日(日)、使節はコインブラ市とイエズス会コレジオからの招聘を受けてリスボンを発ち、サントレン、トマールを経由して二十三日(月)にコインブラに着いた¹⁷⁴⁾。司教らが市外まで出迎えた。使節がモンデーゴ河に架かる橋を渡る際に、市の代表が簡単な挨拶の言葉を述べて歓迎の意を表明した。この時、河辺に建つ邸宅の塔からシャルメラ隊による音楽が吹奏され、市内の各教会の鐘がうち鳴らされた。この日、各学校は休講日とされた。使節一行は司教座教会に参詣し、司教からは十字架の木の聖遺物を贈られた。この時にも、様々な楽器による演奏があった¹⁷⁵⁾。

降誕祭(クリスマス)を迎えるに当たり、教会にはベトレヘムの洞窟を模したキリストの馬小屋の光景が見られた。そこには四福音書作家を引く凱旋の車が運ばれ、豊後のフランシスと有馬のプロタジオの王二人と大村の領主バルトロメウがキリスト教を保護しこれを信仰している有様が見られた、という¹⁷⁶。

クリスマスには、使節は大司教座教会でミサに与った。クリスマスの祝日の八日間後に、コインブラ大学の関係者二名が訪れて使節に大学訪問を要請した。メスキータ神父が不在であったため、これに応接したのはポルトガル語がよくできた伊東マンシヨであった¹⁷⁷。同大学では、かつてナバラ人の博士マルティン・デ・アスピルクエタが教会法を教えていた。ザビエルは彼を「おじ」と称し¹⁷⁸、リスボンからインドに旅立つ時、彼に書翰を送って別れを告げている。アスピルクエタの著書『告解提要』は、遣欧使節がもたらした活字印刷機によって一五九七年に印刷されている。使節は、イエズス会のコレジオでの聴講を許され、最上クラスの第一教室で、日本の宣教をテーマとした劇を観た。また第二のクラスでは、使節のポルトガル到着、旅の目的、宣教が成功した日本の状況が対話劇で語られ演じられるのを観た¹⁷⁹。学問の都市コインブラでの二〇日間の滞在を終えて、一五八六年一月九日、同地を発ってリスボンに向かった。その途中で、バタリヤとアルコバサの両修道院を訪れた¹⁸⁰。

使節が枢機卿アルベルトを訪れて帰国の挨拶をしたのは三月中であったが、その日付は不明である。枢機卿は使節のインド渡航の糧食用に、国王の名の下に四六〇〇クルザードを使節に下賜した。このほかにも、イエズス会のパードレたちのために三四〇〇クルザードを与えた。使節と一緒にイエズス会員三人がインドに渡航する予定であった。ポルトガル国王と枢機卿の使節に対する援助の総額は一万二〇〇〇クルザードと見積られていた。枢機卿はインド副王に書翰を送り、ゴアにおいて馬四頭を使節に与えることを命じた¹⁸¹。

メスキータ神父は、リスボンではヴァリニャーノ神父から購入を委託された活字印刷機と活字などの入手に奔走した。一五八四年八月にリスボンに到着して以来、この件が頭から離れることはなかったであろう。恐らく、リスボンのイエズス会に印刷機購入の斡旋を依頼してローマへ旅立ったと思われる。彼がリスボンに戻って来た時には既に購

入の手続きは終わっていたであろう。リスボンでは、イルマンのジョルジェ・デ・ロヨラと同宿コンスタンティーン・ドウラードが活字の原型(文字)を造ることを学んだ。ヴァリニャーノは総会長に対する一五八六年十二月二十二日付コチン発信の書翰で次のように述べている。「日本語で印刷することに関して、パードレ・アレシヤンドロ・レニが私に語ったところでは、イルマン・ジョルジェとコンスタンティーンが字母を造ることを学んでいる。このため、日本では何かが実行されるようになると思われます。中国語で作られたカテキスモは学問のある坊主たちのために何らかの役に立つでしょう¹⁸²。」レニはローマを出发した時にはイルマンであったが、リスボン到着時には司祭に叙階されており、使節と一緒にリスボンからインドに渡航した。イルマン・ジョルジェと同宿コンスタンティーンは、ローマン体(ローマ字)の活字だけでなく、日本語活字の習得も行っていた。リスボン滞在が短期間であったために、印刷技術の習得は不十分であった。ゴアでの習得が更に必要であった。

■二 リスボンから長崎帰着まで

一五八六年にインドに向けてリスボンを出帆した船は五隻で、使節一行は最も堅牢で安全とされたナウ船サン・フェリペ号に乗船した。枢機卿アルベルトは国王の名で使節に渡航経費四六〇〇クルザードを下賜した¹⁸³。グスマンによると、船隊は一五八六年三月終わり頃に出航したが、激しい嵐のため一日でリスボンに戻った¹⁸⁴。ヴァリニャーノはヌーノ・ロドリゲスに与えた一五八三年十二月一日付の訓令において、一五八六年三月までにヨーロッパを去るように、そのインド帰航時期を決めていた¹⁸⁵。使節一行は彼の指示を守って三月中にリスボンを出航したが、帰港を余儀なくされた。四月十日前後に、二八隻からなる船隊が再びリスボンを出帆した¹⁸⁶。ブラジルに向かう二三隻とインド渡航船五隻である。フロイスは使節一行が四月八日に乗船したとする¹⁸⁷。

サン・フェリペ号には、ヌーノ・ロドリゲスとメスキータの両神父、そして一七人のイエズス会宣教師が乗船し、他に一二名の同会宣教師が他の船に乗っていた¹⁸⁸。

再出帆後、船隊は順調な航海を続け、赤道に達したのち、そこでブラジル方向へ向かう二三隻とインド渡航の五隻

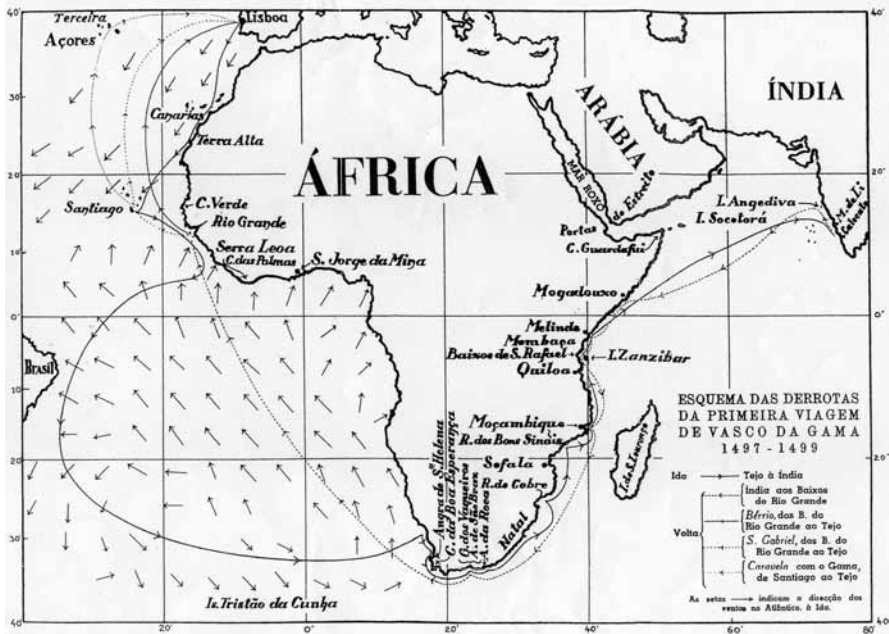


図4-7 リスボン・ゴア間航路図

(ヴァスコ・ダ・ガマの第1次航海航路誌 1497-1499)

は別れた。五月二十七日には赤道の彼方昼夜平分線から一四度に達したのちに突然暴風に襲われて、一番檣はしらの上に据えられた帆桁が真二つに折られ、この修理に三日を要した¹⁸⁹。七月七日に喜望峰に到達し、アフリカ大陸の南端アグーリヤス（アガラス）岬を通過してナタール附近の海岸に沿って北上し、暴風に遭遇しながらも、その後二日間平穏な船海を続けて、大陸とサン・ロウレンソ（マダガスカル）島の水道（マダガスカル海峡）に入った。この海域は「インド航路の墓場」と称されており、ジュディ Guddel」という暗礁があった。バルトリによると、使節一行がインドから乗船したガレオン船サンティアゴ号が数カ月前にこの暗礁に乗り上げて破損していた¹⁹⁰。大陸からは常に四レグアの距離を保って水深二四尋（一尋は一・五ないし一・八メートル）の辺りから陸に近づかないというのが「水路記」の訓であったが、船は速い潮流に押し流されて陸地に接近し、八月九日にはモザンビークを前にしてソファアラの浅瀬に乗り上げる危険にさらされた。バルトリによると、海岸には難破を期待して積荷を奪取する

ためカフレ族の原地住民が待ち構えていた¹⁹¹。八月十三日にはいつもより強い風が陸から吹き、船は沖合いに出て北方に帆走した。翌日には洋上で一ポルトガル船に出会い、サンティアゴ号難破について聞き知った。サン・フェリペ号は危機を脱して八月十八日にはモザンビークから北に三〇レグア離れたアンゴーシャ諸島に着いた。翌日にはモザンビーク入港の予定であったが、強い潮流と航海士の未熟のためモザンビークから三八〇レグアの所まで押し流されてしまい、同二十九日、順風を得て北進し、ようやく九月一日にモザンビーク港に達することができた。同船は同港に三日間碇泊してインドに向けて出帆したが、強い潮流のため押し戻されて港に戻った。出航時期は予定よりも既に四カ月半が経っていた。使節一行とイエズス会の宣教団は越冬を決定して、翌一五八七年三月までモザンビークに留まることになった¹⁹²。

モザンビーク要塞司令官ジョルジェ・デ・メネーゼスは、要塞に住むことになった使節一行を厚遇し、自費四〇〇クルザードを含む二四〇〇クルザードを貸与した。同地は不健康な土地であり、また暑熱のため、使節一行には六カ月半に及ぶ滞在は甚だ過酷であったようである¹⁹³。使節一行の同地滞在中に、彼らが乗船して来たサン・フェリペ号が同地から本国のリスボンに急拠折り返して帰航する事態になり、彼らのインド渡航は不透明となった。それは、インドを発つてリスボンに向かっていた船隊七隻のうちの一隻サン・ロウレンソ号が喜望峰に達する直前に暴風に見舞われて破損し、モザンビーク港に戻ってから解体され、その乗客と積荷がサン・フェリペ号に移されたためであった¹⁹⁴。

使節一行が乗船して来たサン・フェリペ号を除く四隻の船がゴアに到着したのは、一五八六年九月二十七日である¹⁹⁵。ヴァリニャーノはサン・フェリペ号に乗船した使節一行とイエズス会宣教師一九名についての消息を知って、彼らがモザンビークに逗留していると考え、インド副王ディオゴ・デ・メネーゼスに要請して、当時ゴアに碇泊していたモザンビーク要塞司令官の所有船ガレオタ船を差し向けてくれるよう申し出た。副王は早速要塞司令官に書翰を送って、使節一行がモザンビークに逗留中であるならば、前記ガレオタ船で彼らをゴアに送ってくれるよう依頼した。

司令官メネーゼスは副王の義兄弟であった¹⁹⁶。

使節一行が前記ガレオタ船に乗船したのは一五八七年三月十五日であった。船が出港するとすぐに激しい風が吹きつけ、翌日、大海に出ると激風のため船は浸水し難破の危険にさらされた。北半球に入ると、海上には逆風が吹き強い潮流のためメリンダ（ソマリア）の海岸まで吹き流されて、マガドーシヨ（モガデシュ）の町に近い半レグアの地に至り、同地に一二日間投錨した。幸いにも同地のスルトンの許可を得て食糧と水は補給できた。同地の沖をゴアに向かうポルトガルの小型船がたまたま通過したため、ヌーノ・ロドリゲス神父と伊東マンシヨはヴァリニャーノ宛の書翰を同船に託した¹⁹⁷。使節一行が乗船したガレオタ船は風のため更に一五日間同地に滞留し、五月半ばになってようやく進航して八日間インドの陸地に向かつて、五月二十八日にゴアから一二レグアの所にある「焼け岩」を認め、二十九日にゴアに入った¹⁹⁸。リスボン出帆から一三ヵ月半に及ぶ苦難続きの長い旅であった。航海中にバードレ二人が病死した。ヴァリニャーノは物見槽で見張りをしていた者からの報告を得てバードレたちを伴って直ちに港に迎えに出た。既に冬の初めであったため例年なら港口全体が塞がれている時期であったが、この年は冬の訪れが遅く港口はまだ塞がれていなかった。使節一行は、イタリア風の金と銀の服を身に着けてゴアの港に下り立った¹⁹⁹。

インド副王メネーゼスは、使節一行がゴアに滞在する間、食費として毎月一五〇クルザードを給与することを決定し、国王の命に基づいて使節四人がゴアで乗馬するための馬四頭を与えた。最良の美しいアラビア馬であった²⁰⁰。

使節一行がゴアに帰着して六日目の六月四日、使節の一人原マルティーニョが、聖パウロ学院においてヴァリニャーノに対する謝辞をラテン語で述べた。使節一行の航海と旅、そしてその結果について報告した。この演述は、リスボンから持って来た活字印刷機で翌年四月に一五頁からなる小冊子として印刷された。印刷者として日本人コンスタンティノー・ドウラードの名が見られる²⁰¹。

使節一行は、ゴア滞在の一ヵ月間の多くを市内から四分の一レグアあまりの地にあるサンタ・アナのイエズス会の別荘 *chiesa* で過した。たいへん涼しく良好な環境でゴアの気候と病氣から解放された環境にあった²⁰²。使節たち

のゴアにおける日課は、ヨーロッパの基本的な教養と学問について学び、楽器の練習に努めることであった。また、ヨーロッパでの旅行中に厚遇されたことに對する礼状を書くことに多くの時間が費されたようである²⁰³。

ヴァリニャーノは、船がマラッカに出帆する時までには遣欧使節がゴアに戻って来ると考えて、副王メネーゼスから豊臣秀吉に對する一五八七年四月付の親書を入手していた。これは、日本準管区長ガスパール・コエリヨが秀吉のイエズス会及びキリスト教に對する保護について配慮して、インド副王が贈物を添えて使者を派遣するよう副王に要請してくれるようヴァリニャーノに書翰を送ってきたからである。副王は使者に日本でよく知られ、また日本の事情に精通していたヴァリニャーノを指名した。しかし、既述のように、遣欧使節の帰着が遅れたためゴア出發は一年延期となった。副王の秀吉宛書翰の年紀が一五八八年に変更されたことは、書翰そのものを見ると容易に推測できることである。

ヴァリニャーノは秀吉に對する贈物の件で苦慮していたが、アラビア馬二頭及び野營のための天幕と銃を副王の名のもとに秀吉に贈ることについて、副王の了解を得た。最良の馬から選ばれた二頭の馬はそれぞれ一三〇〇ドゥカド（ドゥカド：クルザードとほぼ同価の旧貨幣單位）以上の価格であった²⁰⁴。

インド副王使節ヴァリニャーノと遣欧使節の一行は、一五八八年四月二十二日にマラッカに向けてゴアを出帆した。日本に行く予定のパードレとイルマン一七名が同乗した。彼らが乗船したナウ船がマラッカに着いたのは七月一日であった。ゴア・マラッカ間航路は普通三〇日間の航程であったが、七〇日間を要した。マラッカではイエズス会のコレジオに一二日間滞在した。七月十三日にポルトガル船二隻が同地を出帆したが、ヴァリニャーノと使節一行の乗った船は、二九日間を要して八月十一日にマカオに着いた²⁰⁵。同年、長崎に向かうナウ船は既にマカオを出帆していた。マカオに先着した船に乗っていた二人のパードレ、フランシスコ・ロドリゲスとテオドル・マンテルスがナウ船に乗ってマカオを發ち、八月十七日に長崎に着いてヴァリニャーノと使節一行についての消息を伝えた²⁰⁶。

ヴァリニャーノと使節一行はマカオに着いて秀吉が伴天連追放令を發令したことを知った。ヴァリニャーノは日本



写真4-30 『天正遣欧使節記』のタイトルページ
(東洋文庫所蔵本の複製版)

におけるキリスト教政策の変化について熟慮し、秀吉の許可を得た上で渡航することとして、福建省漳州のシナ人のジャンク船に託した書翰を、一五八八年八月十六、七日に長崎に到着したナウ船のカピタン・モール、ジェロニモ・ペレイラに送った。カピタン・モールのペレイラはその書翰を準管区長コエリヨにもたらした。彼は有馬鎮純と協議して秀吉の側近浅野長政に使者を遣わし、彼の取成しによって日本渡航の許可を得た。あくまでもインド副王使節として謁見を許すというものであった²⁰⁷。

しかし、一五八九年にはナウ船はマカオから長崎には渡航せず、ポルトガル・スペイン間の禁令を破って、メキシコに渡航した。ナウ船が日本渡航を中止したのは、秀吉による安価な生糸買い占めに抵抗したためである²⁰⁸。ヴァリニャーノと使節一行は更に一年マカオに留まることとなった。マカオ滞在は一年一〇カ月あまりに及び、まったく予想できない事態となった。この間、一五八九年九月十六日に使節の教育係でもあったイルマン・ジョルジェ・デ・ロヨラが病死した。彼の死は日本イエズス会には大きな人的損失であった。

このマカオ滞在中に、使節がリスボンからもたらした印刷機によって二冊の書物が印刷された。いずれもセミナリオの教科書として用いられるためであった。ジョアン・ボンニファシオの『キリスト教子弟の教育 Christiani pueri Institutio』(一五八八年)と、『天正遣欧使節記 De Missione Legatorum Iaponen』である。使節一行はヴァリニャーノから旅行中毎日日記を書くよう指図されていたため、ヴァリニャーノが各人の日記や備忘録などによって、またメスキータ

神父の報告に基づいてスペイン語の対話録を編纂した。彼はゴアにおいて執筆に着手し、マカオ到着後にこれを完成させた。デイオゴ・デ・サンデ神父がそれをラテン語に翻訳した。ラテン語文は三人のパードレたちの審査を経たのち印刷に付された。ヴァリニャーノは一五八九年十二月二十五日付の書翰において、一五九〇年二月末か三月中旬に印刷が終了するだろうと報じている²⁰⁹。

本書は、本文四一二頁、索引などを含めると四四四頁からなる大部な書物である。印刷には同宿コンスタンティーノ・ドウラードのほか、ゴアから同行したイタリア人イルマンのジョヴァンニ・バプティスタ・ペーチェ（ペーセ）が参与したであろう。彼はゴアで印刷術を習得し、日本では欧文の印刷を担当した人物である。印刷に着手した時点で、病死したジョルジュ・デ・ロヨラ修道士が参加していたか否かは不明である。しかし、ヴァリニャーノはセミナリオにおいてラテン語を理解しない者のために日本語本の印刷も計画し、ジョルジュはその日本語に従事していたが、実現しなかった²¹⁰。一五九〇年六月二十三日、使節一行がナウ船に乗船した時、印刷されたばかりのラテン語本『天正遣欧使節記』が積み込まれた。

遣欧一行は、インド副王使節ヴァリニャーノと共に、一五九〇年七月二十一日に長崎に帰着した。八年五カ月振りのことである。翌日、大村純忠の息子大村喜前サンチョが大村から長崎にやって来て使節一行に会った。二十三日には有馬鎮純プロタジオが長崎に来て、ヴァリニャーノと使節らと再会した。彼は弟のドン・レオンと家臣二三名を予め長崎に派遣してナウ船の到着次第報告するように命じていたからである²¹¹。千々石ミゲルは、マカオからの航海中終始病気であったため、ナウ船が長崎に着いた時も病床にあった。このため、有馬鎮純は彼を迎えに出たヴァリニャーノや伊東マンシヨらに会って挨拶をしたのち、すぐに千々石ミゲルを見舞い、三時間あまりも彼と語らった²¹²。フロイスによると、ミゲルは自分の従兄弟たちを識別していなかったが、彼が日本を出発した時には、鎮純は既に大人になっていたため、まもなく「有馬殿」を認識した。ミゲルの母は自分の息子を見分けることができず、原マルティニヨの両親も息子を識別できなかったし、中浦ジュリアンの姉妹も同様であった²¹³。一二、三歳の少年たちが一人

前の青年として現われたのであり、出迎えた人々には、彼らが八年五カ月間にそのように成長し変貌しているとは想像だにできなかったのであろう。

有馬鎮純はヴァリニャーノらに暇乞いする時、彼と使節四人が最初に有馬を訪れるよう申し出、有馬において教皇が彼に賜った剣・帽子・聖十字架を祝祭をして受領したいとの意向を示した。ヴァリニャーノは禁教令下であって伴天連たちが追放されているとの認識から公然たる祝祭を行う時機ではないと伝えた。しかし、鎮純は「関白殿」が日本の彼方の地方の戦いに忙殺されているため不都合はないと主張して、祝祭の延期を頑に受け入ようとしなかった。しかし、秀吉がその戦いに大勝利したとの報がもたらされて、鎮純はヴァリニャーノが都から戻ったのちに行うことにして祝祭を延期した²¹⁴。

ヴァリニャーノと使節一行が有馬に赴いたのは八月九日頃である。ヴァリニャーノは加津佐において第二回の日本イエズス会協議会が十三日から二十五日まで開かれたため、有馬には三日滞在しただけであったが、彼は鎮純の求めに応じて、城内に新築された屋敷に聖水を撒布し香を注いで祝福を与えた²¹⁵。この屋敷についての詳細な報告は、一五九五年三月に日野江城を訪れたスペイン人商人アピラ・ヒロンの著述に見られる²¹⁶。使節一行は、加津佐で協議会が開かれている間、有馬に留まつて鎮純の歓待を受けた。その後、使節は大村にドン・サンチョ喜前を訪ねた。千々石ミゲルは、教皇がドン・バルトロメウ純忠に遣わした返書を、息子の喜前に手交した。二人は従兄弟であったが、初対面であった。彼ら使節は大村でも厚い接待を受け、同地に八日滞在したのち長崎に戻ってヴァリニャーノと合流した²¹⁷。ヴァリニャーノは協議会終了後、八月三十一日に加津佐から長崎に戻るとすぐに病気にかかり、二五日間近く病床にあった。このため、大村喜前は上洛する前に長崎に来てヴァリニャーノに再会した²¹⁸。なお、喜前は教皇シスト五世に対して天正九年八月十日すなわち一五九〇年九月二十二日付の書翰をもって、従兄弟千々石ミゲルらが多大な恩恵をこうむり、亡き父ドン・バルトロメウが賜った荣誉と聖十字架と剣に対して感謝の意を伝えた。その署名は Omura Sain, Nobu-Achi, D. Saucó (大村・シン・ノブアキ ドン・サンチョ) である²¹⁹。

(新八郎)

²¹⁹。

喜前が実際にヴァリニャーノから教皇下賜の聖十字架と剣を拝受したのは、ヴァリニャーノが上洛して秀吉に謁見して長崎に戻って来たのちのことで、一五九一年五月中のことであった。ヴァリニャーノは四月末頃に平戸を経由して長崎に着き、その二日後に加津佐のコレジオに赴いた。更に、有馬を訪れて鎮純に教皇の親書と贈物を授け、祝宴に出席したのち加津佐に戻った。使節四人は有馬に八日間留った。その後、使節一行はヴァリニャーノと共に大村に赴き、喜前が父純忠に代わって聖十字架と剣を授かった拝受式に参列した²²⁰。

七 使節の上洛・秀吉との謁見

上方からの指示を受けて、インド副王で巡察師のヴァリニャーノは、十一月七日過ぎに長崎を發った²²¹。フロイスによると、オルガンティーノ神父のほかにも、二名の神父とイルマン一名及び八、九名のポルトガル人を伴って陸路長崎を出発し、諫早、佐賀、久留米、秋月、小倉を経由して下関に着いた。同地には、海路先發していた遣欧使節四人とメスキータ神父及び数名のポルトガル人が到着して彼らを待っていた。ヴァリニャーノの一行は同地に二日滞在し、瀬戸内海を五日間航海して播磨の室津に着いた。長崎出發から室津まで一七日間を要した。同地を治めていたのは小西行長の父隆佐ジョーチンであり、代官を務めていた。一行の中に十数名のポルトガル人が加わったのは、小西行長や黒田孝高らキリシタン大名の助言に従って、秀吉の疑惑を受けないように宣教師を少なくして俗人を多く同行することになったからであった²²²。

室津に着いたヴァリニャーノ一行は、同地に丸々二カ月間滞在を強いられた。それは、秀吉が小田原の戦いのため関東に長逗留したこと、仲介者浅野長政が奥州での一揆勃発により同地で冬を越したこと、また長崎の代官に任じられていた毛利吉成と鍋島直茂が都を去って国許に戻り、しかも室津でヴァリニャーノ一行と行き違いになったこと、副王使節のために秀吉に斡旋の労を取ってくれる者がいなかったためであった²²³。この間、事態を打開するためにオルガンティーノ神父と日本人イルマンの洞院ヴィセンテが上洛して黒田孝高シメオンを訪ねて助言を仰いだ。彼は

関東出陣中に秀吉にインド副王使節のために進言して、秀吉から叱責されていた。このため、彼は増田長盛に秀吉への働きかけを頼んだ。長盛の進言に対し、秀吉はヴァリニャーノが副王の使者として自分に会うことのみを目的とするなら、これを許容するとの意向を示した²²⁴。

ヴァリニャーノ一行は、二月十七日に室津を発って十九日に大坂に着き、同地に三日留まった。二十二日に淀川を川船で遡って鳥羽に至った。川船の手配と準備は黒田シメオンと増田長盛が行い、二月十五日に病死した秀吉の弟豊臣秀長が艤装を命じていた川船が使用された。都では、ヴァリニャーノは秀吉所有の屋敷を宿所とし、四人の使節とメスキータ神父はその向かいの屋敷に、ポルトガル人たちはその周辺の家に宿泊した²²⁵。

謁見は三月三日(日)、御所の向かいに所在した聚楽第で行われた。副王使節ヴァリニャーノは一段と目立つ塗り輿に、二人のパードレ、メスキータとアントニオ・ロベスも輿に乗った。他の二六名全員が騎乗した。伊東マンシヨら四名と通訳のイルマン、ジョアン・ロドリゲスとアンブロジーオ・フェルナンデス、遣欧使節に随従する小者 *hacendos* (若者) 七名とポルトガル人一三名であった。使節四人は教皇グレゴリオ一三世から贈られた金モールの縁飾りのある黒ビロードの長袍を着用し、小者も彼らから借用した衣服を着ていた²²⁶。

使節一行が聚楽第に向かう通りは多くの見物人で溢れていた。三条坊門の通りと室町通りが交差するところに所在した円福寺前には、公家西洞院時慶^{にしどういんときよし}らが陣取っていた。彼の日記「時慶卿記」には、次のような記事がある。

「天正一九年」閏正月八日、天晴、南蛮人殿下へ御礼申入、貴賤見物也、某も出候、円福寺前ニテ見物候、同道万里小路伯中御門等也、三十人余これ在り、各馬上也、主人一人ハヌリ輿也、五尺馬進物也、上下拵結構也、當時長崎にいたフロイスは、行列の様子について聞き書している。

先ず先頭に、甚だ豪華な馬具を付けた一頭の馬が進んだ。その馬は生来たいへん美しく見かけも大きかった。馬は非常に大きく美しい姿体であるため、それが通過した所ではどこでも常にそうであったように、日本人たちの目を引いた。このため、この馬に較べると、日本の馬はすべて鷲馬^{とば}のように思われる。二人のインド人馬丁がこ

れを引いていたが、彼らは色とりどりの絹製の長い外套を身に着け、頭にターバンを巻いていた²²⁷。

インド副王の贈物の目録にはアラビア馬二頭との記載があったが、日本には一頭のみが生きて着いた。行列の順序は、馬を引く馬丁の次に、大きな日傘をもったインド人若者と馬に乗った二人のポルトガル人が続き、次いで騎乗した小者、そして四人の使節が進み、この後にヴァリニャーノと神父二名が輿に乗って行き、残りのポルトガル人たちが続いた²²⁸。

聚楽第に到着した使節ヴァリニャーノは権中納言豊臣秀次邸でしばし休息したのち、関白秀吉の許に伺候した。彼は秀吉の前に進み出て拝礼し、一ポルトガル人が箱に入った羊皮紙に書かれたインド副王の書翰を秀吉に捧呈した。これには日本語に翻訳された書状が添えられた²²⁹。日本文の書状が朗読されたのち、ヴァリニャーノは、秀吉の控える座敷まで進んで司祭帽を脱ぎ片膝を床につけて三度拝礼した²³⁰。

この謁見式が終わって盃と肴が供せられた。秀吉はヴァリニャーノに盃を送り、自ら肴を与えた。次いで、銀と小袖がヴァリニャーノに贈られ、彼の同行者たちにも同様の贈物がなされた。銀の総額は二四九四タイス、絹の小袖は三六領であった²³¹。バルトリによると、銀の総額は一九〇枚、衣服は三六領であった²³²。

進物の儀式が終わってのち、秀吉の答辞が右大臣菊亭晴季らを通じて述べられた。これに対してヴァリニャーノが謝意を表明し、更に秀吉の謝辞が伝えられて謁見式はすべて終わった。この後、日本の慣例に従って宴が開かれた。宴の終わり近くになって、秀吉が輿の間から出て来て、通訳のイルマン・ジヨアン・ロドリゲスを介してヴァリニャーノと語り、更にポルトガル人たちに近づいていくつかの質問をした。また、伊東マンシヨとしばし語らい、自らの家臣として仕える気持ちがあればと強く仕官を勧めた。マンシヨは幼少からイエズス会のバードレたち、特にヴァリニャーノの恩義をこうむってきたため、それに背くことはできないと述べて秀吉の理解を得た。秀吉は千々石ミゲルとも語り、彼の生国や出自について問い、有馬氏との縁続きであることを確認して、「シモの領主たちがバードレたちや「インド」副王たちと深い交わりを持っているようだ、と言った²³³。」



①リラ・ヴィオラ



②ヴィオラ・ダ・ブラッチョ



③ヴィオラ・ダ・ガンバ



④リュート

写真4-31 天正古楽器(復元) 少年使節は、楽器を持ち帰り、秀吉の前で演奏をしている。上記の楽器は、当時のヨーロッパの楽器をイタリア在住のヴァイオリン製作者、石井 高が復元したものである。

(長崎歴史文化博物館所蔵、④リュートのみ大村市教育委員会写真提供)

食膳が片づけられたのち、秀吉は四人の使節に音楽の演奏を所望した。彼らはクラヴォ、ハーブ、ラウデ（アラウデ）、ラベキーニャを合奏し、これに合わせて歌った。バルトリは、クラヴォの代わりにハーブシコード *arpedio* を上げ、これはアルカラで、のちに枢機卿になったドン・アスカニオ・コロンナから贈られたものであると記載する²³⁴。秀吉はこの演奏に関心を示して三度演奏と歌唱を求め、一つ一つ楽器を手に取ってそれについて質した。更に、ヴィオラ・デ・アルコとレアレジオを弾くよう所望した²³⁵。

秀吉は音楽を聴いたのち、アラビア馬を見るために副王から贈られた天幕を中庭に張らせ、誰かポルトガル人が騎乗するよう命じた。彼は臨席した諸大名たちとポルトガル人の見事な乗馬を見物し、これを賞賛し驚嘆した。フロイスは「馬は他のすべての品々に勝って彼（秀吉）を喜ばせた様子であった」と指摘する²³⁶。ヴァリニャーノは二頭のうち一頭の馬しか日本に連れてこれなかったが、最良の馬を最良の状態で秀吉に送り届けるべく周到な配慮を示していたことが、彼に批判的であった日本の元上長フランシスコ・カブラルの一五九三年十二月十五日付、コチン発信の書翰から知られる。

彼（巡察師）が関白殿に与えた贈物の品々だけで、一万パルダオ以上に達した、と思う。当地から連れて行った二頭の馬とその馬具と飾りだけで金二〇〇〇パルダオ以上を消費した。そしてそれは、日本に到達するまでにかかった費用に較べて多いものではなかったからである。またこのために、獣医、蹄鉄工および調教師を連れて行ったためである²³⁷。

ポルトガル国王が遣欧使節に与えるよう命じた馬が、実際にインド副王を通じてゴアで彼らに供与され、副王贈与品の一つとして日本に運ばれて秀吉に贈られたことは、甚だ意義深いことであった。ヴァリニャーノがインド副王使節として遣欧使節を伴って禁教令施行下の日本に来て上洛し、彼ら使節を秀吉に面謁させようとした意図は、彼らが日本のキリスト教界を代表してヨーロッパ世界を親しく見聞して帰国した事実を、キリスト教を迫害する天下人秀吉に知らしめることにあったのかも知れない。ヴァリニャーノは、遣欧使節の偉業を宣伝し強調することによって秀吉

八 遣欧使節派遣の意義

の心境の変化に期待し、逼迫状況にあったキリスト教界の復活に一縷の望みを託したかのようである。

一五八二年二月二十日に長崎を出発した遣欧使節の旅と公的な役割は、一五九一年三月三日の京都聚楽第における関白秀吉との謁見をもって完結したと言ってもいいようである。インド副王使節ヴァリニャーノは、秀吉の副王宛返書の受領をオルガンティーノ神父とイルマンのジョアン・ロドリゲスに託して、三月二十五日に京都を発って長崎に戻った。

使節四人は教皇から託された有馬・大村両氏への使命を果たしたあと、イエズス会に入ってキリスト教の宣教のために一身を捧げる準備をした。伊東マンシヨは豊後の大友吉統や従兄弟の伊東氏からの仕官の勧めがあり、千々石ミゲルも有馬氏からの誘いがあった。しかし、イエズス会に入るとはローマ滞在中から考えていたことであり、帰国するまでに多くの試練を経るなかで、彼等の決意は強固になっていた。六月二十五日に、彼らは天草の河内浦でヴァリニャーノによってイエズス会への入会を許された。ヴァリニャーノはローマの総会長に対する一五九一年十月六・

九日付の長文の書翰において、彼らの入会の経緯を次のように報じて、その門出を祝っている。

四人全員は、この世を捨ててイエズス会に入ること
決断して、私たちの主(神)が多くのことをヨーロッパ
において見聞するために、そして彼らが見聞した
ヨーロッパの現実の証人となるために、彼らを選んだ
以上、今、彼らが日本において別の仕事(務め)を行
なうことは正しくないし、また、この世の俗事に耽け



写真4-32 南蛮漆器聖龕
(大村市立史料館所蔵)



写真4-33 南蛮漆器小洋櫃
(大村市立史料館所蔵)

彼らを感じた召命に従って私たちの主に奉仕するのを止めることになるため、デウスに背くことは決してすべきではないし、彼らの靈魂を明らかな危険にさらすこともすべきでない、と言いました。

彼らは各人が個別に、また全員一緒に甚だ慎しみ深く、度々これと同様のことを私に願いました。それは、彼らの身内の者たちが立腹しないように、その問題を引き延ばしていたためでした。それで、身内の者たちは彼らと話し合って、それが固い考えであることを理解するに至りました。そして、彼らすべてをより一層深く考えるため数日間の修練（靈操）を行なったのちに、私は他の多くのパードレと共に彼らを天草に連れて行きました。そこにはすでにコレジオとノビシアドがありました。そして、全員の共通した大きな喜びと満足のうちに、私たちは使徒サンティアゴ（聖ヤコブ）の祝日である「一五」九一年七月二五日に彼らを「イエズス」会に迎えました。莊嚴な歌ミサが多声聖歌 *canto dorado* と様々な楽器をもって執行され、キリスト教徒たちに話された説教では、彼らの聖なる名譽な決断について述べられました²³⁸。

右のヴァリニャーノの書翰の一節からも明らかのように、四人の使節は彼らがヨーロッパのキリスト教世界を實際に体験した証人としての認識をもって帰国し、ヴァリニャーノやイエズス会の宣教師たちが彼らに期待した「語り部」としての役割を果たしていくことになる。彼らは「語り部」としての最大の使命が、彼ら自らがイエズス会に入つてイルマンとなり司祭となることである、と理解していたはずである。

使節四人をヨーロッパに導いたメスキータ神父は、ローマでの一連の行事が終わった時点で、遣欧使節派遣が成功裏に終わりその使命が果たされたことをインドに残留したヴァリニャーノに報告した。フロイスはその報告を七点に要約して伝えている。

第一に、日本のキリスト教徒の王侯 *Reys e Principes* がヨーロッパに日本人公子たち *scathones* の使節を派遣したこの行動は、それから帰結する多くの成果によって、十分に調整され準備されたものであった。

第二に、彼らが到着したすべての地においてイエズス会に向けられた大きな賛辞である。

第三に、この遣使によって日本国民について大いに認識され信頼が得られたことである。それについては、年端も行かぬ少年たちが勇敢にも祖国、父母、親戚、友人、生まれ故郷を離れて来たことがいかに可能であったかということ、演説したすべての者が称賛した。……このようにして、彼らを東洋の聖なる王 *of Sarrus Rays de Orient* と称した。なぜなら、彼らの謙遜、礼節、誠実、徳性を知って、ある聖人たちの着衣に行うかのように、彼らの衣服にロザリオを触れたからである。

第四に、彼らの良き教養、謙遜、思慮分別及び全員が心のうちに有していた協調性を見たことで、彼らが平和、愛情、沈着をもって、特に宗教的な諸儀式に出席する際に認められる美德と信心をもって生活している「ということである」。

第五に、彼らが有する素質と明晰な能力であって、故国を出発したのちの旅路だけでも、彼らが多く of の事柄を学ぶことができたことに驚嘆した。殊に、彼らがラテン語で何ごとかについて話すのを聞いて、私たちの言葉でも書いていることにたいへん驚いた。

第六に、人々がたちまち彼らに親愛を感じるようになる大きな愛と、際立った親しさである。人々は彼らと交わりを重ねるほどに、ますます親しくなった。

第七に、彼らが通過した「イエズス会の」すべての管区 *Provincias* において引き起こした絶大な熱狂と大きな願望である。それは、心から日本に行こうとする希望をかき立てた。トレドに住んでいた尊敬すべき古参のバードレ・ミゲル・デ・トルレスのように、高齢の老人までがそうであった ²³⁹。

遣欧使節の一行がポルトガル・スペイン、イタリア旅行の先々で大いに歓迎されたことは、既に見てきたとおりである。世界の涯なる遠国、しかも異教の国から来た新しいキリスト教徒というだけでも十分に話題性があつたが、使節一行の矜持を保った生活態度と行動がヨーロッパの人々に強い感銘を与えたことは、メスキータの報告から十分に納得されることである。グスマンもまた、ヨーロッパにおける使節の有りようについて称賛した一人である。彼は使節が所期の目的を果たし、自らの信仰を強め、彼らを派遣した王侯と市民が宣教師から聞いていたことが事実である

ことを確めた、と指摘する⁽²⁴⁰⁾。

遣欧使節が、未知の国である日本をヨーロッパ世界に広く知らしめ、日本についての関心を一気に高める契機となったことは、彼らの教皇謁見記、日本に関する小冊子や関連の書物が集中的に出版された状況から知ることができ。使節がローマを訪れて教皇に謁見した一五八五年には四九点の関連書が出版された。同年から一五九三年までに出版された日本関連の出版物は七八点である⁽²⁴¹⁾。イタリアのローマやヴェネツィアのほかに、ヨーロッパ各地の大都市、パリ、リオン、ルーアン、リエージュ、アウグスブルク、ジュセルドルフ、プラハやポーランドのクラコウなどで印刷出版された。しかし、グワルチエリの『日本遣欧使節記』が出版されたのを機に、遣欧使節に関する出版物は減少していった、とされる⁽²⁴²⁾。日本関連書の出版は、一五八六年に六点、一五八七年に三点、一五八八年に七点、一五八九年に六点、一五九〇〜九二年は各一点、一五九三年は四点である。

前述したメスキータの報告に見られるように、遣欧使節派遣を契機にヨーロッパの宗教者、特にイエズス会の会員たちを新生の日本へとかき立てる状況が生まれた。マテウス・デ・コウロスやマヌエル・バレットの両神父はその影響を受けた。一五八六年四月に遣欧使節がリスボンを出発した時、彼らと共に出発したイエズス会宣教師の中には、一五九〇年七月に来日した者が五名いた⁽²⁴³⁾。

遣欧使節がイエズス会の評価を更に高めたことはメスキータの報じるとおりである。極東における三十数年にわたる宣教活動の成果がこの使節に凝縮されていると思われるのであろう。ヴァリニャーノが意図した目的の一つは見事に達成された。

使節がリスボンから招来した活字印刷機がヨーロッパ文化の移植と発展の手段となったことは、彼らが日本とヨーロッパの両文化の交流の懸橋となったことを意味している。一五九〇年から始まった印刷によって五〇種ないし一〇〇種の出版物、いわゆるキリシタン版が印刷された。現存する三二種七四本には、キリスト教教理(ドチリナ・キリシタン)はもとよりヨーロッパの思想・哲学の書や文学書などが含まれている。印刷機によって銅版画の製作が



写真4-34 グーテンベルク式活版印刷機（復元模型）天正遣欧少年使節がヨーロッパから持ち帰った活版印刷機の復元模型（南島原市加津佐図書館所蔵、大村市教育委員会写真提供）



写真4-35 ティセラ日本図

（大村市立史料館所蔵）

の聖ヤコブの祝日に二年の修練期を終えて誓願を立てた²⁴⁴。彼らは修練期が終わらないうちにコレジオでラテン語を学び始め、ペドロ・ゴメス神父が編集したラテン語の『神学綱要』を用いたペドロ・モレホン神父の講義を受けた²⁴⁵。モレホン神父はリスボンから使節と行動を共にした一人である。

伊東マンシヨは、原マルティーニヨ及び中浦ジュリアンと共に、一六〇八年に司祭に叙階された。しかし、千々石ミゲルは、一六〇一年頃にイエズス会を退いて大村喜前に仕え、神浦と伊木方に六〇〇石を領した。喜前が幕府との長崎浦上替地を機にキリスト教を棄てたことに伴い、彼も棄教したようである。彼は清左衛門を称したが、喜前との関係が次第に悪化し、一六〇六年には従兄弟の有馬晴信（鎮純）の許に避難した。しかし、有馬でも憎まれて重傷を負い、一六一二年前後に長崎に移った。彼についての消息は一六二二〜二三年頃までしか確認されない²⁴⁶。旧領伊

なされ、それを土台にした宗教画が多く描かれた。使節がもたらした地図帳や都市図は、日本における初期洋風画の基礎を築くことに寄与し、地図屏風や南蛮屏風製作に大きな影響を与えた。遣欧使節が日本とヨーロッパの文化交流に深く関わったことをあらためて確認することができる。

イエズス会に入会した四人は、一五九三年七月二十五日

木力の地に、千々石清左衛門の墓石と推定される墓碑がある。紀年銘は、「寛永九年十二月十二日・十四日」（一六三三年一月十九日・二十一日）である²⁴⁷。

司祭になった伊東マンシヨは、豊前小倉のレジデンシアに居住して長門・周防の宣教に従事し、故国の日向にも巡回宣教を試みたが、一六二二年十一月十三日に長崎のコレジオで病死した²⁴⁸。

語学の才能に恵まれた原マルティーニヨは、修養書『ぎや・ど・ぺかどる』の翻訳に関わった。また『コンテムツス・ムンヂ』や『ドチリナ・キリシタン』の再版に際しては、その改訂作業に参加して中心的存在となったことが、メスキータ神父の一六一三年十二月二日付の書翰から知られる²⁴⁹。信望の厚かった



写真4-37 長崎市 勝山町遺跡出土 メダイ
(長崎市サント・ドミンゴ教会跡資料館所蔵)



写真4-36 長崎市 勝山町遺跡出土 十字架
(長崎市サント・ドミンゴ教会跡資料館所蔵)



写真4-38 松東院メンシア肖像
(公益財団法人 松浦史料博物館所蔵、大村市教育委員会写真提供)
※松東院メンシアは、大村純忠の娘で肥前平戸藩主松浦久信の正室

原マルティーニヨ神父は、日本人パードレたちの指導者と目され、ヴァレンティン・カルヴァリオは日本管区長に就任すると、彼を重用して秘書としたが、ヨーロッパ人パードレたちの批難が強かった。このため、禁教令が出ると、日本に残留することを許されず、一六一四年十一月にマカオに行くことを余儀なくされた²⁵⁰。マカオでは、ジョアン・ロドリゲス神父の『日本教会史』の執筆を補助した。一六二九年

十月二十三日に、同地のサン・パウロ・コレジオにおいて死没した。

ヨーロッパの旅行中、つねに病気に苦しんでいた中浦ジュリアン神父は、ただ一人殉教者となった。彼は一六〇六年



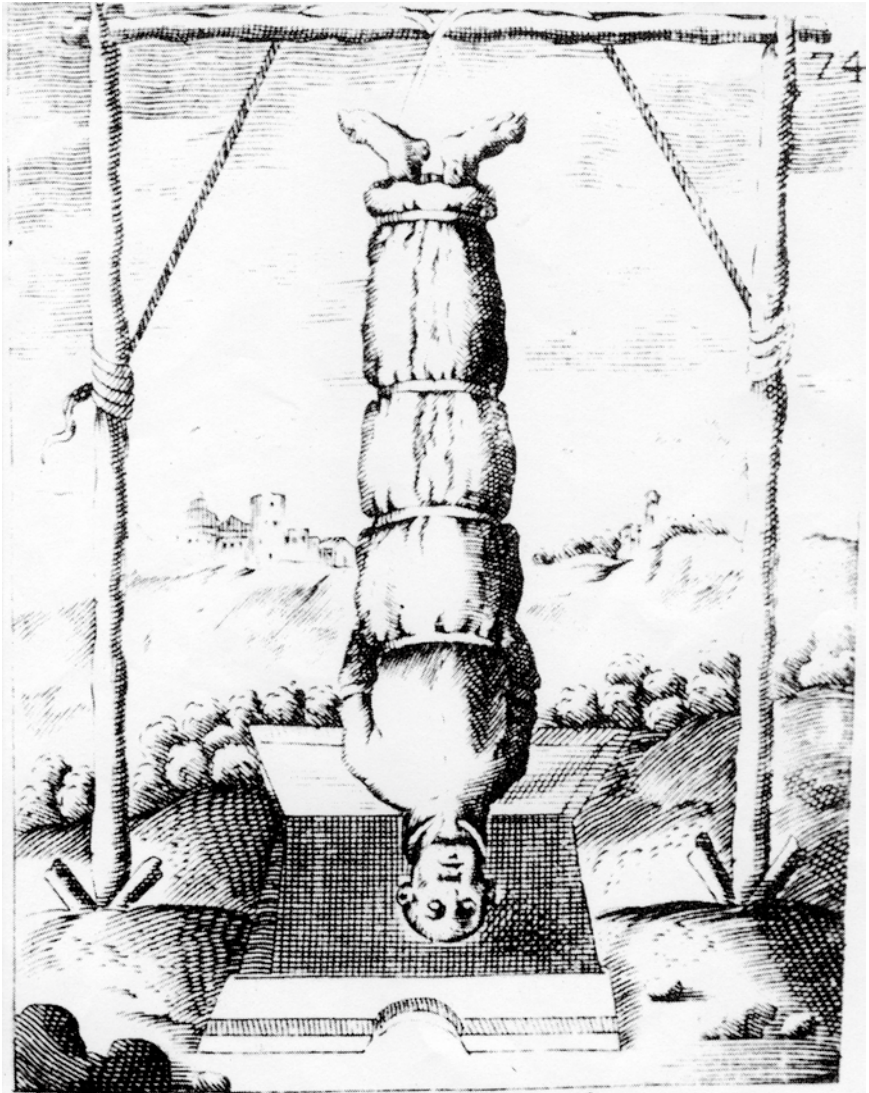
写真4-39 セントポール大聖堂(マカオ)
(大村市教育委員会提供)

九月に伊東マンシヨと原マルティニョと共に副助祭となり、一六〇八年九月に司祭に叙階した。京都、長崎、有馬のセミナリオ、更に博多を活動の場とした。一六一四年の禁教令施行後も長崎に潜伏し、のち口之津を拠点にして九州各地を巡回宣教した。ついに一六三三年に豊前小倉において、同宿トマス・リヨウカンと共に捕われて長崎へ護送された。十月十八日に穴吊しの拷問にかけられたが、四日間これに耐え、十月二十一日に落命した。六二歳であった²⁵¹⁾。

(五野井隆史)

註

- (一) DE MISSIONE LEGATORUM IAPONEN solum ad Romanam curiam, rebusq. in Europa, ac toto itinere animaduversis DIALOGVS ex EPHEMERIDE IPSORVM LEGATORVM COLLEGTVS, & IN SEMNEM LATINVM VERSVS ab Eduardo de Sante Sacerdote Societatis IESV. Macaensi. 1590. 泉井久之助他訳『テ・サンテ天正遣欧使節記』(雄松堂書店 一九六九)、ラテン語版からのポルトガル語文 DIALOGO SOBRE A MISSÃO DOS EMBaixADORES JAPONESSES A CÚRIA ROMANA, por Américo da Costa Ramalho. Macau, 1997.
- (2) DE MICCONE f.4. DIALOGO. p.27 泉井久之助他訳『テ・サンテ天正遣欧使節記』(雄松堂書店 一九六九) 六〇七頁
- (3) DE MISSIONE. ff. 6~7. DIALOGO. pp. 28~29. 泉井久之助他訳『テ・サンテ天正遣欧使節記』(雄松堂書店 一九六九) 九〇~一〇頁
- (4) DE MISSIONE. ff. 7~8. DIALOGO. pp. 29~30. 泉井久之助他訳『テ・サンテ天正遣欧使節記』(雄松堂書店 一九六九) 一一〇~一一三頁
- (5) Luis Frois. Tratado dos Embaixadores Japões. ff. 1v~2v. ルイス・フロイス原著・岡本良知訳註『九州三侯遣欧使節行記』(東洋堂 一九四一) 三二五頁
- (6) 泉井久之助他訳『テ・サンテ天正遣欧使節記』(雄松堂書店 一九六九)では、ヴァリニャーノが、「豊後と有馬の王フランシス



P. Iulianus Nacamura Iappon, Societ. IESV olim Romani
 legatus ad Summū Pontificem pedib' sulphureis & in conuā emāu
 tenuis depressus quarta die moritur Nāzāchi: 27. 1650.
 in ordin' Filii

写真4-40 西坂で穴吊りの拷問を受ける中浦ジュリアン (カルデム著『日本殉教精華』1650年刊の挿絵から)

- 「ゴブロタジオ及び大村侯ハルトロメオと談合して」となる 一三三頁
- ⑦ Jap. Sin. 10 II, f. 284.
- ⑧ 井手勝美訳「日本イエズス会第一回協議会(一五八〇八一)と東インド巡察師ヴァリニャーノの裁決(一五八二)」(キリシタン文化研究会編『キリシタン研究』第二十二輯 吉川弘文館 一九八二) 二九一～二九二頁
- ⑨ Alexandro Valignato S.J., *Advertimentos e aviso acerca dos costumes e catangues de Jappão*. (Giuseppe Fr. Schütte, *Il Cerimoniale per i Missionari del Giappone*. Roma, 1946). *A. ヴァリニャーノ著・矢沢利彦・筒井砂共訳『日本イエズス会土礼法指針』キリシタン文化研究シリーズ5 (キリシタン文化研究会 一九七〇)*
- ⑩ Schütte, *Il Cerimoniale*. pp. 118～120.
- ⑪ *ibid.* p. 120.
- ⑫ *ibid.* p. 136.
- ⑬ フロイス、一五六五年四月二十七日付、都發信書翰(Cartas. I, f. 184v)
- ⑭ Alejandro Valignano. S. I., *Sumario de las cosas de Japon (1583)*. *Adiciones del Sumario de Japon (1592)*, por José Luis Alvarez-Taladriz. Tokyo, 1954. 松田毅一他訳『日本巡察記』東洋文庫二二九(平凡社 一九七三)
- ⑮ *Sumario de las cosas de Japon*. pp. 235～239.
- ⑯ 泉井久之助他訳『テ・サン・テ天正遣欧使節記』(雄松堂書店 一九六九) 七〇四、七〇九頁
- ⑰ DE MISSIONE. ff. 156～157. *DIALOGO*. p. 238. 前掲註(16) 四三八頁
- ⑱ Cartas, Segunda Parte. ff. 39, 39v. 松田毅一監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第三期第6卷(同朋舎出版 一九九一) 五九頁
- ⑲ *ibid.* f. 39v.
- ⑳ 前掲註(8) 二八九、三二七頁
- ㉑ Jap. Sin. 9 II, ff. 173v., 174.
- ㉒ *Tratado*. f. 1v.
- ㉓ ヨゼフ・フランシス・シュツテ編・佐久間正・出崎澄男訳『大村キリシタン史料—アフォンソ・デ・ルセナの回想録—』(キリシタン文化研究会 一九七五) 一一六～一二七頁
- ㉔ 東京大学史料編纂所編『大日本史料』第十一編別巻之一(東京大学出版会 一九七四復刻)には、マドリード所在の歴史学士院

- 図書館が所蔵するローマ教皇とイエズス会総会長宛書翰のスペイン語訳文が所載され、その日本語訳文が付けられている(原文編 二七一～二七二頁、二七五頁、日本語訳文、三二二～三二四、三二六～三二七頁)
- ②5 Tratado. #. 32, 73～73v. 日本語訳文は、ルイス・フロイス原著・岡本良知訳註『九州三侯遣欧使節行記(東洋堂 一九四二) 一九〇～一九一頁、三八四～三八五頁
- 幸田成友『日欧通交史』(岩波書店 一九四二) 一〇三頁
- 金七紀男編訳『ポルトガル 2』(ほるぶ出版 一九八二) 三七～四〇頁
- ②7 松田毅一『大村純忠伝』(教文館 一九七八) 一五九頁
- ②8 東京大学史料編纂所編『天日本史料』第十一編別巻之一(東京大学出版会 一九七四復刻) 三二〇頁の挿入写真
- ③0 前掲註(26) 一〇四頁の挿入写真
- ③1 前掲註(29) 原文一〇～一四頁 訳文一〇～一二頁
Tratado. f. 1v.
- ③2 前掲註(29) 原文一九六頁 訳文二六～二七頁
- ③3 木下李太郎(太田正雄)『木下李太郎全集』第二十一巻(岩波書店 一九八二) 二九～三〇頁
- ③4 ヴァリニャーノのイエズス会総会長宛 一五八三年十月二十八日付、コチン発信書翰(Jap. Sin. 9II, f. 173.)
Tratado. #. 2v～3.
- ③5 H・チースリク『キリシタン時代の邦人司祭』キリシタン文化研究シリーズ22(キリシタン文化研究会 一九八二) 六〇頁
- ③6 Segunda Parte das Cartas de Japão. Evora. 1598. f. 17v.
- ③7 北有馬町編『有馬のセミナリヨ 関係資料集』(北有馬町役場 二〇〇五) 五七～五八、二六八～二六九頁
- ③9 前掲註(29) 三五四頁
- ④0 ヴァリニャーノの『Apologia de la Compañia de Jesus de Japon y China (1598)』の抄本「インシム」ミゲルの正使「
ブルテン」シエロマンの副使 Mancius et Michael legati, Martinus et Julianus socijs』の抄本(Edición por Jose Luis Alvarez-Taladriz. Osaka. 1998. p. 57).
Apologia. p. 57.
- ④2 前掲註(29) 三六〇頁 原文三二〇頁
- ④3 東京大学史料編纂所編『天日本史料』第十一編別巻之二(東京大学出版会 一九七四復刻) 二二頁 原文一八～一九頁
- ④4

- (45) 一五九三年一月作成の日本イエズス会の名簿は、中浦ジュリアンがイエズス会に入ってまもなくの名簿であるが、それによる「十三歳」あり、一五六九年の出生となる (Josef F. Schütte s.J., *MONUMENTA HISTORICA JAPONIAE I. Textus Catalogorum Japoniae. Romae. 1975. p. 318*)。
- (46) 前掲註(44) 二二頁 原文一九頁
- (47) 西海町教育委員会編『西海町郷土誌』(西海町 二〇〇五) 一五九頁、小佐々学「小佐々弾正・甚五郎塚と中浦ジュリアン」(大村史談会編『大村史談』第四十八号 大村史談会 一九九七)
- (48) 小佐々学「王正遣欧少年使節中浦ジュリアンの出自について」(大村史談会編『大村史談』第三十五号 大村史談会 一九八九) 一六一四年十一月に作成された日本イエズス会の名簿によると、ドゥワードはこの時四八歳であり、また一六一七年作成の名簿にも「五十一歳」あり、生年は一五六六年となる (Schütte, *Catalogum*, pp. 588, 677)
- (49) Schütte, *ibid.*, pp. 125, 174~175, 218.
- (50) Segunda Parte das Cartas de Japão. #. 20v.~21. Schütte, *ibid.*, pp. 113, 156~157, 180. *ibid.*, pp. 112, 128, 310.
- (51) DIALOGO, pp. 34~35. 前掲註(16) 二二~二三頁「タニエルロ・バルトリ編『耶穌会史』(東京大学史料編纂所編『大日本史料』第十一編別巻之一 東京大学出版会 一九七四復刻)
- (52) ルイス・フロイス原著・岡本良知訳註『九州三侯遣欧使節行記』(東洋堂 一九四二) 三六頁
- (53) DIALOGO, pp. 40~41, 43. 前掲註(16) 三三~四二頁、前掲註(44) 四六~四八頁、グワルチエリ「日本遣欧使者記」(木下李太郎全集)第二十一巻、岩波書店 一九八二) 三五~四二頁
- (54) 前掲註(44) 四八頁
- (55) DIALOGO, p. 43. 前掲註(16) 四二頁、グワルチエリ「日本遣欧使者記」(木下李太郎(太田正雄)「木下李太郎全集」第二十一巻 岩波書店 一九八二) 四一~四二頁
- (56) グワルチエリ「日本遣欧使者記」(木下李太郎(太田正雄)「木下李太郎全集」第二十一巻 岩波書店 一九八二) 四三頁
- (57) 前掲註(59) 四三頁
- (58) DIALOGO, p. 66. 前掲註(19) 八二頁、Tratado, #. 3v.~4. 前掲註(59) 四三頁
- (59) Joseph Wichi, *DOCUMENTA INDICA. XII. Romae. 1972. p. 888.*
- (60)
- (61)
- (62)

- ⑥3 DIALOGO. pp. 70~72. 前掲註(16) 九四~九五頁、Tratado. #. 5~6. 前掲註(55) 四六~四八頁、前掲註(59) 四三~四九頁
- ⑥4 DIALOGO. pp. 169~171. 前掲註(16) 二九八~三〇二頁、Tratado. #. 6v~9. 前掲註(55) 七一~七七頁、結城了悟『新史料 天正少年使節』(キリシタン研究第二十九輯 南窓社 一九九〇) 六一頁
- ⑥5 Tratado. #. 8v~9. 前掲註(55) 七七頁
- ⑥6 海老沢有道『キリシタン南蛮文学入門』(教文館 一九九二) 一六九頁
- ⑥7 Tratado. #. 9v. 前掲註(55) 九二頁、DIALOGO. p. 171. 前掲註(16) 三〇二頁
- ⑥8 Tratado. #. 10v. 12v. 前掲註(55) 九三頁。DIALOGOとは、滞在は七日間とある(p. 173)。前掲註(16) 三〇七頁
- ⑥9 DIALOGO. p. 173. 前掲註(16) 三〇七頁、Tratado. f. 11v. 前掲註(55) 九七頁
- ⑦0 DIALOGO. pp. 175~178. 前掲註(16) 三一一~三一一頁、前掲註(55) 五四頁、Tratado. #. 18. 24v~25v. 前掲註(55) 一三三頁、一四九~一五二頁、一五八~一五九頁
- ⑦1 DIALOGO. pp. 184~186. 前掲註(16) Tratado. f. 26v. 前掲註(55) 一六四~一六六頁
- ⑦2 結城了悟『新史料 天正少年使節』(キリシタン研究第二十九輯 南窓社 一九九〇) 五六頁
- ⑦3 Tratado. f. 30. 前掲註(55) 一八四頁
- ⑦4 DIALOGO. pp. 186~187. 前掲註(16) 三三四~三三五頁、Tratado. #. 30~33v. 前掲註(55) 一八八~一九三頁
- ⑦5 Tratado. f. 38v. 前掲註(55) 二二八頁
- ⑦6 DIALOGO. p. 194. 前掲註(16) 三三〇頁、Tratado. #. 40~40v. 前掲註(55) 一三三~一三三頁
- ⑦7 DIALOGO. p. 194. 前掲註(16) 三三〇頁、Tratado. #. 40v~41. 前掲註(55) 一三三頁。なお、フロイスはマドリード滞在を二十六日間と述べている。
- ⑦8 DIALOGO. pp. 194~195. 前掲註(16) 三五一~三五一頁、Tratado. #. 40v~43. 前掲註(55) 一三九~一四二頁
- ⑦9 DIALOGO. pp. 195~197. 前掲註(16) 三五一~三五六頁、Tratado. #. 43v~47. 前掲註(55) 二四一~二六五頁
- ⑧0 DIALOGO. p. 199. 前掲註(16) 三五八~三五九頁、Tratado. #. 49~49v. 前掲註(55) 二七三~二七四頁。フロイスは「セオルノ Livorno をシマルネ Jorne ヲ記載す」。
- ⑧1 DIALOGO. pp. 200~201. 前掲註(16) 三六〇~三六一頁、Tratado. #. 49v~50v. 前掲註(55) 二七四~二七七頁
- ⑧2 DIALOGO. pp. 202~203. 前掲註(16) 三六五~三六六頁、Tratado. #. 51v. 54. 前掲註(55) 二七八~二八四頁

- ⑧3 Tratado. #. 56v~57. 前掲註(56) 三〇九~三二〇頁
 DIALOGO. p. 212. 前掲註(16) 三五四頁
 ⑧4 DIALOGO. pp. 212~214. 前掲註(16) 三八四~三八八頁、Tratado. #. 56v~59. 前掲註(56) 三一一~三二四頁、
 三二六頁、前掲註(56) 七〇頁
 ⑧5 Tratado. f. 57. 前掲註(55) 三二〇頁
 ⑧6 前掲註(29) 原文三三一頁 訳文二七一頁
 前掲註(29) 原文二九~三〇頁 訳文二七〇~二七一頁
 ⑧8 Tratado. f. 59. 前掲註(55) 三二六頁、DIALOGO. p. 215. 前掲註(16) 三九二頁
 ⑧9 DIALOGO. p. 215. 前掲註(16) 三九〇~三九二頁
 ⑨0 前掲註(29) 原文二五〇頁 訳文二九二頁
 ⑨1 Tratado. f. 59. 前掲註(55) 三二六~三二七頁
 ⑨2 *ibid.* f. 60. 前掲註(55) 三二九、三三七~三三八頁
 ⑨3 前掲註(29) 二二八頁
 ⑨4 前掲註(29) 原文一九七~二〇〇頁 訳文二二八~三三三頁、Tratado. #. 60v~61v. 前掲註(55) 三四〇~三四三頁
 ⑨5 Tratado. f. 62. 前掲註(55) 三四四頁
 ⑨6 *ibid.* f. 62v. 前掲註(55) 三四四頁、DIALOGO. p. 217. 前掲註(16) 三九四頁
 ⑨7 *ibid.* #. 62v~63v. 前掲註(16) 三四五~三四八頁、DIALOGO. p. 217. 前掲註(16) 三九四頁
 ⑨8 Tratado. #. 71v~72. 前掲註(56) 三八一~三八三頁、前掲註(29) 原文二七四~二七五頁 訳文三二五~三二六頁
 ⑨9 前掲註(29) 原文二二七頁 訳文二五五頁、Tratado. #. 68v~69. 前掲註(55) 三七五~三七六頁
 ⑩0 前掲註(29) 二五九~二六〇頁、Tratado. f. 63. 前掲註(55) 三四七頁
 ⑩1 Tratado. #. 64v~65. 前掲註(56) 三五一~三五二頁、DIALOGO. pp. 218~219. 前掲註(16) 三九六頁、前掲註(29) 二六〇頁
 ⑩3 Tratado. #. 74~74v. 前掲註(55)、『同書』は、この女は一〇〇余名である。DIALOGO. p. 223. 前掲註(16)、『同書』は、孤
 児の女性は一六〇余名である。また『ムカシシウスの儀典日記』では、一二八名となる。
 ⑩4 前掲註(72) 八三~八五頁

- 105) Tratado. f. 76. 前掲註(55) 三九六頁。DIALOGO. p. 238. 前掲註(16) 四三六頁、同書では、三月二十九日でなく三十日である。
- 106) Tratado. ff. 76~76v. 前掲註(55) 三九六~三九八頁、DIALOGO. p. 238. 前掲註(16) 四三七~四三八頁
前掲註(29) 原文三二六頁 訳文二二七頁
- 107) Tratado. f. 76. 前掲註(55) 三九六、四一六頁
DIALOGO. p. 238. 前掲註(16) 四三九頁。岡本良知は、中浦ジュリアンは病気が治癒してミサに参列した、とする。前掲註(5) 四二七頁
- 109) Tratado. ff. 76v~78. 前掲註(55) 三九八~四〇一頁、DIALOGO. p. 241. 前掲註(16) 四四五~四四六頁
DIALOGO. p. 244. 前掲註(16) 四五三頁、Tratado. f. 79v. 前掲註(55) 四〇五頁
- 110) 岡本良知に「ある」實際には四人が参加した。前掲註(5) 四三六頁
DIALOGOとは、土曜日、すなわち二十七日となる(p.247.前掲註(16) 四六〇頁)
- 111) Tratado. ff. 81v~82v. 前掲註(55) 四四九~四五〇頁、DIALOGO. p. 249. 前掲註(16) 四六一頁
前掲註(29) 原文一八九頁 訳文三三四頁
- 112) DIALOGO. pp. 251~252. 前掲註(16) 四六四~四六八頁
前掲註(29) 原文二九四頁 訳文三三八~三三九頁
- 113) 前掲註(29) 原文三〇七~三一〇頁 訳文三五五~三六〇頁
- 114) Tratado. f. 83. 前掲註(55) 四五一~四五二頁
前掲註(29) 原文三〇四~三〇七頁 訳文三五一~三五五頁
- 115) 前掲註(72) 七九~八一頁
- 116) 仙台市史編さん委員会編『仙台市史 特別編⑧ 慶長遣欧使節』(仙台市 二〇一〇) 二九八~二九九頁
- 117) Tratado. f. 83v. 前掲註(55) 四五三頁、DIALOGO. pp. 253~254. 前掲註(16) 四七〇~四七一頁
- 118) 新井トシ訳『グスマン 東方伝道史』下巻(養徳社 一九四五) 三〇六頁
- 119) Tratado. f. 84v. 前掲註(55) 四五六頁
ibid. ff. 84~84v. 前掲註(55) 四五五~四五六頁、DIALOGO. p. 254. 前掲註(16) 四七二~四七三頁、松田毅一・川崎桃太郎『フロイス 日本史』11(中央公論社 一九七九) 三〇五頁。フロイスは「中に十字架の木片をおさめた聖遺物匣

Relicario」の表記を*。

- 127 Tratado. f. 84v. 前掲註(55) 四五六頁、DIALOGO. p. 255. 前掲註(16) 四七三頁
前掲註(59) 一三九～一四三頁
- 128 Tratado. f. 84v. 前掲註(55) 四五六頁
前掲註(72) 七八～七九頁
- 130 Tratado. f. 85. 前掲註(55) 四五七頁、DIALOGO. p. 255. 前掲註(16) 四七四頁
前掲註(72) 九二頁
- 131 Tratado. f. 87v.～88v. 前掲註(55) 四九〇～四九二頁、DIALOGO. pp. 256～258. 前掲註(16) 四七八～四八二頁、前掲註(72) 一一六～一二三頁
- 132 吹田市立博物館編『高山右近とその時代―北摂のキリシタン文化―平成10年度特別展(吹田市立博物館 一九九八) Schütte. Catalogorum p. 1261.
- 133 前掲註(72) 一一五～一二六頁
- 134 前掲註(72) 一一三～一二四頁
- 135 前掲註(72) 一一九～一三〇頁、Tratado. f. 90. 前掲註(55) 四九三～四九四頁
- 136 前掲註(44) 三三～三三頁
- 137 前掲註(44) 原文二七頁 訳文二〇頁、Tratado. f. 91. 前掲註(55) 四九六頁、DIALOGO. p. 262. 前掲註(16) 四九〇頁
- 138 Tratado. f. 91v.～92. 前掲註(55) 四九七～四九九頁、DIALOGO. p. 263. 前掲註(16) 四九二頁
- 139 Tratado. f. 92v.～93v. 前掲註(55) 四九九～五〇二頁、DIALOGO. p. 264. 前掲註(16) 四九四～四九五頁
- 140 Tratado. f. 93v.～94v. 前掲註(55) 五二五～五二七頁、DIALOGO. p. 265. 前掲註(16) 四九五～四九七頁、前掲註(72) 一六〇頁
- 141 前掲註(72) 一七三頁
- 142 Tratado. f. 95v.～96. 前掲註(55) 五二九～五三〇頁、前掲註(72) 一七四頁
- 143 前掲註(72) 一七二～一七五頁、Tratado. f. 96. 前掲註(55) 五三〇～五三二頁
- 144 前掲註(72) 一七六頁

- ⑭⑧ 前掲註(29) 八三頁、前掲註(16) 一〇〇頁
 ⑭⑨ Tratado. f. 97v. 前掲註(55) 五三四、五四七頁、DIALOGO. p. 287. 前掲註(16) 五四四頁
 ⑭⑩ 前掲註(72) 一七六頁
 ⑭⑪ DIALOGO. p. 287. 前掲註(16) 五四四頁
 ⑭⑫ Tratado. f. 97v. 前掲註(55) 五三四頁
 ⑭⑬ DIALOGO. pp. 288~289. 前掲註(16) 四四六~四四八頁、前掲註(150)
 ⑭⑭ Tratado. ff. 98v~100. 前掲註(55) 五五〇~五五三頁、DIALOGO. p. 289. 前掲註(16) 五四八~五五一頁
 ⑭⑮ Tratado. ff. 100~100v. 前掲註(55) 五五四頁、前掲註(72) 一九四、二〇三頁
 ⑭⑯ 前掲註(29) 原文八〇~九一 訳文一〇二~一〇四頁、前掲註(16) 一〇二~一〇三頁
 ⑭⑰ Tratado. f. 102v. 前掲註(55) 五五九頁
 ⑭⑱ *ibid.* ff. 102v~103. 前掲註(55) 五七三~五七四頁、DIALOGO. pp. 293~294. 前掲註(16) 五五八~五五九頁
 ⑭⑲⑰ Tratado. ff. 104~106v. 前掲註(55) 五七六~五八二頁、DIALOGO. pp. 298~299. 前掲註(16) 五六六~五六九頁、前掲註(72) 二〇九、二一九頁
 ⑭⑲⑱ Tratado. f. 107. 前掲註(55) 五八二頁
 ⑭⑲⑳ 前掲註(72) 一一六~一二四頁、Tratado. ff. 108~108v. 前掲註(55) 五八四~五八五頁、DIALOGO. p. 301. 前掲註(16) 五七五頁
 ⑭⑲㉑ 前掲註(72) 一一九頁
 ⑭⑲㉒ Tratado. f. 108v. 前掲註(55) 六一九頁
 ⑭⑲㉓ DIALOGO. p. 302. 前掲註(16) 五七八頁
 ⑭⑲㉔ 前掲註(72) 一一九~一二〇頁、DIALOGO. p. 303. 前掲註(16) 五八〇頁
 ⑭⑲㉕ 前掲註(72) 一二八頁
 ⑭⑲㉖ 前掲註(72) 一二三六頁、DIALOGO. p. 303. 前掲註(16) 五八〇~五八一頁、Tratado. ff. 108v~109. 前掲註(55) 六〇六頁
 ⑭⑲㉗ DIALOGO. pp. 303~304. 前掲註(55) 三〇三~三〇四頁、前掲註(72) 一三七頁
 ⑭⑲㉘ 前掲註(72) 二五九頁

- (170) Tratado. f. 109v. 前掲註(55) 六〇五〜六〇六頁、DIALOGO. pp. 305〜306. 前掲註(16) 五八五〜五八六頁
DIALOGO. p. 306. 前掲註(16) 五八七〜五八八頁
ibid. p. 306. 前掲註(16) 五八八頁
- (171) Tratado. ff. 113~113v. 前掲註(55) 六一七頁
DIALOGO. pp. 307~308. 前掲註(16) 五八八〜五九二頁
- (172) Tratado. ff. 110~111. 前掲註(55) 六〇七〜六一二頁
DIALOGO. p. 316. 前掲註(16) 六一一頁
- (173) Tratado. f. 111v. 前掲註(55) 六二二頁
H・チースリック「新発見のキリシタン版」(キリシタン文化研究会編『キリシタン文化研究会会報』通号90(27巻3号) キリシタン文化研究会 一九八七)
- (174) DIALOGO. p. 314. 前掲註(16) 六〇六〜六〇七頁
Tratado. f. 113. 前掲註(55) 六一六頁
- (175) ibid. f. 114. 前掲註(55) 六一八、六三九頁、DIALOGO. p. 317. 前掲註(16) 六一四〜六一五頁
Jap. Sin. 10 II. f. 214v.
- (176) Tratado. f. 113v~114. 前掲註(55) 六一七〜六一八頁
前掲註(24) 三三七頁
- (177) ルイス・フロイス原著・岡本良知他編譯『九州三侯遣欧使節行記』続編(東洋堂 一九四九) 六頁
グスマンは、出帆日を四月十日、サンデは四月十二日、グワルチェリとバルトリは四月十三日とする。
- (178) Tratado. f. 114. 前掲註(55) 六一八頁
DIALOGO. p. 319. 前掲註(55) 六一九頁
ibid. p. 320. 前掲註(55) 六三三頁、前掲註(29) 原文二二七頁 訳文二六八頁、前掲註(185) 一〇頁
前掲註(29) 二七〇頁
- (179) 前掲註(29) 二七〇〜二七一頁、DIALOGO. p. 321. 前掲註(16) 六二四〜六二五頁
- (180) DIALOGO. pp. 322~324. 前掲註(16) 六三二〜六三三頁、前掲註(29) 二七三頁、前掲註(185) 一五頁
DIALOGO. p. 324. 前掲註(16) 六三三頁

- 194) *ibid.* p. 325; 前掲註(16) 六三三頁、前掲註(29) 二七三頁
前掲註(29) 二七四頁、前掲註(185) 一七頁
- 195) DIALOGO. pp. 325, 327. 前掲註(16) 六三三～六三四、六三八頁、前掲註(29) 二七四～二七五頁
- 196) DIALOGO. pp. 325～326. 前掲註(16) 六三四～六三六頁、前掲註(29) 二七六頁
- 197) DIALOGO. p. 326. 前掲註(16) 六三六頁
- 198) ヴァリニヤーノのエヴォラの大神教テオトニオ・デ・ブラガンサ宛、一五八七年十二月一日付、ゴア発信書翰 (Segunda Parte das Cartas de Iapao. Evora. 1598. f. 232. 松田毅一監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第三期第7巻(同朋舎出版 一九九四) 二六三頁、前掲註(85) 一一～三三頁
- 199) *ibid.* 前掲註(16) 六三九頁
- 200) Segunda Parte. f. 233v～234. 松田毅一監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第三期第7巻(同朋舎出版 一九九四) 二六七頁
- 201) 前掲註(85) 五一～五二頁
- 202) ヴァリニヤーノの総会長宛 一五八八年十月十八、三十日付、マカオ発信書翰 (Jap. Sin. 10II. f. 338v.)。前掲註(85) 四四頁
- 203) DIALOGO. p. 328. 前掲註(16) 六四二頁
- 204) ガスバル・コエリヨの総会長宛 一五八九年二月二十四日付、「一五八八年度日本年報」(Segunda Parte. f. 237v.～238) 前掲註(85) 九〇～九二頁、C. R. Boxer, *The Great Ship from Amacon*. Lisboa. 1963. p. 51.
- 205) DIALOGO. p. 345. 前掲註(16) 六七五～六七六頁、前掲註(29) 一九二頁、Boxer. pp. 52～53.
- 206) 前掲註(185) 八四～八五頁
- 207) 前掲註(185) 八五頁、前掲註(29) 一九四頁
- 208) 前掲註(124) 四九七～四九八頁
- 209) Luis Frois, *HISTORIA DE JAPAM*, anotado por José Wrichi. Vol. V. Lisboa. 1984. pp. 187～188. 前掲註(85) 一〇三～一〇四頁、松田毅一・川崎桃太訳『フロイス 日本史』11 (中央公論社 一九七九) 三五二～三五三頁
- 210) HISTORIA. V. p. 188. 前掲註(85) 一〇四頁、松田毅一・川崎桃太訳『フロイス 日本史』11 (中央公論社 一九七九)

- 三五一頁
- 214 *ibid.* p. 189. 前掲註(185) 一〇五～一〇六頁、松田毅一・川崎桃太訳『フロイス 日本史』11 (中央公論社 一九七九) 三五三～三五四頁
- 215 *ibid.* #. 190～191. 前掲註(185) 一〇六～一〇八頁、松田毅一・川崎桃太訳『フロイス 日本史』11 (中央公論社 一九七九) 三五四～三五六頁
- 216 佐久間正他訳『アヒラ・ヒロン 日本王国 大航海時代叢書Ⅻ(岩波書店 一九六五) 七四～七九頁
- 217 *ISTORIA*. p. 191. 前掲註(185) 一〇九、一一六頁、ルイス・フロイス『三 一五九〇年十月十二日付、長崎発信、ルイス・フロイスのイエスス会総長宛、一五九〇年度・日本年報』(松田毅一監訳『十六・七世紀イエスス会日本報告集』第一期第一巻 同朋舎出版 一九八七) 一五〇、一六五頁
- 218 前掲註(185) 一一六～一七頁
- 219 前掲註(29) 原文二四五～二四六 訳文二九九～三〇二頁、松田毅一監訳『十六・七世紀イエスス会日本報告集』第一期第一巻 (同朋舎出版 一九八七) 一八九～一九二頁
- 220 *ISTORIA*. V. pp. 334～338. 松田毅一・川崎桃太訳『フロイス 日本史』12 (中央公論社 一九八〇) 七二頁、前掲(124) 五五一～五五二頁
- 221 バルトリは、長崎出發を十一月末とする。前掲註(29) 三二二頁
- 222 *ISTORIA*. pp. 272～278. 前掲註(185) 一一一～一三八頁、松田毅一・川崎桃太訳『フロイス 日本史』2 (中央公論社 一九七九) 五三～六一頁
- 223 *ibid.* p. 279. 前掲註(185) 一三八～三九頁、松田毅一・川崎桃太訳『フロイス 日本史』2 (中央公論社 一九七七) 一六四～一六五頁
- 224 *ibid.* pp. 288～289. 前掲註(185) 一四二～一四四頁、松田毅一・川崎桃太訳『フロイス 日本史』2 (中央公論社 一九七七) 七九～七九頁
- 225 *ibid.* pp. 294～295. 前掲註(185) 一五四頁、松田毅一・川崎桃太訳『フロイス 日本史』2 (中央公論社 一九七七) 八八～八九頁
- 226 *ibid.* pp. 298～299. 前掲註(185) 一六一～一六二頁、松田毅一・川崎桃太訳『フロイス 日本史』2 (中央公論社 一九七七) 九四頁

- 227) *ibid.* p. 300. 前掲註(185) 一六三頁、松田毅一・川崎桃太訳『フロイス 日本史』2(中央公論社 一九七七) 九六頁
ibid. 前掲註(185) 一六三〜一六四頁、松田毅一・川崎桃太訳『フロイス 日本史』2(中央公論社 一九七七) 九六〜九七頁
 228) HISTORIA. pp. 301~302. 前掲註(185) 一六四〜一六六頁、松田毅一・川崎桃太訳『フロイス 日本史』2(中央公論社 一九七七) 九七〜九九頁
 229) *ibid.* pp. 303~304. 前掲註(185) 一六七〜一六八頁、松田毅一・川崎桃太訳『フロイス 日本史』2(中央公論社 一九七七) 一〇〇〜一〇二頁
 230) *ibid.* p. 305. 前掲註(185) 一七〇頁、松田毅一・川崎桃太訳『フロイス 日本史』2(中央公論社 一九七七) 一〇二頁
 231) 前掲註(29) 三三〇頁
 232) HISTORIA. pp. 307~308. 前掲註(185) 一七三〜一七四頁、松田毅一・川崎桃太訳『フロイス 日本史』2(中央公論社 一九七七) 一〇五〜一〇六頁
 233) 前掲註(29) 歐文二七二頁 訳文三三三頁
 234) HISTORIA. p. 308. 前掲註(185) 一七五頁、松田毅一・川崎桃太訳『フロイス 日本史』2(中央公論社 一九七七) 一〇七頁
 235) *ibid.* p. 309. 前掲註(185) 一七六頁、松田毅一・川崎桃太訳『フロイス 日本史』2(中央公論社 一九七七) 一〇八頁
 236) J. wichi & John Gomes. DOCUMENTA INDICA. XVI. Romae. 1984. pp. 542~543. 結城了悟『天正少年使節―史料と研究―(純心女子短期大学・長崎地方文化史研究所 一九九二) 一〇九〜一一〇頁
 237) Jap. Sin. 10 II. #. 249v~250. 結城了悟『天正少年使節―史料と研究―(純心女子短期大学・長崎地方文化史研究所 一九九二) 一一八頁
 238) Tratado. #. 459~461. 前掲註(55) 四五九〜四六一頁
 239) 前掲註(124) 三三八〜三三九頁
 240) Adriana Boscaro. Sixteenth century European printed works on the first Japanese Mission to Europe. Leiden. 1973. p. xiv.
 241) リュドミール・M・エルマコワ『天正遣欧使節とポーランド―隠された絆―(国際日本文化研究センター編『日本研究』第27集 国際日本文化研究センター紀要 二〇〇三) 八〇頁
 242) 前掲註(55) 六四〇〜六四二頁
 243) 前掲註(55) 六四〇〜六四二頁

- 246 245 244
 結城了悟『天正少年使節―史料と研究―』（純心女子短期大学・長崎地方文化史研究所 一九九二） 一三四頁
 前掲註（37） 七三〜七四頁
- ヨゼフ・フランツ・シュツテ編、佐久間正・出崎澄男『大村キリシタン史料―アフォンソ・デルセナの回想録』キリシタン文化研究シリーズ12（キリシタン文化研究会 一九七五） 二〇二頁
- 249 248 247
 大石一久『千々石ミゲルの墓石発見』（長崎文献社 二〇〇五） 八二〜八三頁
 前掲註（37） 七六〜七八頁
- 251 250
 五野井隆史『イミタティオ・クリステイ』から「こんでむつすむん地」まで―De Imitatione Christi（『キリストに倣いて』）とイエズス会と日本のキリシタン―（藤女子大学キリスト教文化研究所編『藤女子大学キリスト教文化研究所紀要』第九号 藤女子大学キリスト教文化研究所 二〇〇八） 一四〜一五頁
- 五野井隆史『徳川初期キリシタン史研究』（増訂版）（吉川弘文館 一九九二） 三〇六頁
 前掲註（37） 一〇四〜一〇五頁、一一二〜一二三頁